一般国道２３号中勢道路（４・７工区）建設事業に伴う

西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群
小塚遺跡・石垣遺跡
発掘調査報告

２０１８（平成30）年11月

三重県埋蔵文化財センター

写１　西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群遠景（南西から）

写２　西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群近景（南西から）

写３　ＳＸ29・30（西毛谷北５号墳）（東から）

写４　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）遺物出土状況（北から）

写５　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）南壁（南東から）

写６　ＳＸ49（北から）

写７　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）出土遺物

写８　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）出土耳環（左から44・45・46）

序

三重県の北東部に広がる伊勢平野は、西側に布引山地と鈴鹿山脈がそびえ、東側は伊勢湾に臨む、豊かな自然が残された地域です。

今回報告する西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群・小塚遺跡・石垣遺跡は、全てその伊勢平野に所在する遺跡です。

一般国道23号中勢道路建設に伴い遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査を実施しました。調査の結果、地域の歴史を解明していく上で、重要な手がかりを得ることができました。

特に、中ノ川と田中川にはさまれた丘陵上にある西毛谷北古墳群では、７世紀中頃から８世紀初頭の古墳が４基見つかりました。全て方墳で、その内の１基の埋葬施設では、一面に炭が広がっており、それを方形にとりまくように立てられた木材が焼けた状態で見つかりました。炭の中からは長頸壺、平瓶、高杯、杯など須恵器26点と耳環３点が出土しました。

この古墳は木材を利用して部屋（横穴式木室）をつくり、中に遺体を安置した後、火をかけて焼いたものと考えられ、カマド塚とも呼ばれます。県内では、これまでに横穴式木室の古墳は６例見つかっており、その内４例が火をかけられています。

発掘調査を終えたところは、やがて道路となり多くの人や車が行きかうことでしょう。

開発が進み私たちの生活が豊かになることは大切なことですが、古くからこの地に生活していた人々の「営み」を記録し保存していくことも重要なことです。本書によって、消滅してしまった遺跡を少しでも皆さまに知っていただき、埋蔵文化財に対するより一層のご理解とご協力を賜ることができれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成30年11月

三重県埋蔵文化財センター
所長　野原　宏司

例　　言

1．本書は、三重県津市河芸町杜の街に所在する西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群、鈴鹿市北玉垣町に所在する小塚遺跡、同市末広北１丁目に所在する石垣遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局長より委託を受けて、平成24・26～28年度にかけて一般国道23号中勢道路建設に伴って実施した。また、整理・報告書作成業務を平成24～30年度に実施した。
調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

3．調査および整理は、次の体制により実施した。
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
土木作業　西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群
第１次調査：株式会社文化財サービス
第３次調査：安西工業株式会社
第４次調査：安西工業株式会社
小塚遺跡
第１次調査：橋本技術株式会社（24年度）、西武緑化有限会社（26年度）
第２次調査：ホクセイテック株式会社
石垣遺跡
第１次調査：橋本技術株式会社（24年度）、西武緑化有限会社（26年度）
株式会社アーキジオ（27年度）
第２次調査：株式会社アーキジオ
第３次調査：株式会社アート

4．現地調査について、西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群は、第１次調査：長谷川哲也・原田恵理子、第３次調査：長谷川哲也・原田恵理子、第４次調査：長谷川哲也・原田恵理子・出村雅実が担当した。小塚遺跡は、第１次調査：竹内和昭・岩脇成人（24年度）、田中久生（26年度）、第２次調査：長谷川哲也・原田恵理子・小原雄也・長谷川真史[研修員]（28年度）が担当した。石垣遺跡は、第１次調査：竹内和昭・岩脇成人（24年度）、田中久生（26年度）、長谷川哲也・原田恵理子（27年度）、第２次調査：長谷川哲也・原田恵理子（27年度）、第３次調査：長谷川哲也・原田恵理子・小原雄也・長谷川真史[研修員]（28年度）が担当した。

5．西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群の執筆は長谷川哲也・原田恵理子・小原雄也が分担し、文責は各節の文末に記載した。小塚遺跡・石垣遺跡の執筆は長谷川哲也が行った。全体の編集は長谷川哲也・原田恵理子・小原雄也があたった。遺構写真撮影は現地調査担当者が、遺物写真撮影は本堂弘之・小原雄也・鐸木厚太が行った。また、室内整理業務は黒川敬子（27年度まで）・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代（29年度まで）・唐木美早（30年度）が補佐した。

6．出土遺物は基本的に番号順に配置したが、レイアウトや整理上の都合等で若干前後した部分がある。

7．発掘調査及び整理作業においては、周辺在住の方々や津市教育委員会にご協力いただいた。特に以下の方には様々なご教示をいただいた。（敬称略、所属は当時。順不同）
玉井功（大阪府立近つ飛鳥博物館）、小森哲也（博士【歴史学】）、石澤誠人、村木一弥（津市教育委員会）、藤原秀樹、吉田真由美（鈴鹿市考古博物館）

8．本書に関連した調査成果については、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報26』（三重県埋蔵文化財センター　2016年）、『中勢道路調査ニュース』№60（三重県埋蔵文化財センター　2015年）等で随時報告してきたが、本報告書をもって正式報告とする。

9．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　　例

【地図類】

1．本書で使用した地図類は、国土地理院発行1/25,000地形図、2011三重県共有デジタル地図（数値地形図2500）（三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て調整したもの（平成30年４月５日付け　承認番号：三総合地第１号））である。
2．挿図の方位は全て座標北で示している。磁針方位は西偏６度50分、真北方位は座標北の東偏０度17分（平成21年度）である。
3．本書で用いた座標値は平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高である。

【遺構類】

1．土層図は層の区分を実線で、実際に掘り下げた部分を一点鎖線で表現している。また、遺構に関わる土層の中で、本来はさらに続くが側溝等で途切れる場合、その壁は破線で表現している。
2．土層図の色調は基本的に、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）に準拠した。しかし、記録類がない場合は掲載していない。
3．当報告書での遺構番号は、下記のように調査次毎で番号を変えて、それぞれ通番としている。
　（西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群）第１次：番号なし　　第３次：１～　　第４次：11～
　（小塚遺跡）第１次：番号なし　　第２次：１～
　（石垣遺跡）第１次：番号なし　　第２・３次：１～
4．遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、見通し図となっている。
5．遺構番号の頭には、遺構の種別を示す以下の記号と、通番の数字の組合せにより表記している。ただし、Pitは基本的に、小地区毎で１～付与している。なお、ＳＸ30内のPitは、別途柱穴１～13を付与している。
　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：墓　　Pit：柱穴
6．遺物出土状況図の遺物に付された数字は遺物報告番号を示す。
7．遺構一覧表は、以下の要領により作成している。
　調査次・・・・・調査次数を示している。
　地区・・・・・・調査時に設定した地区名を示す。大地区－小地区で併記している。
　規模・・・・・・長さ・幅・深さ（柱穴のみ底の標高も付記）をそれぞれ記載している。記載数字以上の規模となるものは、数字の右側に↑で示した。
　時代・・・・・・遺構の所属する時代を示している。
　出土遺物・・・・遺構からの出土遺物について、記載している。
　備考・・・・・・記載項目以外の事柄について、必要事項を記載した。

【遺物類】

1．遺物番号は、調査年次・遺物の種別に関わらず、遺跡毎に通し番号を付与した。
2．遺物実測図類は実物の1/4を基本とし、それ以外の縮尺のものについてはその都度表記している。
3．出土遺物は基本的に番号順に配置したが、レイアウトや整理上の都合等で若干前後した部分がある。
4．本書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は磁器製のものを「碗」、その他は「椀」に統一している。
5．遺物観察表は、遺物の種類を大きく土器等、土製品・石器・石製品・金属製品に分類し、それぞれ記載項目を設けた。以下の要領により作成している。
　報告書番号・・・・挿図掲載番号である。
　実測番号・・・・・実測時の登録番号で、R－№ｘをふっている。
　器種等・・・・・・縄文土器、土師器、須恵器、石器等の遺物の大分類と種類を細分した器種・器形等を併記している。
　産地・・・・・・・産地が判るものは記載している。
　地区・・・・・・・調査時に設定した地区名を示す。大地区－小地区で併記している。
　遺構／取り上げ№ｘ：報告書に掲載した遺構名である。取り上げ№ｘを付与したものは併記している。
　法量・・・・・・・遺物の法量を示す。数字のみ記載しているものは口径を、底は底部径を示す。径が出せなかったものは「－」と示す。遺物の形状により、長さ・幅・厚さで示したものもある。
　胎土・・・・・・・小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
　焼成・・・・・・・焼成時の状態を「良～不良」で区分した。

色調・・・・・・・その遺物の代表となる色調を記載した。但し、大きく色調が異なるものは部位も表記している。外は外面、内は内面を示す。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存（12分割中）・主な部位で示したうえで12分割したうちの残存度の分子を表記した。但し、部位が表記していないものは全体からみた残存度を表記し、残存が僅かなものは小片、全体が残っているものは完存と表記した。口は口縁部、底は底部、台は台部、杯は杯部、脚は脚部を示す。

備考・・・・・・・記載項目以外の事柄について、必要事項を記載した。

【挿図・写真】

1．挿図と写真図版の遺構・遺物番号は、報告書番号と対応している。

2．遺物の写真は、すべて縮尺不同である。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1

Ⅱ　西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群

1　位置と環境 …… 10
2　調査前測量と基本層序 …… 15
3　遺構 …… 15
4　遺物 …… 41
5　自然科学分析 …… 58
6　結語 …… 76

Ⅲ　小塚遺跡・石垣遺跡

1　位置と環境 ……119
2　小塚遺跡－遺構と遺物－ ……126
3　石垣遺跡－遺構と遺物－ ……131
4　まとめ ……137

挿図目次

第１図　中勢バイパス路線内遺跡位置図 …… 2
西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群
第２図　第３・４次調査区地区割り図 …… 6
第３図　遺跡位置図 …… 12
第４図　遺跡周辺地形図 …… 13
第５図　調査区位置図（第１次） …… 14
第６図　調査区位置図（第３・４次） …… 14
第７図　調査前測量図 …… 16
第８図　土層図１ …… 17
第９図　土層図２ …… 18
第10図　調査区平面図 …… 19
第11図　SX27・28（西毛谷北６号墳）平面図、土層図 …… 20
第12図　SX29・30（西毛谷北５号墳）平面図、土層図 …… 21
第13図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）土層図 …… 22
第14図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）炭出土状況図 …… 23
第15図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）出土状況図、炭化壁・柱穴配置図 …… 24
第16図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）出土状況図、断面見通し図 …… 25
第17図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）平面図 …… 26
第18図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）断面図 …… 27

第19図　SX33出土状況図、断面図 …… 29
第20図　SX47（西毛谷北４号墳）平面図・断面図、土層図 …… 30
第21図　SX48（西毛谷北３号墳）・SX49平面図、SX48土層断面図 …… 31
第22図　SX49出土状況図・断面図、SX55出土状況図・見通し図 …… 32
第23図　SK52、A-K7Pit1、SX41出土状況図・断面図 …… 34
第24図　SX26平面図・断面図、SK1平面図・断面図 …… 35
第25図　出土遺物実測図１ …… 41
第26図　出土遺物実測図２ …… 42
第27図　出土遺物実測図３ …… 44
第28図　出土遺物実測図４ …… 47
第29図　出土遺物実測図５ …… 48
第30図　出土遺物実測図６ …… 49
第31図　出土遺物実測図７ …… 51
第32図　出土遺物実測図８ …… 52
第33図　放射性炭素年代測定試料 …… 59
第34図　暦年較正結果 …… 59
第35図　炭化材樹種同定試料採取箇所図 …… 61
第36図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真１ …… 63
第37図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真２ …… 66
第38図　炭素・窒素同位体分析、微細物分析試料採取箇所図 …… 68
第39図　炭素・窒素安定同位体比 …… 69
第40図　炭素安定同位体比とＣ／Ｎ比の関係 …… 69
第41図　出土炭化種実 …… 71
第42図　対象資料 …… 72
第43図　報44成分分析結果 …… 73
第44図　報45成分分析結果 …… 74
第45図　報46成分分析結果 …… 75
第46図　横穴式木室を主体部とする古墳の分布 …… 81
第47図　名草古墳群と奥ノ谷28号窯・奥ノ谷23号窯・吉馬32－Ｖ号窯 …… 83
第48図　中番地区群集墳と王子ヶ池窯・別所池窯 …… 84
第49図　平方遺跡群 …… 85
第50図　道田池古墳群・菩提池西古墳・聖神社古墳と陶邑窯跡群大野池地区 …… 85
第51図　檜尾塚原古墳群と陶邑窯跡群大野池・光明池地区 …… 86
第52図　陶器千塚古墳群と陶邑窯跡群陶器山地区・高蔵寺地区 …… 87
第53図　上寺山古墳と須恵器窯跡 …… 87
第54図　小御門古墳群と金折山窯跡・作谷窯跡 …… 88
第55図　瓦屋西古墳群と有玉古窯 …… 88
第56図　器種分類図① …… 92
第57図　器種分類図② …… 93
第58図　平瓶の比較 …… 103
第59図　長頸壺の比較 …… 104

第60図　徳居窯跡群周辺の遺跡分布図 ……107
第61図　家形陶棺・有蓋長胴棺・方筒状土製品 ……111
第62図　横穴式木室内棺配置想定図 ……117
附図（袋綴じ）調査区平面図

小塚遺跡・石垣遺跡

第１図　遺跡位置図 ……120
第２図　小塚遺跡・石垣遺跡周辺地形図
　（明治時代） ……121
第３図　小塚遺跡周辺地形図 ……122
第４図　小塚遺跡調査区位置図（第１次） ……123
第５図　小塚遺跡調査区位置図（第２次） ……123
第６図　石垣遺跡周辺地形図 ……124
第７図　石垣遺跡調査区位置図
　（第１次） ……125
第８図　石垣遺跡調査区位置図
　（第２・３次） ……125
第９図　土層断面図① ……126
第10図　調査区平面図……127、128
第11図　ＳＤ１～４平面図、土層断面図② ……129
第12図　出土遺物実測図 ……130
第13図　土層断面図① ……131
第14図　土層断面図② ……132
第15図　調査区平面図……133、134
第16図　土層断面図③ ……135
第17図　出土遺物実測図 ……136

表　目　次

西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群

第１表　遺構一覧表① …… 38
第２表　遺構一覧表② …… 39
第３表　遺構一覧表③ …… 40
第４表　遺物観察表①（土器等） …… 54
第５表　遺物観察表②（土器等） …… 55
第６表　遺物観察表③（土器等） …… 56
第７表　遺物観察表④（土器等） …… 57
第８表　遺物観察表⑤（金属製品） …… 57
第９表　遺物観察表⑥（石器・石製品） …… 57
第10表　自然科学分析委託内容 …… 58
第11表　測定試料および処理 …… 59
第12表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 59
第13表　炭化材の樹種同定結果① …… 62
第14表　炭化材の樹種同定結果② …… 65
第15表　炭素・窒素安定同位体比分析結果 …… 67
第16表　出土炭化種実 …… 71
第17表　EDX/XGT分析結果一覧 …… 72
第18表　横穴式木室集成①・② …… 81、82
第19表　火化された横穴式木室構造①・② …… 89、90
第20表　器種分類対応表 …… 93

第21表　器種構成一覧 …… 96
第22表　杯・杯蓋・椀・皿・高杯製作技法一覧 …… 97
第23表　胎土分類一覧① …… 99
第24表　胎土分類一覧② …… 99
第25表　杯・杯蓋・椀・高杯の口径 ……101
第26表　古墳の埋葬施設と副葬品 ……108
第27表　徳居窯跡群の変遷 ……108
第28表　６～７世紀の集落変遷 ……109
第29表　特異な埋葬形態一覧 ……112

小塚遺跡・石垣遺跡

第１表　出土遺物観察表 ……130
第２表　出土遺物観察表 ……136

写真目次

西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群

写１　西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群遠景
写２　西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群近景
写３　ＳＸ29・30（西毛谷北５号墳）
写４　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）遺物出土状況
写５　ＳＸ30（西毛谷５号墳主体部）南壁
写６　ＳＸ49
写７　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）出土遺物
写８　ＳＸ30（西毛谷北５号墳主体部）出土耳環
写９　表土掘削 …… 3
写10　人力掘削 …… 3
写11　写真撮影（ローリングタワー） …… 4
写12　現地説明会 …… 4
写13　甕の接合 …… 5
写14　遺物の写真撮影 …… 5
写15　ＳＸ30（西毛谷北５号墳）の調査 ……139
写16　調査前状況 ……140
写17　西毛谷北古墳調査前状況 ……140
写18　第３次　調査区遠景 ……141
写19　第３次　調査区遠景 ……141
写20　第３次　調査区遠景 ……142
写21　第４次　調査区遠景 ……142
写22　第１次　Ｔ－２区 ……143
写23　第１次　Ｔ－３区 ……143
写24　第１次　Ｔ－５区 ……143
写25　第１次　Ｔ－６区 ……143
写26　第１次　Ｔ－７区 ……143
写27　第３次　調査区全景 ……144
写28　第３次　ＳＤ２・３ ……144
写29　第３次　ＳＤ３ ……144
写30　第３次　下層確認トレンチ ……144
写31　第４次　ＳＸ25 ……144
写32　第４次　調査区全景 ……145
写33　第４次　ＳＸ27・28（６号墳） ……145
写34　ＳＸ27（６号墳主体部） ……146
写35　ＳＸ28（６号墳）北周溝土層 ……146
写36　ＳＸ30柱穴13粘土検出状況 ……146
写37　ＳＸ29・30（５号墳） ……146
写38　ＳＸ29（５号墳）西周溝土層 ……147
写39　ＳＸ29（５号墳）北周溝土層 ……147
写40　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土 ……147
写41　ＳＸ30（５号墳）土層 ……147
写42　ＳＸ30（５号墳）土層 ……147
写43　ＳＸ30（５号墳）北側壁土層 ……147
写44　ＳＸ30（５号墳）奥壁土層 ……147
写45　ＳＸ30（５号墳）埋積状況 ……147
写46　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土 ……148
写47　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土 ……148
写48　ＳＸ30（５号墳）遺物出土状況 ……149
写49　ＳＸ30（５号墳）遺物出土状況 ……149
写50　ＳＸ30（５号墳）入口側遺物出土状況 …150

写51　ＳＸ30（５号墳）奥壁側遺物出土状況 …150
写52　ＳＸ30（５号墳）耳環 ……151
写53　ＳＸ30（５号墳）耳環 ……151
写54　ＳＸ30（５号墳）奥壁部材 ……151
写55　ＳＸ30（５号墳）奥壁部材 ……151
写56　ＳＸ30（５号墳）側壁検出状況 ……151
写57　ＳＸ30（５号墳） ……152
写58　ＳＸ30（５号墳） ……152
写59　ＳＸ33 ……153
写60　ＳＸ33出土状況 ……153
写61　ＳＸ33最下部出土状況 ……153
写62　ＳＸ47（４号墳）西周溝土層 ……153
写63　ＳＸ47（４号墳）北周溝土層 ……153
写64　ＳＸ47（４号墳） ……154
写65　ＳＸ48（３号墳） ……154
写66　ＳＸ48（３号墳）北周溝土層 ……155
写67　ＳＸ49 ……155
写68　ＳＸ49半截 …… 155
写69　ＳＸ49 ……155
写70　ＳＸ49出土状況 ……155
写71　ＳＸ55 ……156
写72　ＳＫ52 ……156
写73　ＳＫ53 ……156
写74　Ａ－Ｋ７　Ｐｉｔ１ ……156
写75　ＳＸ41 ……156
写76　ＳＸ41 ……156
写77　ＳＸ26 ……156
写78　ＳＸ26断面 ……156
写79　出土遺物１ ……157
写80　出土遺物２ ……158
写81　出土遺物３ ……159
写82　出土遺物４ ……160
写83　出土遺物５ ……161
写84　出土遺物６ ……162
写85　出土遺物７ ……163
写86　出土遺物８ ……164
写87　出土遺物９ ……165
写88　出土遺物10 ……166
写89　出土遺物11 ……167
写90　出土遺物12 ……168

小塚遺跡・石垣遺跡

写１　小塚遺跡調査区全景 ……169
写２　小塚遺跡調査区全景 ……169
写３　小塚遺跡ＳＤ１ ……170
写４　小塚遺跡ＳＤ１北端断面 ……170
写５　石垣遺跡第２次調査区全景 ……171
写６　石垣遺跡第３次調査区全景 ……171
写７　石垣遺跡第２次調査区　南区東半全景 …172
写８　石垣遺跡第２次調査区　南区西半全景 …172
写９　石垣遺跡第２次調査区　ＳＤ６ ……173
写10　石垣遺跡第３次調査区　ＳＤ５・６ ……173
写11　石垣遺跡第３次調査区　ＳＤ５・９ ……174
写12　石垣遺跡第３次調査区 ……174
写13　小塚遺跡出土遺物 ……175
写14　石垣遺跡出土遺物 ……175

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と経過

中勢道路は、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和と周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するため、昭和58年４月、一般国道23号のバイパスとして、鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8kmが、都市計画道路として決定された。

この計画地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和58年度に三重県教育委員会が行った分布調査の結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時）と三重県教育委員会が協議を行い、現状保存が困難な場合には事前に発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

事業の実施にあたっては、昭和63年度から平成17年度までは、国土交通省中部地方整備局（平成12年までは建設省中部地方建設局）・三重県・社団法人中部建設協会の三者で協定書を締結し、事業を進めてきたが、平成18年度以降は、現地作業を含めた委託契約書を国土交通省中部地方整備局と三重県で締結し、事業を推進している。

2　調査の体制

中勢道路建設事業に伴う発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センター調査研究２課（平成23年度までは調査研究Ⅱ課）が担当している。本書で報告する西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群・小塚遺跡・石垣遺跡の調査・整理年度の体制は以下のとおりである。

〔平成24年度〕調査研究２課

課　　長	田中久生
主　　幹	竹内和昭
主　　査	岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成25年度〕調査研究２課

課　　長	田中久生
主　　幹	穂積裕昌
主　　査	岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成26年度〕調査研究２課

課　　長	田中久生
主　　幹	長谷川哲也
主　　査	原田恵理子
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成27年度〕調査研究２課

課　　長	本堂弘之
主　　幹	長谷川哲也
主　　査	原田恵理子・出村雅実
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成28年度〕調査研究２課

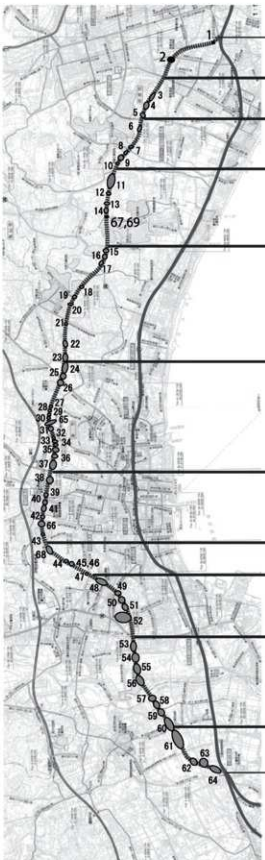
課　　長	本堂弘之
主　　幹	長谷川哲也・原田恵理子
技　　師	小原雄也
業務補助職員	太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成29年度〕調査研究２課

課　　長	上村安生
主　　幹	長谷川哲也・原田恵理子
技　　師	小原雄也
業務補助職員	太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代

〔平成30年度〕調査研究２課

課　　長	上村安生
主　　幹	長谷川哲也・源口元士・原田恵理子
技　　師	鐘木厚太
業務補助職員	太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・唐木美早



（縮尺は任意）

4 工区 L=2.85km
1. 小塚遺跡
2. 石垣遺跡

5 工区 L=1.80km
3. 池ノ下Ⅱ遺跡　5. 甲懸Ⅱ遺跡
4. 野田浄土池遺跡

6 工区 L=2.30km
6. 稲生遺跡　9. 拝原遺跡
7. 南谷遺跡　10. 高井A遺跡
8. 間瀬口遺跡

7 工区 L=2.90km
11. 森ヶ坪遺跡　14. 大野南遺跡
12. 東谷遺跡　**67. 西毛谷北古墳**
13. 船ヶ谷 A 遺跡　**69. 西毛谷 A 遺跡**

8 工区 L=5.00km
15. 成瀬A遺跡　20. 内垣内遺跡
16. 成瀬B遺跡　21. 天堤古墳
17. 稲降遺跡　22. 河崎遺跡
18. 丸市遺跡　23. 六大A遺跡
19. 山王遺跡

中勢バイパス L=33.8km

9 工区 L=4.35km
24. 六大B遺跡　32. 門脇北古墳
25. 横垣内遺跡　33. コウゼンジ遺跡
26. 大古曽遺跡　34. 宮ノ前遺跡
27. 新池2号墳　35. 森山東遺跡
28. 新池1号墳　36. 太田遺跡
29. 西岡1号墳　37. 松ノ木遺跡
30. 西岡2号墳　65. 長遺跡
31. 山籠遺跡

10 工区 L=2.85km
38. 蔵田遺跡　42. 里前遺跡
39. 位田遺跡　43. 鎌切5号墳
40. 替田遺跡　66. 梁瀬遺跡
41. 弐ノ坪遺跡

11 工区 L=1.95km
68. にんごう古墳群　46. 上はんの木古墳
44. 大釜南古墳　47. 藤谷窯跡群
45. 鳥羽見城跡

12 工区 L=3.10km
48. 相川西方遺跡　51. 東山神遺跡
49. 丸地遺跡　52. 本宮遺跡
50. 城ノ越遺跡

13 工区 L=3.90km
53. 向山遺跡　57. 舞出北遺跡
54. 池新田遺跡　58. 舞出南遺跡
55. 木造赤坂遺跡　59. 赤部遺跡
56. 井手ノ上遺跡　60. 筋違遺跡

14 工区 L=2.80km
60. 筋違遺跡　63. 中林・中道遺跡
61. 柏木遺跡　64. 小津遺跡
62. 横堤遺跡

第１図　中勢バイパス路線内遺跡位置図

西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群

3　調査の経過

昭和58年から始まった中勢道路建設に伴う埋蔵文化財の協議では、西毛谷北古墳が周知の遺跡として登録されていたため、協議対象となっていた。

平成25年度、中勢道路事業地に隣接する範囲で、津市教育委員会が民間開発に伴う調査を行い、新たな埋蔵文化財包蔵地が認められたため、平成26年３月３日付け、津市生第2937号にて三重県教育委員会教育長あて遺跡発見の届が提出された（西毛谷Ａ遺跡）。このことにより７工区の道路幅No．442～443付近の東西方向に延びる尾根上の範囲には、西毛谷北古墳及び西毛谷Ａ遺跡が所在することとなった。

現地調査は、平成26～27年度にかけて行った。また、西毛谷Ａ遺跡内で、平成26年度に津市教育委員会が再度調査を行った。このため、調査次数について、津市教育委員会と協議し、２次は津市教育委員会、１・３・４次は三重県埋蔵文化財センターとした。

上記２遺跡について、平成26年度、第１次調査（平成26年８月22日～同年９月18日）とし、幅２ｍを基本とした調査区を７箇所設定した（総延長550ｍ、面積1,100㎡）。そのうち、最北側を除く６箇所で溝や土坑等を確認し、須恵器片、甕片等が出土した。

この結果を受け、同年度に丘陵北側1,516㎡を対象範囲として第３次調査（平成26年10月17日～平成27年２月12日）を行った。

平成27年度には丘陵頂上部及び南側4,558㎡を対象範囲として第４次調査（平成27年４月27日～同年12月14日）を行った。

最終調査面積は7,174㎡である。出土遺物は、須恵器・陶磁器など、コンテナケース31箱分の遺物が出土した。

〔調査日誌（抄）〕

調査区は中ノ川と田中川に挟まれた標高約40～45ｍの丘陵上に立地する。

第３・４次調査の経過は以下のとおりである。

（第３次調査　平成26年～27年）

10月31日　表土掘削開始（～11月10日）。

11月５日　遺構検出→ＳＫ１へ。

11月６日　焼土状の広がりを確認。炭は検出されず。また、土は軟らかく、焼けて硬くなっている状況ではない。

11月12日　人力による遺構検出・掘削開始（～12月８日）。

11月19日　ＳＫ１半裁。
写真撮影、土層断面図作成。
焼土状の箇所について、東西南北にトレンチを入れて土層を確認した結果、地山の一部が変色したものであることが判明（～20日）。

12月10日　ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影。
全景足場写真撮影。

12月25日　空中写真測量図面校正作業（～１月５日）。

１月５日　現地作業終了、機材等撤収。

（第４次調査　平成27年）

６月１日　北側から表土掘削開始（～６月29日）。

写９　表土掘削

写10　人力掘削

6月12日　遺構検出・遺構掘削開始（～10月５日）。
6月16日　南側斜面で周溝検出。主体部想定付近から須恵器出土（この古墳は後、周溝はＳＸ29、方形の墓壙はＳＸ30と命名）。
6月29日　津市教育委員会米山氏、松尾氏来訪。
7月２日　近世墓検出（ＳＸ26）。
キセル雁首、寛永通宝５枚出土。
方形の墓壙（ＳＸ25）検出。
須恵器杯蓋出土。
7月13日　ＳＸ27・28土層断面写真撮影と実測。
7月24日　ＳＸ30から炭と焼土検出。長頸壺出土。
7月28日　津市教育委員会米山氏から、「ＳＸ30は横穴式木芯室を内部主体とする古墳で、埋葬後燃やした『カマド塚』ではないか」と助言を受ける。
7月29日　三重県教育委員会社会教育・文化財保護課竹内氏、川部氏来訪。
7月31日　文化財保護委員淺生氏来訪。
8月３日　ＳＫ33から大きな甕が割れた状態で出土。
8月４日　ＳＸ29内で須恵器小片が多量に出土。
8月５日　ＳＫ33から出土した土器は体部にタガ状のもの有り。円筒埴輪の一部で埴輪棺の可能性。ＳＸ33へ名称変更。
8月７日　焼土を除去し、炭と遺物の状態でＳＸ30足場写真撮影。
社会教育・文化財保護課竹内氏、川部氏来訪。
8月11日　アゼを除去し、プランを再検出し、炭と遺物の状態で、ＳＸ30足場写真撮影。
側面はやや傾斜していること、南北の炭のレベルが一致していることが判明。
鈴鹿市考古博物館吉田氏、三重大学小澤氏、三重大学院生丸山氏、近畿大学網氏他１名来訪。
8月12日　社会教育・文化財保護課伊藤氏、鈴鹿市考古博物館吉田氏来訪。
8月19日　大阪府立近つ飛鳥博物館客員学芸員玉井氏来訪。調査指導を受ける。
8月21日　炭と遺物の状態で、ＳＸ30及びＳＸ29足場写真撮影。
8月24日　ＳＸ41写真撮影。実測図作成。
8月27日　ＳＸ30内、北側から耳環１個体出土。
北壁付近から皿出土、付近に大量の炭有。供献食物が焼けたあとか？
8月28日　炭を除去し、整地を検出し、遺物を置いた状態で、ＳＸ30足場写真撮影。
8月31日　ＳＸ30木室の外郭ライン検出。
足場写真撮影。
耳環もう１個体出土。
9月２日　整地層、立っている炭を除去して、柱穴を探す。
9月７日　ＳＸ47写真撮影、実測図作成。
ＳＸ48とＳＸ49は当初重複が見られたが、１段下げたら重複は無くなった。
ＳＸ49内、少量の炭を確認。
9月10日　ＳＸ49出土状況図作成。
9月11日　ＳＸ48写真撮影、実測図作成。
静岡県埋蔵文化財センター田村氏、斎宮歴史博物館宮原氏来訪。
9月16日　ＳＸ55から杯蓋出土。
9月18日　ＳＸ55、杯蓋を入れて写真撮影、実測図作成。

写11　写真撮影（ローリングタワー）

写12　現地説明会

9月30日　マルチコプターによる空中写真撮影。
　　足場写真撮影。
10月３日　現地説明会に約40名参加。
　　ＳＸ49内遺物取り上げ。
10月５日　補足作業。
　　現地作業終了。機材等撤収。

4　調査の方法

調査区は中勢道路の路線に合わせて、丘陵及び斜面を、以下の手順で進めた。

① 表土及び旧耕作土を重機により除去した。

② 遺構・遺物の位置情報の基準となる地区杭を設定した。設定方法は、調査区全体を世界測地系の座標に沿った100ｍ四方の方眼（大地区）で区切り、その中を４ｍ四方の方眼（小地区）に細分して、グリッドを設定した。大地区は、北西からＡ～Ｄ地区とし、小地区は南北方向にローマ字（Ａ～Ｙ）、東西方向に算用数字（１～25）を当て、それらの組み合わせにより、個別のグリッド名称（例：Ａ－Ａ１など）とした（第２図）。

③ 包含層掘削および遺構検出を人力で行い、検出された遺構についての重複状況・埋土の色調などをグリッドごとのカード（遺構カード：縮尺1/40）に記録した。また、それをもとに略測図（縮尺1/100）を作成し、調査区全体の状況の把握に努めた。

④ 遺構を人力掘削し、遺物を取り上げた。溝・土坑などの遺構には、調査次別に通し番号を付与した。調査次別の遺構番号は、第３次調査１～、第４次調査11～とした。

⑤ 調査区壁面・遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。図面の縮尺は1/10または1/20または1/100、写真は一眼レフデジタルカメラNikonＤ800E及びD3300を使って行なった。

⑥ 調査後の遺構平面図・等高線図等の作成は空中写真測量を委託した。なお、第１次調査区は手描実測を行った。

5　整理・保管の方法

整理作業は、以下の手順で進めた。

ａ　遺物

① 調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合を行った。

② 報告書に掲載する遺物を選別し、実測図作成・写真撮影（一眼レフデジタルカメラNikonＤ800E）を行なった。

③ 鉄製品は調査現場で取り上げた後、速やかに土を除去し、乾燥させた状態で保管した。実測が可能なものは実測および一眼レフデジタルカメラNikonＤ800Eでの写真撮影を行った。その後、必要に応じた自然科学分析・保存処理作業を進めた。

④ 報告書掲載遺物については報告書番号順に並べ、遺物実測を行わなかったものは、出土遺構・グリッド毎に、遺物整理箱に収納し、台帳を作成して保管した。

ｂ　図面・写真類

現場で作成した図面（平面図・土層断面図・航測図面など）、遺構カード（縮尺1/40）、調査日誌、写真類などと、整理段階で作成した遺物実測図、遺物写真について、適切な順序に並べ所定の番号を付け、

写13　甕の接合

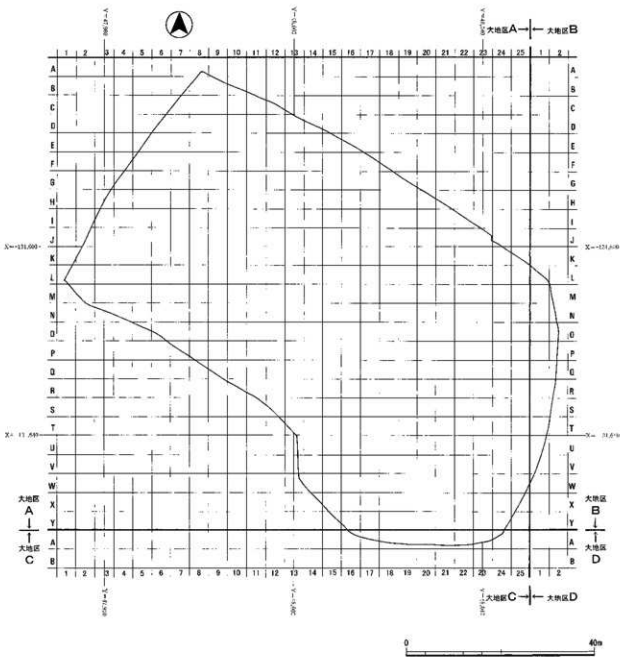
写14　遺物の写真撮影

台帳を作成して保管した。また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管した。

6　普及公開

現地説明会を平成27年10月３日に実施し、約40名の参加者があり、調査区内での見学・説明、出土遺物の展示紹介などを行った。

また、平成28年４月10日、鈴鹿市考古博物館において、西毛谷Ａ遺跡発掘調査の成果についての説明会を実施し、37名の参加者があった。さらに平成28年９月10日三重県総合文化センターにおいて同様の説明会を実施し、97名の参加者があった。



第２図　第３・４次調査区地区割り図（1：800）

7　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○文化財保護法第99条第１項

・三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

第３次調査：平成26年10月17日付教埋第257号

第４次調査：平成27年４月27日付教埋第36号

○文化財保護法100条第２項

・三重県教育委員会教育長から津警察署長あて

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

第３次調査：平成27年２月19日付

教委第12-4434号

第４次調査：平成28年１月15日付

教委第12-4421号

小塚遺跡・石垣遺跡

3　調査の経過と方法

a　小塚遺跡

現地調査は、平成24・26・28年度に行った。

平成24年度は第１次調査（平成24年12月７日～同年12月13日）とし、幅２ｍを基本とした調査区を７箇所設定した（総延長120ｍ、面積240㎡）。そのうち、西側で溝を確認し、土師器、須恵器、陶器等が出土した。

平成26年度も引き続いて第１次調査（平成26年10月14日）を行ない、幅２ｍの調査区を１箇所設定した（総延長20ｍ、面積40㎡）。土坑と溝を確認し、土師器が出土した。

これらの結果を受け、平成28年度に1,133㎡を対象範囲として第２次調査（平成28年９月15日～同12月14日）を行なった。

最終調査面積は1,413㎡である。出土遺物は、土師器・須恵器・陶器などコンテナケース１箱分の遺物が出土した。

〔調査日誌（抄）〕

調査区はもと畑地である。地表面から検出面まで約20～30㎝と浅かった。

第２次調査の経過は以下のとおりである。

10月19日　北側から、表土掘削開始（～28日）。

10月24日　遺構検出、遺構掘削開始。

10月26日　調査区西側で東側へ振る、南北方向の溝を確認（ＳＤ１）。

11月２日　調査区西側で、さらに溝２条確認（ＳＤ２・ＳＤ３）。

11月７日　完掘。

遺構平面図作成（～10日）。

11月10日　東壁土層断面図作成（～14日）。

11月17日　ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影。

全景足場写真撮影（２箇所）。

11月22日　機材等撤収。

b　石垣遺跡

現地調査は、平成24・26・27・28年度に行った。

平成24年度は第１次調査（平成24年12月17日～同年12月28日）とし、幅２ｍを基本とした調査区を９箇所設定した（総延長330ｍ、面積660㎡）。そのうち、南側で土坑・溝を確認し、磁器が出土した。

平成26年度も第１次調査（平成26年10月14日～同年10月17日）を行い、幅２ｍの調査区を６箇所設定した（総延長105ｍ、面積210㎡）。全ての箇所で柱穴と土坑を確認した。

さらに、平成27年度も引き続いて第１次調査（平成27年11月13日～同年11月27日）を行い、幅２ｍの調査区を２箇所設定した（総延長20ｍ、面積40㎡）。溝が１条確認されたのみで、遺物は確認できなかった。

これらの結果を受け、6,800㎡を要二次調査対象範囲とした。平成27年度には、そのうち1,982㎡を対象として、第２次調査（平成27年10月16日～平成28年２月３日）、平成28年度には、精査して4,119㎡を対象として第３次調査（平成28年４月20日～平成28年９月１日）を行なった。

最終調査面積は7,011㎡である。出土遺物は、第２・３次合わせて、磁器、陶器、土師器、瓦などコンテナケース２箱分の遺物が出土した。

〔調査日誌（抄）〕

調査区はもと水田である。

第２・３次調査の経過は以下のとおりである。

（第２次調査　平成27年～28年）

11月４日　南側から、表土掘削開始（～26日）。

11月11日　遺構検出、遺構掘削開始（～12月２日）。
土坑・柱穴・溝（撹乱溝含む）検出。

11月17日　Ｂ区東半
全景写真撮影。
手描による遺構平面図作成（～19日）。

11月25日　ＳＤ２から瓦小片が数点出土。

12月８日　Ｂ区西半及びＡ区
ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影。
全景足場写真撮影（２箇所）。

12月９日　Ｂ区西半及びＡ区
全景足場写真撮影（１箇所）。

12月14日　Ｂ区及びＡ区
電子平板による遺構平面図作成。
【Ｂ区西半及びＡ区へ、先行して手描したＢ区東半を合成し、一連の図面とした】（～平成28年１月５日）。

（第３次調査　平成28年）

５月12日　南側から、表土掘削開始（～６月10日）。

５月17日　遺構検出・遺構掘削（～６月29日）。
南側の遺構は薄い。北側へ進むにつれて、溝・土坑・柱穴が多く検出される。

５月31日　Ｃ区
全景写真撮影。

６月２日　手描による遺構平面図作成（～７月28日）。

６月17日　東西方向から南北方向へＬ状に曲がる幅約50㎝の溝を確認。断面観察で１層と判断。耕作に伴う溝か？

７月19日　Ｄ区
足場全景写真撮影（１箇所）。

７月20日　同区
無人航空機による空中写真撮影。
足場全景写真撮影（２箇所）。

７月21日　ＳＤ５・７・９
足場全景写真撮影（１箇所）。

4　調査の方法

両遺跡とも、以下の手順で進めた。

① 表土及び旧耕作土を重機により除去した。

② 遺構・遺物の位置情報の基準となる地区杭を設定した。設定方法について、小塚遺跡では４ｍ四方の方眼（小地区）に細分して、グリッドを設定した。南北方向にローマ字（北からＢ～Ｏ）、東西方向に算用数字（西から２～13）を当て、それらの組み合わせにより、個別のグリッド名称（例：Ｂ２など）とした。石垣遺跡では、調査区全体を世界測地系の座標に沿った100ｍ四方の方眼（大地区）で区切り、その中を４ｍ四方の方眼（小地区）に細分して、グリッドを設定した。大地区は、北西からＡ～Ｃ地区とし、小地区は南北方向にローマ字（北からａ～ｙ）、東西方向に算用数字（西から１～25）を当て、それらの組み合わせにより、個別のグリッド名称（例：Ａ－ａ１など）とした。

③ 包含層掘削および遺構検出を人力で行い、検出された遺構についての重複状況・埋土の色調などをグリッドごとのカード（遺構カード：縮尺1/40）に記録した。また、それをもとに略測図（縮尺1/100）を作成し、調査区全体の状況の把握に努めた。

④ 遺構を人力掘削し、遺物を取り上げた。溝・土坑などの遺構には、通し番号を付与した。通しの遺構番号は、第２次調査は１～、第３次調査は第２次調査の続きからとした。

⑤ 調査区壁面・遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行なった。図面の縮尺は1/20または1/40、写真は一眼レフデジタルカメラNikonD800E及びD3300を使って行なった。

⑥ 調査後の遺構平面図・等高線図等の作成は、以下の通りに行なった。

ａ　小塚遺跡

第１次調査区　手描実測。

第２次調査区　手描実測。

ｂ　石垣遺跡

第１次調査区　手描実測。

第２次調査区
南区東半　　手描実測。
南区西半及び北区
電子平板による作成を委託。
（橋本技術株式会社）
第３次調査区　手描実測。
第２・３次調査区
手描実測から電子化し、電子による図面合成を委託。
（橋本技術株式会社）

5　整理・保管の方法

整理作業は、以下の手順で進めた。

a　遺物

① 調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合を行なった。

② 報告書に掲載する遺物を選別し、実測図作成・写真撮影（一眼レフデジタルカメラNikon D800E）を行なった。

③ 報告書掲載遺物については報告書番号順に並べ、遺物実測を行わなかったものは、出土遺構・グリッド毎に、遺物整理箱に収納し、台帳を作成して保管した。

b　図面・写真類

現場で作成した図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（縮尺1/40）、調査日誌、写真類などと、整理段階で作成した遺物実測図、遺物写真について、適切な順序に並べ所定の番号を付け、台帳を作成して保管した。

6　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

a　小塚遺跡

○文化財保護法99条第１項
・平成28年９月15日付教埋第183号
三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
○文化財保護法100条第２項
・平成28年12月21日付　教委第12－4422号
三重県教育委員会教育長から鈴鹿警察署長あて
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

b　石垣遺跡

○文化財保護法99条第１項
・三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」
第２次調査：平成27年10月16日付教埋第217号
第３次調査：平成28年４月20日付教埋第29号
○文化財保護法100条第２項
・三重県教育委員会教育長から鈴鹿警察署長あて
「埋蔵文化財の発見について（通知）」
第２次調査：平成28年２月19日付
教委第12－4428号
第３次調査：平成28年９月12日付
教委第12－4420号

（長谷川）

Ⅱ　西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群

1　位置と環境

a　地理的環境

津市河芸町は市の北部に位置し、東側は伊勢湾に接し、西側は鈴鹿山脈を臨み、北側は鈴鹿市に続いている。

町の土地は丘陵・台地・低地が構成する平野であって、それぞれ河芸丘陵、郡山台地、中勢低地と名付けられている。

西毛谷Ａ遺跡は河芸丘陵北側に所在する。河芸丘陵は標高約60m以下で、稜線はなだらかである。丘陵に接して谷底平野が密に分布し、水田として利用されている。一方、東側に隣接する郡山台地は中ノ川によって形成された河岸段丘の高位段丘と中位段丘からなり、それぞれ千里面、郡山面と名付けられている。

河芸丘陵の地質は新生代第三紀鮮新世から第四紀更新世前期にかけて形成された庵芸層群からなる。この庵芸層群からは貝化石や植物化石のほか、大型動物の化石も産出しており、昭和30年には北黒田地区でステゴゾウ象の臼歯の化石が発見されている。郡山台地の地質は第四紀更新世に形成された段丘堆積物からなる。

旧伊勢参宮街道、その新道としてつくられた国道23号線、伊勢鉄道と近鉄名古屋線など、幹線道路や鉄道は、全て丘陵の東裾を北から南へ通っているが、新たに河芸丘陵を南北に貫いて一般国道23号中勢道路が建設される予定である。

b　歴史的環境（第３・４図）

西毛谷Ａ遺跡（１）は、中ノ川と田中川に挟まれた標高約39～44mの丘陵上に立地する。

中ノ川と田中川に挟まれた地域の中で、西毛谷Ａ遺跡を東西南北にとりまく、鈴鹿市徳居町・郡山町・中瀬古町・秋永町、津市河芸町三行・杜の街・久知野・千里ヶ丘に所在する遺跡について、時代別に概観していく。

当該地域で旧石器時代の遺跡は、現在のところ確認されていない。

郡山遺跡群の西川遺跡（２）で縄文時代中期末から後期初めの竪穴住居が２棟、末野Ａ遺跡（３）でも縄文時代の竪穴住居が１棟、発掘調査によって確認されている。郡山遺跡群のひとつ迫谷遺跡（６）も縄文時代の遺跡である。発掘調査はされていないが、前期の爪形文土器とともに、石鏃や石匙等の石製品や剥片が多量に採集されている。

弥生時代の遺跡としては、鈴鹿市で、畑遺跡（７）、中瀬古南遺跡（８）、塚越遺跡（９）、松山遺跡（10）で、弥生時代末から古墳時代前期に至る竪穴住居、方形周溝墓が見つかっている。これらの遺跡は低地を臨む台地の縁辺部に展開している。一方、河芸町では、鎌戸遺跡（11）が唯一で、弥生時代後期から古墳時代前期を中心に鎌倉時代までの遺物が大量に包含しているとされている。但し、発掘調査はされていないため、詳細は不明である。

このように縄文時代・弥生時代の遺跡は疎らであるが、古墳時代に入ってくると、遺跡や古墳の数は大幅に増加する。

集落としては、古墳時代後期の竪穴住居が、郡山遺跡群に内包される西川遺跡、末野Ａ遺跡、末野Ｂ遺跡（４）、西高山Ａ遺跡（12）、西高山Ｂ遺跡（13）、西高山Ｃ遺跡（14）で多数見つかっている。その数は、それぞれの遺跡で２桁台に及ぶ。また、河芸町千里ヶ丘遺跡（15）でも同時代の竪穴住居７棟が見つかっている。さらに、発掘調査はされていないが、同町の真黒遺跡（16）、狭間ノ脇西遺跡（17）、狭間ノ脇遺跡（18）、狭間ノ脇南遺跡（19）、成瀬Ｂ遺跡（21）、追ヶ沢遺跡（22）、橋爪Ｂ遺跡（23）では遺物の散布が見られ、集落が展開していた可能性が窺われる。こうした状況は、集落が丘陵地や奥地にまで広がっていたことを想起させる。そして、この躍進のきっかけのひとつとして、この地域で営まれた須恵器生産との関係が考えられる。

西毛谷Ａ遺跡が所在する丘陵の南側斜面から、広

範囲に展開した徳居窯跡群である。徳居窯跡群は県下最大の須恵器生産地で、現在のところ38基の窯跡が確認されている。最も古いといわれる１号窯（津市河芸町久知野）は土取で消滅しているが、採集資料から６世紀前半に位置づけられる。その後しばらく空白期間があるが、６世紀後半から再び生産を始め７世紀前半にかけて最盛期を迎える。その間、窯は次第に西へ移動し８世紀後半には操業を終える。

古墳については、５世紀前半から後半にかけて、粘土槨を埋葬施設とし、武器など多量の鉄製品が出土した帆立貝式の経塚古墳（24）、円筒埴輪や形象埴輪が出土した西高山１号墳（25）、埴輪列が確認できた同２号墳（26）が築造された。後期から飛鳥時代になると、前述の音長クラスのものに替わって、群集墳が丘陵や平地に出現してくる。ほとんどが径10m前後の円墳である。20基以上からなる寺谷古墳群（27）、25基からなる茶臼山古墳群（28）、46基からなり鈴鹿市南部で最大規模を誇る大野古墳群（29）がその顕著な事例である。

この状況は河芸町においても同様であり、西毛谷Ａ遺跡が所在する丘陵頂部付近で、陶棺が出土した西毛谷北古墳（30）、津市教育委員会によって新たに発見された西毛谷北１号墳（31）、西毛谷北２号墳（32）、合口甕棺が出土した西毛谷南古墳（33）、方筒状土製品が出土したむヶ谷東古墳（34）がある。斜面を下っていくと、小林古墳（35）、丸塚古墳（36）、千松谷古墳（37）、野辺坂古墳群（38）がある。野辺坂古墳群は８つの古墳からなり、ほとんどが円墳である。１・２号墳から円筒埴輪が出土している。さらに、出土場所は不明ながら、野辺坂古墳群内から陶棺が出土している。

古墳時代の集落の多くは、奈良・平安時代へも継続されていく。西高山Ａ遺跡や西高山Ｃ遺跡では古墳時代の竪穴住居と一部併行しながら奈良時代に至る掘立柱建物が多数見つかっている。末野Ｂ遺跡で見つかった建物群の中には、方位や配置に計画性を持った建物が数棟あり、さらにその中には柱掘形が１ｍを超す大型建物や庇付き建物が見受けられ、明らかに一般の集落とは異なった性格の建物群と考えられる。出土遺物には土器類の他、硯が１点出土しており、建物群に識字層の存在を窺わせる。また、郡山遺跡群以外では、千里ヶ丘遺跡や鎌戸遺跡、谷の開口部に所在する追ヶ沢遺跡、丘陵縁辺部に所在した野辺池ノ下遺跡（39）、橋爪Ｂ遺跡についても古代の遺物散布が見られる。

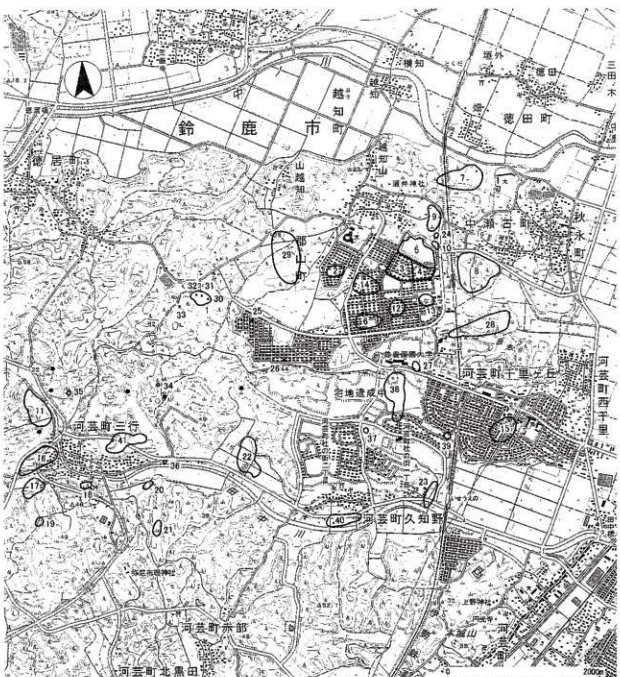
郡山遺跡群における鎌倉時代の集落は末野Ｃ遺跡（５）が顕著で、掘立柱建物が２桁台見つかっている。建物は溝や柵によって区画された屋敷地のような姿をとらず、散村的な様相を呈し、中世村落の姿をとどめている。河芸町では、田中川沿いに成瀬Ａ遺跡（20）、追ヶ沢遺跡、久知野里前遺跡（40）、橋爪Ｂ遺跡が所在し、中世陶器、天目茶椀等が表採されているが、発掘調査を伴っていないこともあり、詳細は不明である。

室町時代に入ると、中世城館が築かれるようになる。この地域で大規模なものとしては、三行城（41）で、複数の郭・堀切・土塁等が確認されている。三重県埋蔵文化財センターによる発掘調査の結果、建物跡は確認されなかった。また、出土遺物も少なく14世紀代の甕をはじめ数点にとどまった。城内で恒常的に生活したというよりは、詰城としての性格を有すると考えられる。城主については、安濃郡に本拠地をおく長野氏に関連した人物とされている。戦国時代末期になると、織田信長の侵攻に伴い、伊勢国の他の城同様、廃絶に追い込まれていく。そして、近世の到来とともに、この地域は新たな秩序に組み込まれていく。

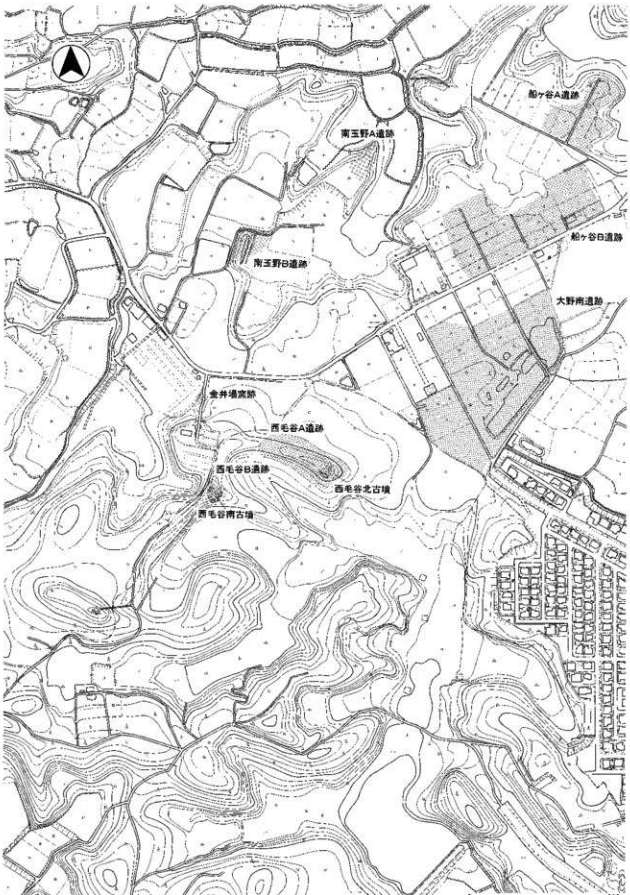
江戸時代、伊勢国に紀州藩の領地が18万石弱あった。この地域は、寛政期、徳居・三行・久知野・上野・郡山は紀州藩領、北黒田・浜田と高佐の一部は久居藩、中瀬の一部は藤堂藩といったように複数の藩の領地が入り組んでいた。三行は田丸城主の管轄のもと、白子代官所の支配下におかれ、税米1,090石を納めていたとされる。西毛谷Ａ遺跡が所在する丘陵は俗に御飯山と称されており、紀州藩の保安林が植樹され、頂上に番人小屋があったと伝わる。発掘調査の折、頂上付近で柱穴を多数確認したが、建物跡にはつながらなかった。しかし、陶器や磁器の小片、貝殻片がまとまって出土しており、生活痕跡の可能性が窺える。

（長谷川）

【参考文献】
・河芸町教育委員会『河芸町郷土史』　1978
・河芸町史編さん委員会『河芸町史』本文編　2001
・河芸町史編さん委員会『河芸町史』資料編　2000
・鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』　1983
・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅱ』　2016
・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅲ』　2016
・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅳ』　2016
・鈴鹿市教育委員会『第３回鈴鹿市埋蔵文化財展　中ノ川流域の考古学』　1993
・鈴鹿市考古博物館『中ノ川流域の考古学』　2012
・千里ヶ丘発掘調査団『千里ヶ丘遺跡発掘調査報告書』　1968
・平凡社『日本歴史地名大系第24巻　三重県の地名』　1983

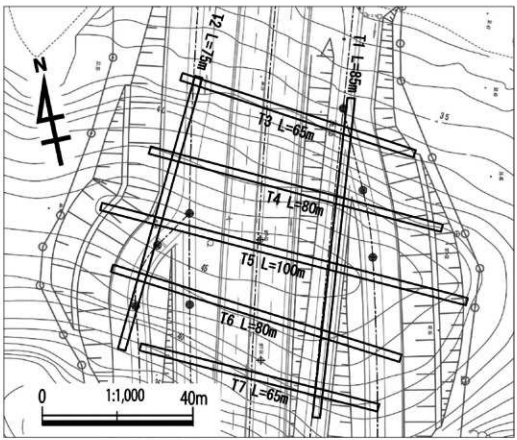


第３図　遺跡位置図（1:50,000）〔国土地理院「白子」1:25,000より作成〕　※図中の番号は本文の遺跡番号と一致

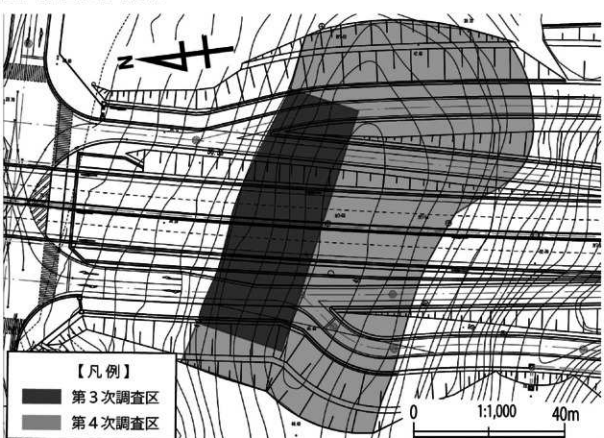


第４図　遺跡周辺地形図（1:5,000）

（2011　三重県共有デジタル地図（数値地形図2500）（三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て調整したもの（平成30年4月5日付け　承認番号：三総合地第１号））である。）



第５図　調査区位置図（第１次）



第６図　調査区位置図（第３・４次）

2　調査前測量と基本層序

a　調査前測量

西毛谷北古墳が調査区内に包含されていること、第1次、第3次、第4次調査範囲の西側で津市教育委員会が実施した第2次調査で古墳2基が確認されており、調査対象範囲内で古墳が確認される可能性が高いと判断したため、調査前測量を行なった（第7図）。

測量の結果、西北西から東北東に派生する丘陵の頂部は幅約15mの範囲で比較的平坦になっている。北側斜面は、斜面角度が11～16°と急傾斜である。南側斜面は標高42～43mを境とし、頂部にかけては斜面角度が7～8°と比較的緩斜面で、裾部では北側と同様の急斜面となっている。

後に、この丘陵南側緩斜面で西毛谷北3～5号墳をはじめとする主要遺構が確認されるのだが、調査前測量時には、これらの古墳に伴うとみられる墳丘や周溝部分の凹みなどの地形の変化は確認できなかった。

b　基本層序

基本層序は、第3次調査区西壁及び第4次調査区東壁、西壁で確認、記録作業を実施した。しかし、第3次調査区は丘陵北側のみとなり、第4次調査区が第3次調査区を包含する形となるため、本報告では、第4次調査区東壁、西壁の土層図を掲載する（第8・9図）。

西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群は、標高39～44mの丘陵上に立地している。丘陵頂部に近い標高42m以上では、上から、表土、黄褐色系砂質土、明赤褐色粘質土（地山）である。地山までの深さは20～45cmで標高が高い所では浅く、標高が低くなると深くなっている。標高42m上り低くなる丘陵裾部付近では、褐色系の粘質土、砂質土、砂等が複雑に堆積している。

遺構検出は、地山面で行なった。（原田）

3　遺　構

a　飛鳥時代

1　墓

SX25　A－V20・21の南側緩斜面から急傾斜にさしかかる地点（標高42.0m）に位置する。長さ2.86m、幅1.2m、深さ27cmである。上方はやや崩れているが、断面形状は箱形である。土層から木棺の痕跡等は確認できなかった。西側から須恵器（11～13）が出土した。

SX27・28（西毛谷北6号墳）（第11図）　A－X・Y19・20の南側急傾斜（標高38.6～40.2m）に位置する方墳である。

周溝（SX28）　北溝と西溝が繋がり、L字状を呈する。北溝東側及び西溝南側は削平されたとみられ、本来は、コの字状又は方形に巡っていたと思われる。平面規模は、東西6.0m以上、南北5.5m以上である。向きは、ほぼNS0°である。

断面形状はV字状である。残りの良い北溝で幅1.24m、深さ67cmである。

主体部（SX27）　長さ2.96m、幅0.58mである。南端は削平されているが、平面形は方形とみられる。底部はほぼ水平で、断面形は箱形である。土層から木棺の痕跡等は、確認できなかった。長軸の向きはNS0°で、周溝の向きと揃っている。

遺物の出土は認められなかった。

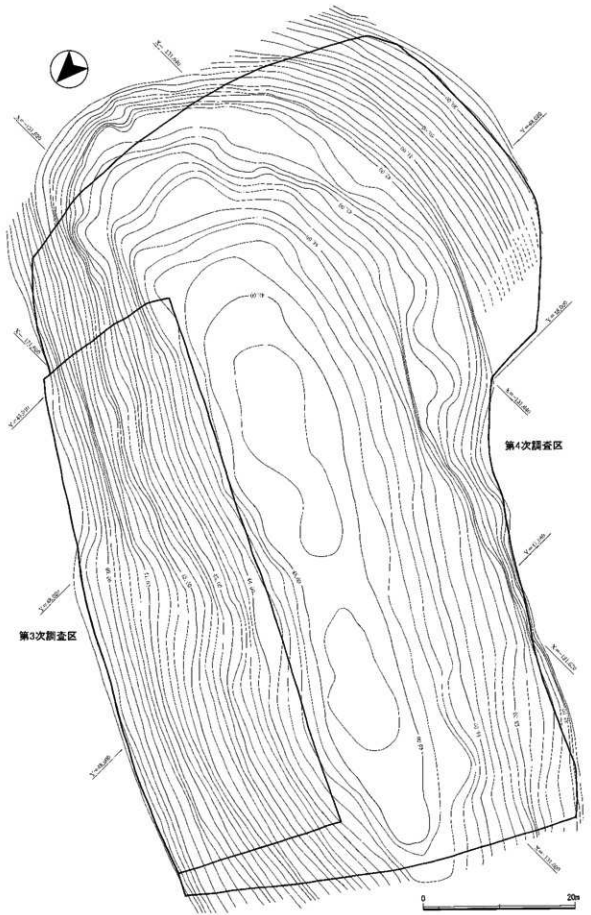
SX29・30（西毛谷北5号墳）（第12～18図）　A－S～U15～19の南側緩斜面（標高42.0～43.6m）に位置する。コの字状に周溝が巡り、埋葬施設は横穴式木室で、埋葬後火化された古墳である。

周溝（SX29）　北溝と西溝、東溝の一部が繋がり、コの字状に巡る。周溝底の標高は、北溝の深い所で42.7m、西溝は42.27mである。平面規模は東西11.7m、南北10m以上である。向きはN40°Wである。

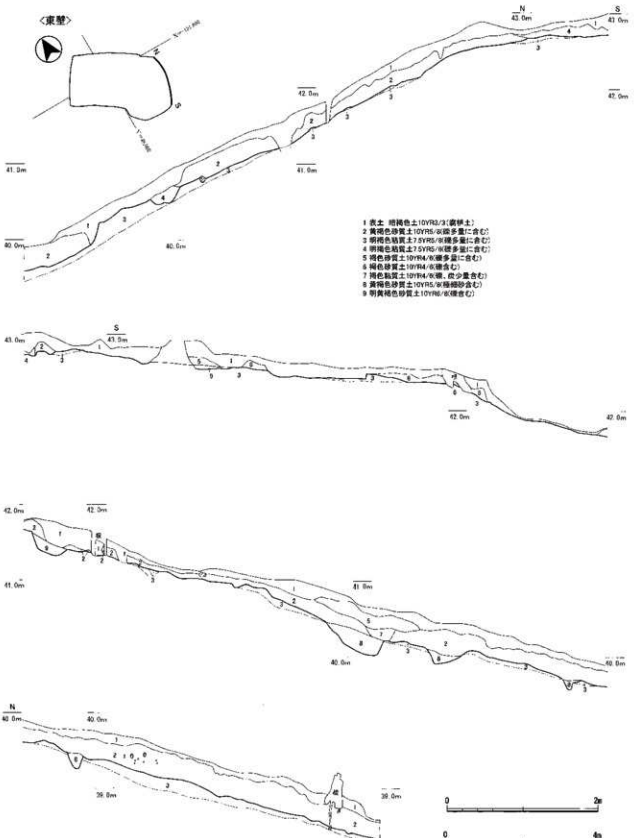
周溝の断面形状はU字状である。残りの良い北溝及び西溝で、幅1.2～2.0m、深さ73cmである。

遺物の多くは西溝から出土したが、いずれも細片となっていて、散在していた。

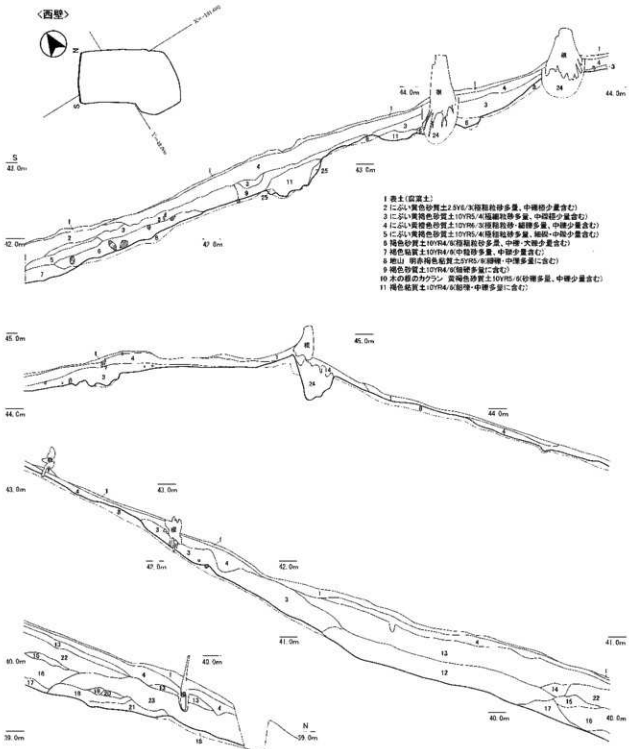
主体部（SX30）　掘形の規模は、長さ5.6m、幅



第７図　調査前測量図（1：500）



第８図　土層図１（延長1：100、深さ1：50）



第９図　土層図２（延長1：100、深さ1：50）

第10図　調査区平面図（1：500）

3.3m、深さ32cmである。向きはN33°Wで周溝の向きよりも若干東へ振る。

床面の状況及び主柱穴（第17・18図）　床面は、柱穴1～4・8・10・11で囲まれた範囲がほぼ平坦であり、その外郭は布堀状になっている。しかし、柱穴4と11を結ぶラインから東は中央で1段下がり、その差は約19cmである。中央部の落ち込みと柱穴4の間は、主体部の短軸方向に沿って溝状の落ち込みが確認された。柱穴4と11を結ぶライン以西の床面が平坦な範囲は玄室に、以東の1段下がる箇所が羨道にあたる部分と考えられ、溝状の落ち込みが玄室と羨道を区切る何らかの施設の痕跡であったと考えられる。

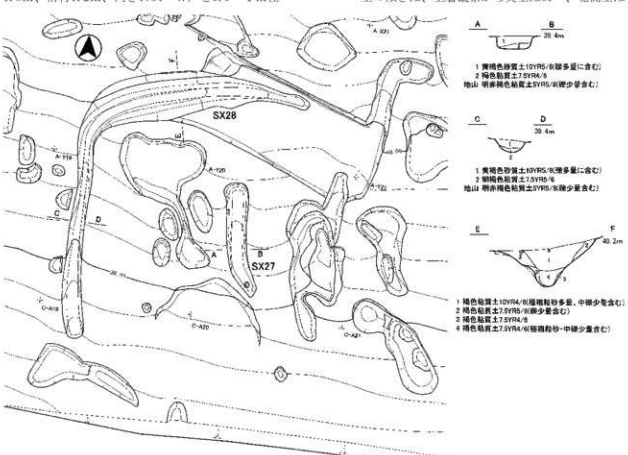
木室及び羨道の一部を構成するとみられる柱穴は2～5・8・10・11・13であるが、柱穴の向きは揃わない。柱穴の並びからみると、柱穴2・3・8・10の1間×1間（梁行2.25m、桁行1.25m、向きN30°W）と柱穴4・5・11・13の1間×1間（梁行1.8m、桁行1.2m、向きN34°W）を0.9～1m程離して桁を繋げる形で組合せ、梁行1間×桁行3間の構造物になると想定される。

柱穴は概ね垂直に近い形で掘削されていたが、柱穴12のみ柱が北向きに約64°の傾斜をつけて掘削されていた。また、柱穴13の掘形埋土には粘土が認められた（写36）。

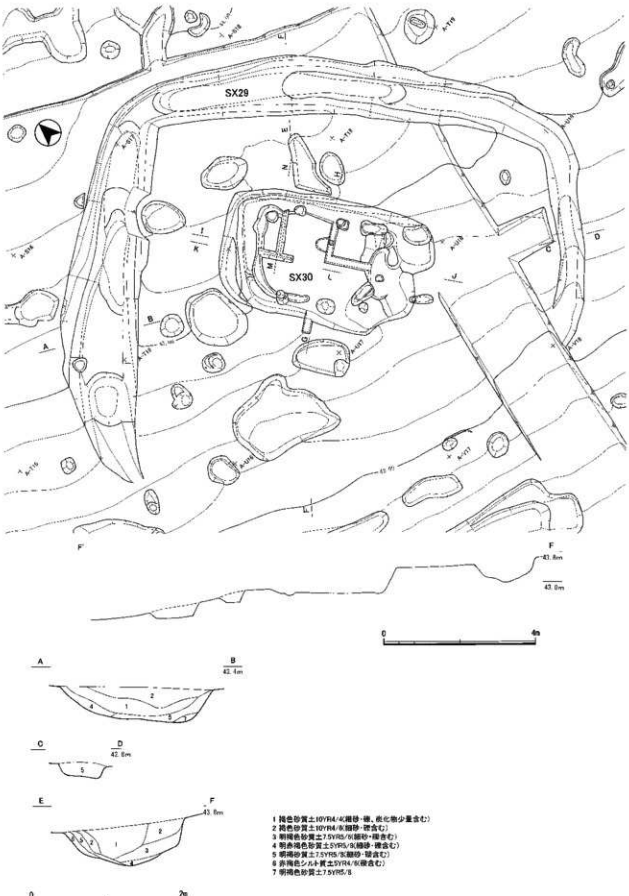
炭化材の分布及び堆積状況　検出開始時は、標高の高い北西部で橙色砂質土や明褐色砂質土が厚く堆積し、標高の低い南東部で炭や焼土を確認した。北西部で確認した砂質土を除去すると、掘形よりもひと回り狭い範囲（東西3.0m、南北2.1m）で、炭・焼土の堆積が認められる。炭・焼土の分布域の外縁は、側壁・奥壁の並びとなる。

側壁及び奥壁とみられる炭化材の並びは部分的に確認した。主体部西半の布堀状の溝が確認されている箇所では主体部内側の傾斜に沿う形で、その東側の柱穴3・4・10・12では柱穴の内側寄りで認められる。

壁の傾きは、土層観察から奥壁は61°、北側壁は



第11図　SX27・28（西毛谷北6号墳）平面図（1：100）、土層図（1：50）



第12図　SX29・30（西毛谷北５号墳）平面図（1：100）、土層図（1：50）

70°、南側壁は50°である。

壁材とみられる炭化材は、木室内側の炭化箇所のみ残存しており、その様相から、径15～30cm程度の丸太材あるいは半截材を並べていたと考えられる。炭の多くは粉状となっていたが、一部炭化材として残存し、向きの判るものもあった。炭化材の分布を便宜的に側壁・奥壁確認前後の２段階に分け、分布を示したのが第14図である。

側壁・奥壁確認前、確認後共に、炭化材は柱穴２・４・８・11に囲まれた範囲に認められ、特に東半部である柱穴３・４・10・11に囲まれた範囲に集中している。向きは主体部の長軸方向、短軸方向を向いたものが多い。梁材及び桁材、天井部分の材であると考えられる。

側壁・奥壁確認後の炭化材は、確認前とほぼ同じ範囲に分布するが、向きの判るものの量は少ない。

また、第14図では示せなかったが、柱穴７を中心とする１段低い箇所では、細かい炭化材が様々な向きで出土し、前者の様相とは異なる。

炭化材の一部について樹種同定を実施した結果、いずれもスギであることが判明した。

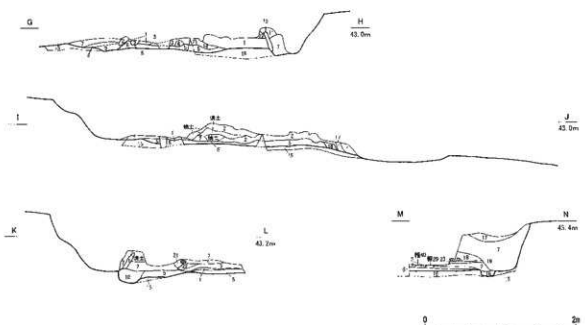
埋土の堆積状況は柱穴４と11を結ぶラインを境に西側と東側で大きく変化している。

西側は地山直上で明褐色砂質土が数cm堆積し、その上に炭、焼土、土が複雑に堆積している。それに対し東側は、炭、焼土、砂質土及び粘質土がブロック状に混入し、攪拌されたような堆積状況である。

炭化材の出土状況や堆積状況の違いは、床面の調査で玄室想定部分と羨道想定部分による違いに繋がるものと見受けられる。

遺物出土状況（第15・16図）　遺物は須恵器26点、耳環３点出土した。いずれも炭層からの出土で、多くは地山直上に数cm堆積する明褐色砂質土の上で確認した。

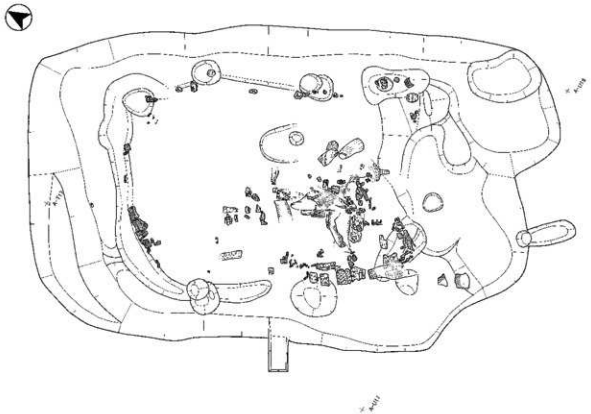
須恵器は、２箇所にまとまって認められた。１箇所は柱穴３・４・10・11で囲まれた範囲（主体部東半）で、もう１箇所は柱穴２・８と奥壁で囲まれた範囲（主体部西半）であった。



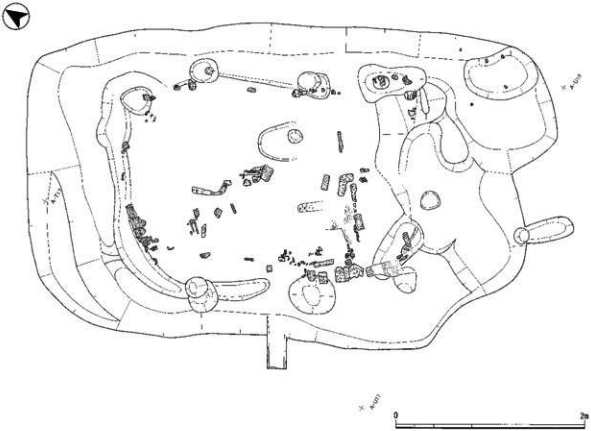
1 褐色粘質土7.5YR4/4(極細粒砂多量に含む)
2 炭
3 焼土　鈍赤褐色砂質土5YR2/4(極細粒砂多量に含む)
4 黒褐色砂質土7.5YR3/1(極細粒砂多量に含む)
5 暗褐土　明褐色砂質土7.5YR5/6(極細粒砂多量に含む)
6 明赤褐粘質土7.5YR4/6(極細粒砂多量、炭少量含む)
7 明褐色砂質土7.5YR5/6(極細粒砂多量、細～中礫少量含む)
8 褐色粘質土7.5YR4/6(極細粒砂多量、細礫少量含む)
9 にぶい褐色砂質土7.5YR5/4(極細粒砂多量に含む)
10 褐色砂質土7.5YR6/6(極細粒砂多量、炭少量含む)
11 明黄褐色砂質土10YR6/6(極細粒砂多量、暗赤褐色砂質土5YR3/4・炭を含む)
12 明黄褐色砂質土10YR6/6(極細粒砂多量に含む)
13 黒褐色砂質土7.5YR3/2(極細粒砂多量、炭を含む)
14 暗褐色砂質土7.5YR3/3(極細粒砂多量に含む)
15 明赤褐色粘質土5YR5/6(極細粒砂多量、細～中砂少量含む)
16 褐色粘質土10YR4/6(極細粒砂多量、炭少量含む)
17 褐色粘質土10YR4/4(極細粒砂多量、炭少量・焼土含む)
18 褐色粘質土7.5YR4/6(極細粒砂・細～中礫多量に含む)
19 褐色粘質土7.5YR4/4(極細粒砂～細・中礫多量に含む)
20 暗褐色砂質土7.5YR3/4(極細粒砂多量、細礫少量含む)
21 焼土　黒褐色砂質土7.5YR2/2(極細粒砂多量、細礫少量含む)
22 焼土　極暗褐色砂質土7.5YR2/3(極細粒砂多量、細礫少量含む)

第13図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）土層図（1：50）

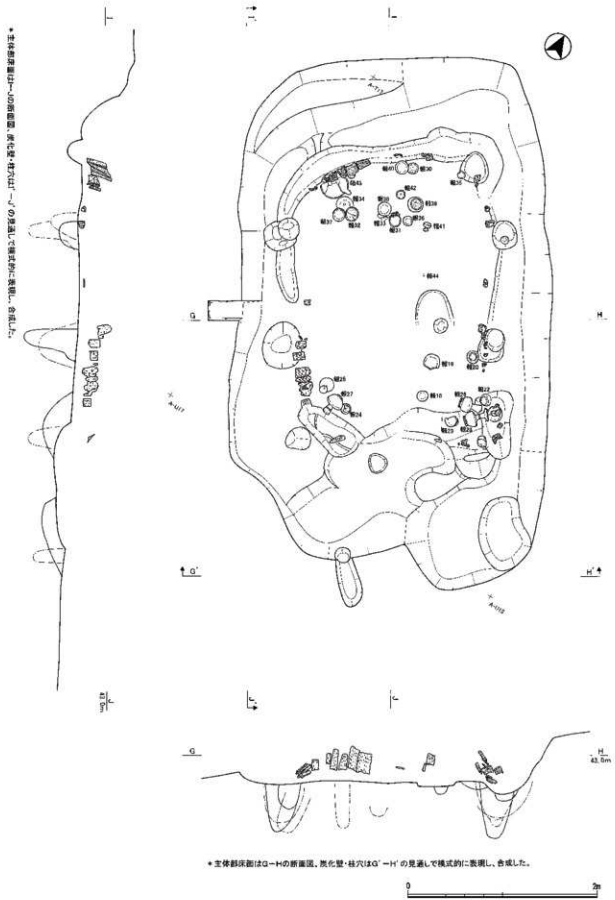
奥壁・側壁確認前



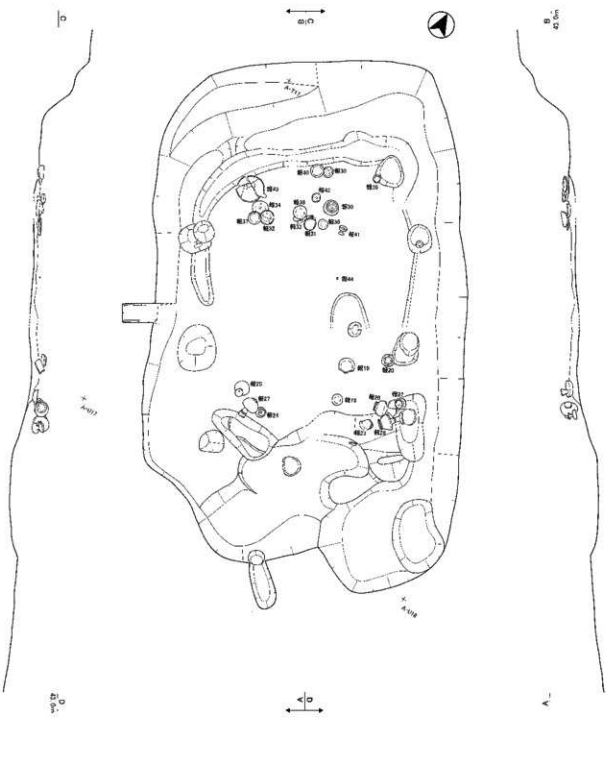
奥壁・側壁確認後



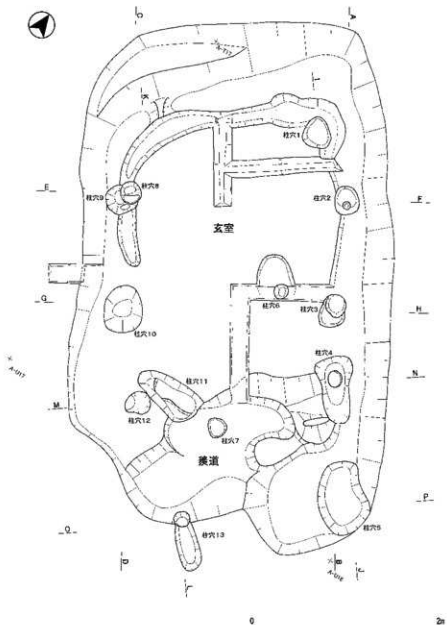
第14図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）炭出土状況図（1：40）



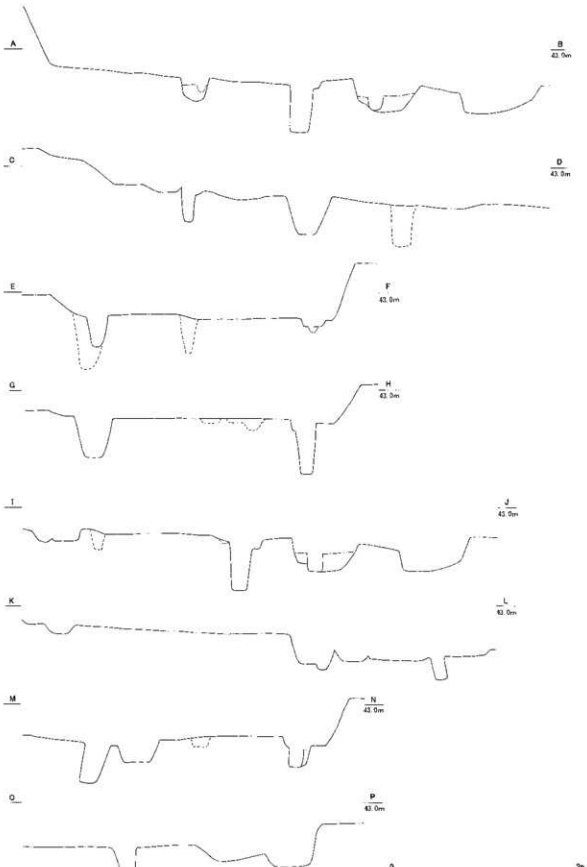
第15図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）出土状況図、炭化壁・柱穴配置図（1：40）



第16図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）出土状況図、断面見通し図（1：40）



第17図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）平面図（1：40）



第18図　SX30（西毛谷北５号墳主体部）断面図（1：40）

主体部東半は杯、椀、高杯、長頸壺、平瓶、皿[11]などがある。

杯（18～20）は主体部東半でも北寄りで確認した。第26図19・20（以下、遺物番号のみ示す）いずれも床面より高い位置で確認し、20は口縁部が下を向いた状態で出土した。18は床面直上で出土した。

高杯（22～24）は柱穴４付近で２点（22・23）、柱穴11付近で１点（24）出土した。22・23はいずれも斜めで床面よりやや高い位置で確認し、22は口縁部が下を向いた状態で出土した。24も口縁部が下を向いた状態で出土した。

長頸壺（26～28）はいずれも横向きに倒れた状態で出土した。26・28は柱穴４に、27は柱穴11に口縁部を向けていた。

平瓶25は長頸壺27の東隣で確認し、床面直上で出土した。

椀21・皿29は主体部東半から出土したが、詳細な出土地点及び出土状況は不明である。

主体部西半は、杯、椀、杯蓋、高杯、皿などがある。

杯は、35が柱穴１に近接しているほかは柱穴２と８を結んだライン寄りで確認した。いずれも床面直上で出土したが、杯36・39は口縁部を床面に向けた状態であった。

椀40はまとまりの西側中央部に位置する。奥壁に接し、床面直上で出土した。

杯蓋は杯や椀に近接した状態で出土した。杯蓋30は椀40の北隣に、杯蓋31・33は杯36・38に、杯蓋32・34は椀37に接していた。いずれもほぼ床面直上で確認した。摘みを上にした状態で出土したのは34のみで、多くは摘みを下に向けた状態で出土した。また、33は数片に割れた状態で、杯蓋31・杯38の下から出土した。

高杯（41・42）は杯39の東約10cmで41が横に倒れた状態で、杯39の西約10cmで42が口縁部を床面に向けた状態で、それぞれ出土した。

皿43は、まとまりの南西寄りに位置し、奥壁に接していた。把手部分はほぼ東を向き、床面直上で口縁部を上にして出土した。

耳環（44～46）のうち44は柱穴２・３・８・10に囲まれた中央やや北寄りで、46は柱穴３・４・10・11に囲まれた中央やや北寄りの杯19の下から出土した。45の出土状況は不明であるが、主体部をG－H、I－Jで４分割したうちの北西部で出土した。３点いずれも須恵器の出土土層と同じで地山直上に数cm堆積する明褐色砂質土よりも上の炭層から出土した。

ＳＸ33（第19図）　A－T・U14・15の南側急傾斜（標高40.8～42.3m）に位置する。ＳＸ29西溝の延長線上にあり、向きも揃っている。長さ4.5m、幅2.1m、深さ88cmである。

中央やや北寄りの墓壙底部から有蓋長胴棺50とみられる須恵器が出土した。これは口縁部から体部下半かけて全体の1/5程度残存しており、外面を墓壙底部に、口縁部を北側に向けて倒れた状態で出土した。また、有蓋長胴棺の西側でこぶし大の礫３～４点が並んでいるのが確認でき、墓壙底部と有蓋長胴棺の隙間にあることから、横向きの有蓋長胴棺を固定したのではないかと思われる。さらにその上には別個体の須恵器（壺又は甕）体部片が数点重なって出土した。

ＳＸ47（西毛谷北４号墳）（第20図）　A－N～P６～８の南側緩斜面から急斜面への変換点（標高42.2～43.2m）に位置する方墳である。周溝のみ確認した。

周溝　南半部は急傾斜で削平されたとみられ、北半部のみ確認した。周溝底の標高は、北溝で42.75m、西溝で42.39m、東溝で42.13mである。平面規模は東西８m、南北４m以上である。向きはN40°Eである。

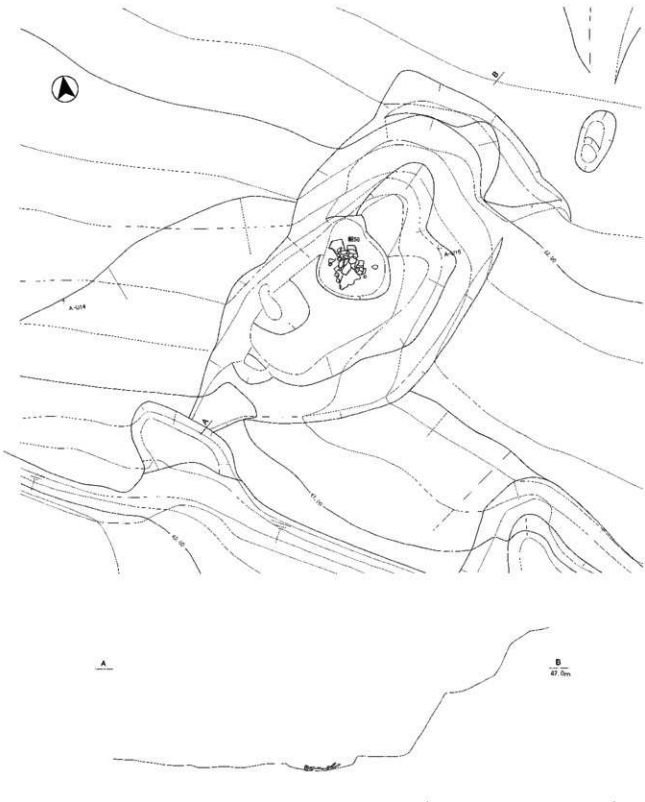
周溝の断面形状は北溝及び東溝がU字状で、西溝が逆台形である。幅1.2m、深さは残りの良い北溝で51cmである。

東溝から皿51が出土した。

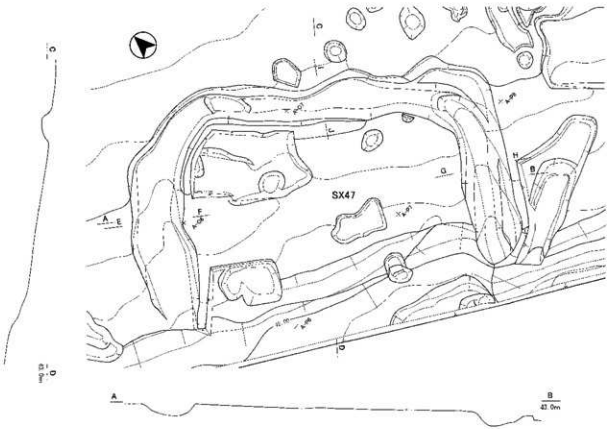
ＳＸ48（西毛谷北３号墳）（第21図）　A－K～M５～７の南側緩斜面（標高43.8～44.3m）に位置する方墳である。周溝のみ確認した。

周溝　緩斜面であるため、南半部は削平されたとみられ、北半部のみ確認した。周溝底の標高は、北溝で43.77m、西溝で43.60m、東溝で43.53mである。平面規模は東西７m、南北3.5m以上である。向きはＳＸ47よりもやや東を向き、N50°Eである。

周溝の断面形状は概ねU字状である。幅2.0m、



第19図　SX33出土状況図、断面図（1：40）



第20図　SX47（西毛谷北４号墳）平面図・断面図（1：100）、**土層図**（1：50）　0　4m

深さは残りの良い北溝で52cmである。

土師器片、須恵器片が出土したが、図示できなかった。

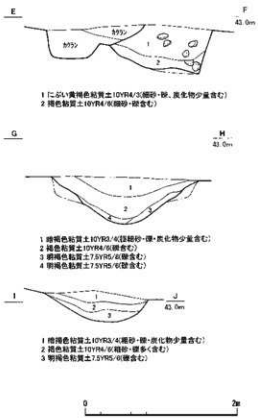
ＳＸ49（第22図）　Ａ－Ｌ７の南側緩斜面（標高44.2m）に位置する。ＳＸ48周溝の北西隅に重複しており、ＳＸ48よりも新しい。長さ1.7m、幅1.2m、深さ44cmである。

中から須恵器甕２点（南が53、北が54）が出土した。甕は２点とも横向きで、53は肩部を打ち欠き、54の口縁部に対して合口となる状態で出土した。甕内部の堆積土は53と54で明瞭な色調等の違いは認められなかったが、54内の埋土の方がやや粘性が高かった。

掘形は２点の甕を合口にした形状より、ひと回り大きい程度である。

甕（53・54）埋土から炭化材が確認され、樹種同定を実施したところ、スダジイであることが判明した。

ＳＸ55（第22図）　Ａ－Ｊ４・５の南側緩斜面（標高44.2m）に位置する。長さ2.26m、幅0.72m、深さ38cmである。上部は別の遺構により削平されてい



るが、平面形は隅丸方形で、断面形状は逆台形で底は平坦である。土層から木棺の痕跡等は確認できなかった。長軸の向きはN57°Wで、等高線の向きに沿っている。

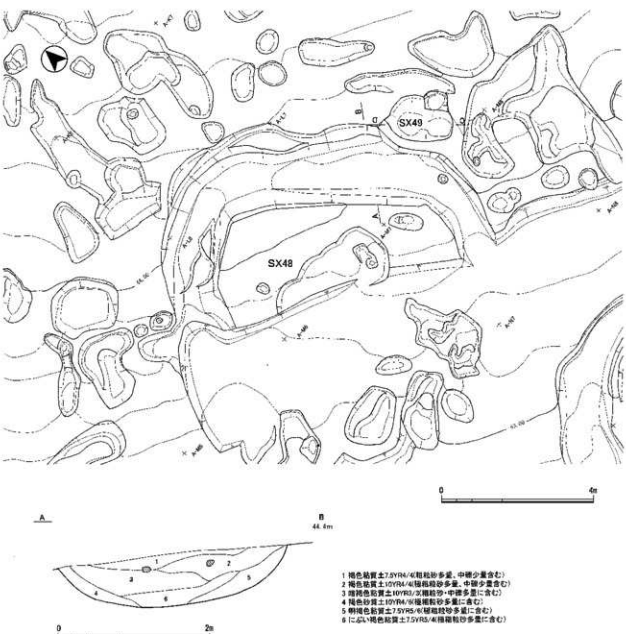
南西隅の床面より約10cm上で、須恵器杯59が口縁部を上にして出土した。

2 溝

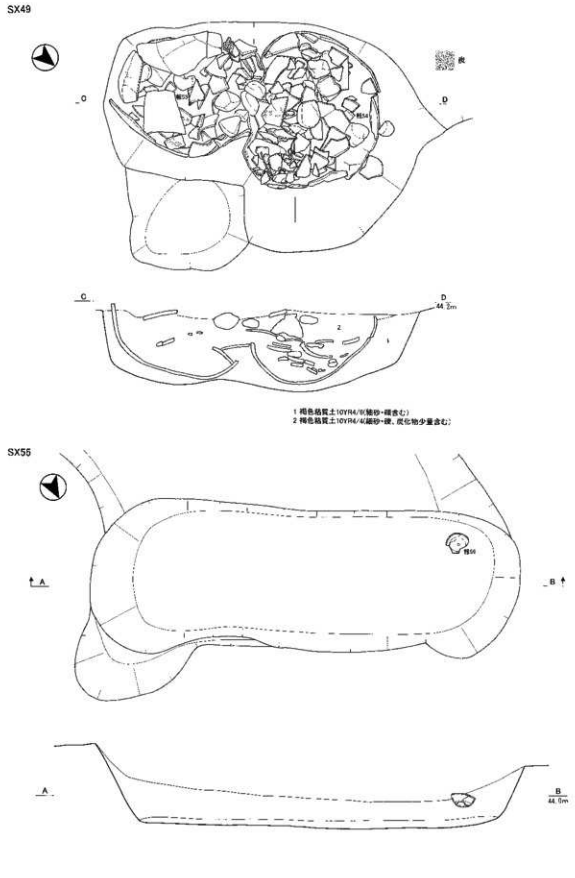
ＳＤ54 Ａ－Ｋ・Ｌ３・４の南側緩斜面（標高43.0～43.4m）に位置する。等高線に沿うように蛇行し、西端で等高線に対し直交する。長さ6.5m、幅１m、深さ41cmである。須恵器杯（61・62）が出土した。

3 土坑

ＳＫ34 ＳＸ29・30（西毛谷北５号墳）の南、Ａ－Ｖ16・17の南側緩斜面から急傾斜への変換点（標高41.2～41.5m）に位置する。西側は、第１次調査Ｔ７区で削平されており、長さ5.5m以上、幅1.5mである。底は東端を除きしっかりと掘削されており、深い所で51cmである。古墳周溝の一部とも想定したが、付近のＳＸ27・28（西毛谷北６号墳）やＳＸ29・30（西毛谷北５号墳）、ＳＸ33との位置や向きを見



第21図 SX48（西毛谷北３号墳）・SX49平面図（1：100）、SX48土層断面図（1：50）



第22図　SX49出土状況図・断面図、SX55出土状況図・見通し図（1：20）

た時の相関関係が不明瞭であり、土坑とした。須恵器壺63のみ出土した。

ＳＫ52（第23図）　ＳＸ48の南西、Ａ－Ｍ４の南側急傾斜に程近い緩斜面（標高42.6～42.8m）に位置する。長さ2.2m、幅0.86m、深さ14cmで、不整形である。東側から須恵器高杯64が口縁部を下に向けつつも傾いた状態で、平瓶65と共に底部よりやや高い位置で出土した。

ＳＫ53　ＳＸ48の西側、Ａ－Ｋ・Ｌ５の南側緩斜面（標高43.8～44.0m）に位置する。長さ1.8m、幅1.42m、深さ38cmで、不整円形である。須恵器杯及び高杯（66・67）が出土した。

4　Pit

Ａ－Ｋ７　Ｐｉｔ１（第23図）　ＳＸ48の北側、丘陵頂部（標高44.6m）に位置する。長さ0.76m、幅0.64m、深さ13cmで、楕円形である。須恵器椀68が底から約７cm上で、口縁部を上にするもののやや傾いた状態で出土した。

Ａ－Ｏ23　Ｐｉｔ１　丘陵頂部から東側緩斜面にさしかかる辺り（標高44.4m）に位置する。長さ0.48m、幅0.36mで、楕円形である。底は東側が深くなり、深さは31cmである。須恵器片が出土したが、図示できなかった。

b　平安時代

1　墓

ＳＸ41（第23図）　Ａ－Ｑ・Ｒ13の南側緩斜面から急傾斜にさしかかる所（標高43.0～43.6m）に位置する。墓壙の北から2/3程で地形の変換点にあたり、北側と南側で平面形態及び底部の傾き等大きく異なる。墓壙の南側は地すべりなどの影響を受けたのではないかと推察される。長さ2.28m、幅0.84mの方形で深さは13cm、底部は標高43.2～43.3mの平面であったと思われる。向きはＮ５°Ｗで、ほぼ北を向いている。埋土から木棺の痕跡は確認できなかったが、墓壙内から釘８点（71～78）出土し、木棺直葬であったと考えられる。釘は床面から10cm程度高い位置で出土した。この他、灰釉陶器小瓶69は北東側の床面から約20cm上で口縁部が南側に倒れたような状態で、刀子70は中央部西端のほぼ床面直上でそれぞれ出土した。

c　江戸時代

1　墓

ＳＸ26（第24図）　Ａ－Ｖ22の南側緩斜面（標高41.4～41.6m）に位置する。長さ0.92m、幅0.68m、深さ40cmで不整方形であるが、この形状は削平された結果であり、本来は隅丸方形であったとみられる。主軸はＮ15°Ｅである。

上層（１層）で15～40cm大の礫のまとまりを確認した。また、中層（２層）の北半部から、キセルと寛永通宝５点（79～84）が出土した。

2　溝

ＳＤ14　Ａ－Ｑ・Ｒ24・25の丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.4～43.8m）に位置する。長さ5.2m、幅0.56m、深さ５cmで、Ｌ字状を呈す。北辺は等高線に直交、東辺は等高線に沿うような向きを示す。常滑陶器片が出土したが、図示できなかった。

ＳＤ17　調査区東端、Ｂ－Ｑ～Ｓ１・２の丘陵頂部から東への緩斜面（標高42.7～43.0m）に位置する。長さ6.8m以上、幅0.9m、深さ23cmである。向きはほぼ等高線に沿っている。重複関係は、ＳＫ16より古い。近世陶器椀、磁器碗、瓦質焙烙等が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

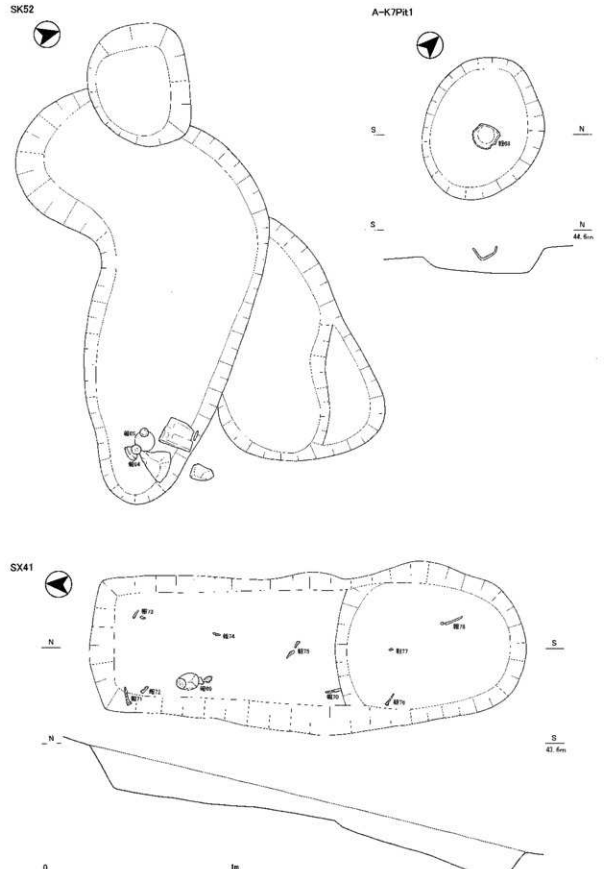
3　土坑

ＳＫ11　Ｂ－Ｑ１、丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.0～43.2m）に位置する。長さ1.34m、幅1.3m、深さ30cmで不整円形である。近世磁器片及び瓦片が出土したが、図示できなかった。

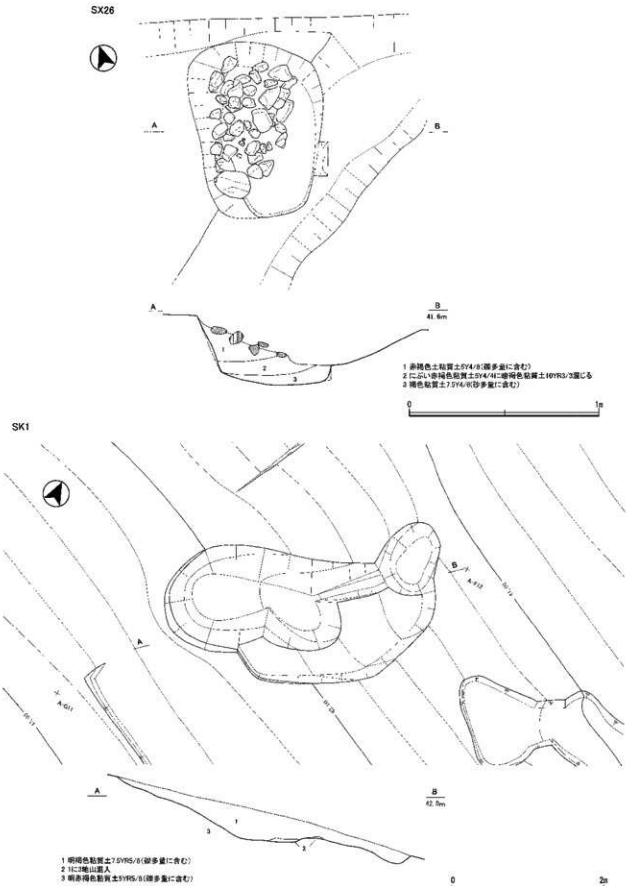
ＳＫ13　Ａ－Ｐ25及びＢ－Ｐ１、東側緩斜面から北側斜面にかけて（標高43.2～43.4m）位置する。長さ2.46m、幅1.34mで、不整方形である。底は標高が下がるにつれて深くなり、深い所で40cmである。土師器小片が出土したのみである。

ＳＫ15　Ａ－Ｒ・Ｓ25の丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.2～43.4m）に位置する。長さ1.9m、幅1.3m、深さ18cmの不整円形である。近世陶器、磁器、瓦質土器、瓦等（85～90）が出土した。

ＳＫ16　調査区東端、Ｂ－Ｒ・Ｓ１の丘陵頂部か



第23図　SK52、A-K7Pit1、SX41出土状況図・断面図（1：20）



第24図　SX26平面図・断面図（1：20）、SK1平面図・断面図（1：50）

ら東への緩斜面（標高42.6m）に位置する。長さ1.84m、幅1.04m、深さ6cmで、不整形である。重複関係は、ＳＤ17より新しい。土師器小皿91が出土した。

ＳＫ18　Ｂ－Ｓ・Ｔ１の丘陵頂部から東への緩斜面（標高42.4m）に位置する。長さ1.02m、幅0.92m、深さ6cmで、楕円形である。出土遺物は図示したもの（92～97）のほか、常滑陶器片や瓦質土器片なども確認した。

ＳＫ19　Ａ－Ｑ・Ｒ23の丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.8～44.0m）に位置する。長さ3.08m、幅1.58m、深さ12cmで、不整形である。近世陶器の小片が出土したのみである。

ＳＫ20　Ａ－Ｏ23の丘陵頂部から東側緩斜面にさしかかる辺り（標高44.4m）に位置する。長さ0.7m、幅0.48m、深さ26cmで、方形である。埋土は炭を大量に含み、他の土坑と様相を異にする。床面及び側壁等は被熱した形跡が認められなかった。キセル吸口及び近世陶器乗燭（98・99）が出土した。

ＳＫ21　Ａ－Ｓ22・23の丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.8m）に位置する。長さ0.96m、幅0.88m、深さ12cmで、円形である。出土遺物は図示したもの（100～103）のほか、常滑陶器片も出土した。

ＳＫ22　Ａ－Ｑ・Ｒ22の丘陵頂部から東への緩斜面にさしかかる辺り（標高44.4m）に位置する。長さ2.28m、幅1.4mで、不整形である。底は標高が下がる所で深くなり、深い所で23cmである。近世の磁器、陶器等が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

ＳＫ23　Ａ－Ｒ・Ｓ21の丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.8～44.2m）に位置する。長さ3.5m、幅2.6mで、不整形である。底は凹凸があり、深い所で46cmである。近世磁器染付碗104が出土した。

4　Pit

Ａ－Ｑ24　Ｐｉｔ１　丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.9m）に位置する。長さ0.78m、幅0.36mの楕円形で、底は標高の低い側で深くなり、深さ19cmである。近世陶器片が出土したが、図示できなかった。

Ａ－Ｒ21　Ｐｉｔ１　丘陵頂部から東への緩斜面（標高44.4m）に位置する。長さ0.6m、幅0.3mで、楕円形である。底は東側で深くなり、深い所で20cmである。近世陶器片が出土したが、図示できなかった。

Ａ－Ｔ23　Ｐｉｔ１　南緩斜面（標高43.0m）に位置する。長さ1.2m、幅0.8mで不整形である。底は中央部が最も深く36cmである。近世陶器105が出土した。

Ａ－Ｒ24　Ｐｉｔ１　丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.7m）に位置する。長さ0.68m、幅0.48m、深さ17cmで、楕円形である。近世陶器106が出土した。

Ａ－Ｒ24　Ｐｉｔ２　丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.7m）に位置する。長さ0.34m、幅0.26m、深さ35cmで、楕円形である。近世陶器片が出土したが、図示できなかった。

Ｂ－Ｐ１　Ｐｉｔ１　丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.0m）に位置する。長さ0.86m、幅0.8m、深さ26cmで不整方形である。近世の磁器、陶器等出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

Ｂ－Ｐ１　Ｐｉｔ２　丘陵頂部から東への緩斜面（標高43.0m）に位置する。長さ0.32m、幅0.26mで不整形である。底は中央で深くなり、50cmである。近世磁器107の他、須恵器片が出土した。

d　時期不明

時期不明の遺構の中には、遺物が出土するものの細片であったり、出土遺物の時期特定ができるものの出土状況等からみて遺構の時期特定に至らなかったりするものも含めている。

1　溝

ＳＤ２　Ａ－Ｉ・Ｊ19～21の北側斜面中腹から裾部（標高39.4～41.2mの間）に位置する。幅１～1.8m、深さ24cmで、方形に半周する。当初古墳周溝の可能性も想定したが、南緩斜面で確認した古墳周溝の形状と異なること、遺物の出土が認められなかったことから、溝とした。

ＳＤ３　Ａ－Ｋ・Ｌ18・19の北側斜面頂部から中腹（標高42.8～43.8m）に位置する。幅0.5m、深さ24cmで、やや蛇行しつつもＬ字状に巡る。ＳＤ２同様、古墳周溝の可能性も想定したが、周溝にしては幅が狭く、断面形状も異なる。どちらかというと、ＳＤ14などと同じような近世の溝である可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

2　土坑

ＳＫ１（第24図）　Ａ－Ｆ11の北側斜面中腹から裾部（標高41～42.1m）に位置する。長さ3.76m、幅1.6mで不整形である。底は丘陵頂部側が裾部より深くなり、最深で61cmである。埋土は底付近に一部地山ブロック土が混入するが、基本的に１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ24　Ａ－Ｐ20・21の丘陵頂部から東側斜面への移行部（標高44.8m）に位置する。長さ２m、幅0.56m、深さ17cmの円弧状を呈する。縄文土器の細片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ31　Ａ－Ｐ15・16の南側緩斜面（標高44.5m）に位置する。長さ2.8m、幅1.3m、深さ12cmで長楕円形である。土師器片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ35　Ａ－Ｔ16の南側緩斜面（標高43.0m）、ＳＸ30の南西に位置する。長さ1.58m、幅1.2m、深さ17cmで円形である。

ＳＫ38　Ａ－Ｌ14の丘陵頂部から北側斜面への移行部（標高44.8m）に位置する。長さ3.2m、幅2.7m、深さ12cmで不整形である。フレーク９が出土した。

ＳＫ39　Ａ－Ｎ15の丘陵頂部（標高44.8m）に位置する。長さ1.54m、幅1.12mで不整形である。底は凸凹があり、深さは浅い所で26cm、最深部で52cmである。縄文土器10が出土したのみである。

ＳＫ40　Ａ－Ｐ13の南側緩斜面（標高43.8～44.2m）に位置する。長さ1.56m、幅2.8m、深さ39cmで不整円形である。重複関係は、ＳＫ42より古い。縄文土器の細片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ42　Ａ－Ｐ・Ｑ13の南側緩斜面（標高43.8～44.0m）に位置する。長さ1.4m、幅0.56m、深さ42cmで不整形である。重複関係は、ＳＫ40より新しい。縄文土器の細片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ43　Ａ－Ｏ・Ｐ12の南側緩斜面（標高43.8～44.3m）に位置する。土坑の南端は第１次Ｔ６の調査で削平されており、長さ4.2m以上、幅1.88m、深さ11cmで、長軸の向きは等高線に対しほぼ直交している。石製品108が出土したのみである。

ＳＫ44　Ａ－Ｐ・Ｑ12の南側緩斜面（標高43.5～44.0m）に位置する。長さ3.2m、幅1.48m、深さ13cmで、長辺の向きは等高線に対しほぼ直交している。

ＳＫ45　Ａ－Ｏ11の南側緩斜面（標高44.0m）に位置する。長さ2.06m、幅1.08m、深さ37cmで不整形である。

ＳＫ46　Ａ－Ｌ・Ｍ７・８の南側緩斜面（標高43.8～44.4m）、ＳＸ48の東側に位置する。長さ4.36m、幅3.3mで不整形である。底は凸凹があり、深さは浅い所で３cm、深い所で38cmである。縄文土器とみられる細片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ50　Ａ－Ｋ７の丘陵頂部（標高44.7m）、ＳＸ48の北側に位置する。長さ1.36m、幅1.08m、深さ29cmで、楕円形である。底は東側で深くなり、深い所で38cmである。縄文土器の細片が出土したが、図示できなかった。

ＳＫ51　Ａ－Ｉ16の丘陵頂部（標高44.9m）に位置する。長さ2.9m、幅1.46mで不整形である。底は北側が深く75cmである。

ＳＫ56　Ａ－Ｉ４の丘陵頂部（標高44.7m）に位置する。長さ0.5m、幅0.46m、深さ13cmで不整形である。縄文土器とみられる細片が出土したが、図示できなかった。

3　Pit

Ａ－Ｑ22　Ｐｉｔ１　東側緩斜面（標高44.4m）に位置する。長さ0.52m、幅0.38cm、深さ14cmで楕円形である。土師器小片が出土したのみである。

（原田）

【註】

（１）河芸町史編さん委員会『河芸町史』史料編上巻　2000では「把手付浅鉢」と報告されているが、本報告書では皿とした。

遺構名	調査次	地区	規模			時代	出土遺物	備考
			長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SK1	3次	A-F11	3.76	1.6	61	不明	なし	
SD2	3次	A-I・J19～21	10.5↑	1.8	24	不明	なし	
SD3	3次	A-K・L18・19	7.2↑	0.5	24	不明	なし	
SK11	4次	B-Q1	1.34	1.3	30	江戸	瓦、磁器	
SK12	4次	—	—	—	—	—	—	欠番
SK13	4次	A-P25、B-P1	2.46	1.34	40	江戸	土師器	
SD14	4次	A-Q・R24・25	5.2	0.56	5	江戸	常滑陶器片	区画溝か
SK15	4次	A-R・S25	1.9	1.3	18	江戸	陶器（椀、擂鉢、灯明皿）、磁器（碗）、瓦質土器（焙烙）、瓦	
SK16	4次	B-R・S1	1.84	1.04	6	江戸	土師器（皿）	
SD17	4次	B-Q～S1・2	6.8↑	0.9	23	江戸	陶器（椀）、磁器（碗）、瓦質土器（焙烙）	
SK18	4次	B-S・T1	1.02	0.92	6	江戸	常滑陶器片、瓦質土器片	
SK19	4次	A-Q・R23	3.08	1.58	12	江戸	陶器片	
SK20	4次	A-O23	0.7	0.48	26	江戸	陶器（秉燭）、キセル	炭を大量に含む
SK21	4次	A-S22・23	0.96	0.88	12	江戸	土師器片、常滑陶器片、瓦質土器、陶器	
SK22	4次	A-Q・R22	2.28	1.4	23	江戸	土師器片、陶器片	
SK23	4次	A-R・S21	3.5	2.6	46	江戸		
SK24	4次	A-P20・21	2	0.56	17	不明	縄文土器片	
SX25	4次	A-V20・21	2.86	1.2	27	飛鳥	須恵器（蓋）	墓壙のみ確認（木棺直葬墓か）
SX26	4次	A-V22	0.92	0.68	40	江戸	寛永通宝、キセル	近世墓
SX27	4次	A-Y20	2.96	0.58	32	飛鳥	なし	西毛谷北6号墳（主体部）
SX28	4次	A-X・Y19・20	6.0↑×5.5↑	1.24	67	飛鳥	なし	西毛谷北6号墳（周溝）
SX29	4次	A-S～U15～19	11.7×10.0↑	2	73	飛鳥	須恵器（壺・瓶）	西毛谷北5号墳（周溝）
SX30	4次	A-S～U16・17	5.6	3.3	32	飛鳥	須恵器（杯・杯蓋・椀・高杯・長頸壺・平瓶・皿等）、耳環	西毛谷北5号墳（主体部）
SK31	4次	A-P15・16	2.8	1.3	12	不明	土師器片	
SK32	4次	—	—	—	—	—	—	欠番
SX33	4次	A-T・U14・15	4.5	2.1	88	飛鳥	須恵器（杯）、有蓋長胴棺	土器棺墓（有蓋長胴棺）
SK34	4次	A-V16・17	5.5↑	1.5	51	飛鳥	須恵器（壺）	
SK35	4次	A-T16	1.58	1.2	17	不明		

第1表　遺構一覧表①

遺構名	調査次	地区	規模			時代	出土遺物	備考
			長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SK36	4次	—	—	—	—	—	—	欠番
SK37	4次	—	—	—	—	—	—	欠番
SK38	4次	A-L14	3.2	2.7	12	不明	石器（フレークか）	
SK39	4次	A-N15	1.54	1.12	52	不明	縄文土器片	
SK40	4次	A-P13	1.56	2.8	39	不明	縄文土器片	
SX41	4次	A-Q・R13	2.28	0.84	13	平安	灰釉陶器（小瓶）、刀子、釘	木棺直葬墓
SK42	4次	A-P・Q13	1.4	0.56	42	不明	縄文土器片	
SK43	4次	A-O・P12	4.2↑	1.88	11	不明	不明石製品	
SK44	4次	A-P・Q12	3.2	1.48	13	不明		
SK45	4次	A-O11	2.06	1.08	37	不明		
SK46	4次	A-L・M7・8	4.36	3.3	38	不明	縄文土器片か	
SX47	4次	A-N～P6～8	8.0×4.0↑	1.2	29	飛鳥	須恵器（皿）	西毛谷北4号墳（周溝のみ確認）
SX48	4次	A-K～M5～7	7.0×3.5↑	2	52	飛鳥	土師器片、須恵器（高杯片、甕片）	西毛谷北3号墳（周溝のみ確認）
SX49	4次	A-L7	1.7	1.2	44	飛鳥	須恵器（甕）	土器棺墓（須恵器甕を棺に転用）
SK50	4次	A-K7	1.36	1.08	51	不明	縄文土器片	
SK51	4次	A-I6	2.9	1.46	75	不明		
SK52	4次	A-M4	2.2	0.86	14	飛鳥	須恵器（高杯、平瓶）	
SK53	4次	A-K・L5	1.8	1.42	38	飛鳥	須恵器（杯、高杯）	
SD54	4次	A-K・L3・4	6.5	1	41	飛鳥	須恵器（杯）	
SX55	4次	A-J4・5	2.26	0.72	38	飛鳥	須恵器（杯）	墓壙のみ確認（木棺直葬墓か）
SK56	4次	A-I4	0.5	0.46	13	不明	縄文土器か	

第２表　遺構一覧表②

遺構名	調査次	地区	規模			時期	出土遺物	備考
			長さ(m)	幅(m)	深さ(cm) (底レベル 標高m)			
柱穴1	4次	A-T17	0.32	0.3	13 (42.64)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴2	4次	A-T17	0.3	0.26	23 (42.56)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴3	4次	A-T17	0.36	0.27	56 (42.13)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴4	4次	A-T17	0.72	0.29	43 (42.25)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴5	4次	A-T17	0.77	0.48	13 (42.34)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴6	4次	A-T17	0.34以上	0.4	14 (42.60)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴7	4次	A-T17	0.21	0.19	8 (42.37)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴8	4次	A-T17	0.24	0.22	32 (42.43)	飛鳥	なし	S X30内 柱穴9より新しい
柱穴9	4次	A-T16・17	0.3	0.3	55 (42.19)	飛鳥	なし	S X30内 柱穴8より古い
柱穴10	4次	A-T17	0.5	0.41	0.39 (42.30)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴11	4次	A-T17	0.72	0.36	0.22 (42.40)	飛鳥	なし	S X30内 北向きに傾斜する掘形
柱穴12	4次	A-T17	0.26	0.24	42 (42.18)	飛鳥	なし	S X30内
柱穴13	4次	A-U17	0.64	0.22	31 (42.23)	飛鳥	なし	S X30内 掘形埋土に粘土
Pit1	4次	A-K7	0.76	0.64	13 (44.38)	飛鳥	須恵器（椀）	
Pit1	4次	A-Q23	0.48	0.36	31 (44.09)	飛鳥	須恵器（壺片）	
Pit1	4次	A-Q22	0.52	0.38	14 (44.27)	不明	土師器片	
Pit1	4次	A-Q24	0.78	0.36	19 (43.71)	江戸	陶器	
Pit1	4次	A-R21	0.6	0.3	20 (44.26)	江戸	陶器	
Pit1	4次	A-R24	0.68	0.48	17 (43.57)	江戸	陶器、瓦	
Pit2	4次	A-R24	0.34	0.26	35 (43.30)	江戸	陶器	
Pit1	4次	A-T23	1.2	0.8	36 (42.87)	江戸	陶器	
Pit1	4次	B-P1	0.86	0.8	26 (42.74)	江戸	陶器、磁器	
Pit2	4次	B-P1	0.32	0.26	50 (42.51)	江戸	須恵器片、磁器	

第３表　遺構一覧表③

4 遺 物

a 出土遺物の概要

調査では、飛鳥時代、平安時代、江戸時代の遺物を中心に、縄文土器や石鏃などが確認された。飛鳥時代は須恵器が多くを占めており、この他に耳環の出土が特筆される。平安時代は、墓から出土した、灰釉陶器の小瓶と金属製品の刀子・鉄釘がある。江戸時代は、陶器・磁器が主体となる。

本章では、西毛谷A遺跡、西毛谷北古墳の第3次調査の遺物が認められなかったため、第1次調査と第4次調査の遺物に分けて報告する。第1次調査は、調査区別とする。第4次調査は、時代ごとに遺構の種別に分けて記した。土器類の時期区分は、註に参考文献を示した(1)。

なお、飛鳥時代の遺物の分類と年代について、第Ⅱ章6節bで別稿を設けて検討する。

b 第1次調査出土遺物

T1（第25図1） 1は須恵器の壺である。全体をロクロナデで調整し、口縁部は下方に折り返す。

T5（第25図2～7） 2・3は須恵器である。

2は杯である。外内面はロクロナデで調整する。口縁部と受け部は短く、端部の形状は鋭い。

3は器台である。脚台部中位から下位とみられ、長方形透かしが1箇所確認できる。1条の沈線が巡り、その下をカキメで調整する。

4・5は瀬戸・美濃産陶器である。

4は椀とみられ、内面上位から外面にかけて施釉される。

5が鍋で、外内面に施釉される。

6は肥前産磁器の染付碗である。

7は常滑産陶器の赤物火鉢で、外面上位から中位にかけてロクロナデ、下位はケズリである。内面には工具ナデ、ユビオサエが確認できる。

T7（第25図8） 8は須恵器壺の台部である。外内面の調整は、ロクロナデである。体部と脚部は、ロクロナデにより貼付けて接合する。

c 第二次調査出土遺物

1 縄文時代

（1）土坑

SK38（第26図9） 9はサヌカイト製のフレークである。

SK39（第26図10） 10は縄文土器である。体部片で、外面に刻文が3列確認できる。

2 飛鳥時代

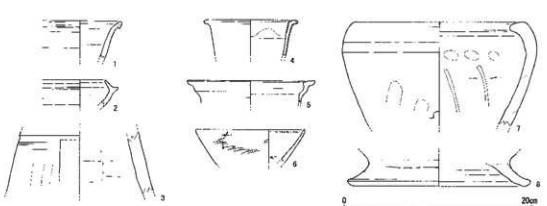
（1）墓

SX25（第26図11～13） 11～13は須恵器である。

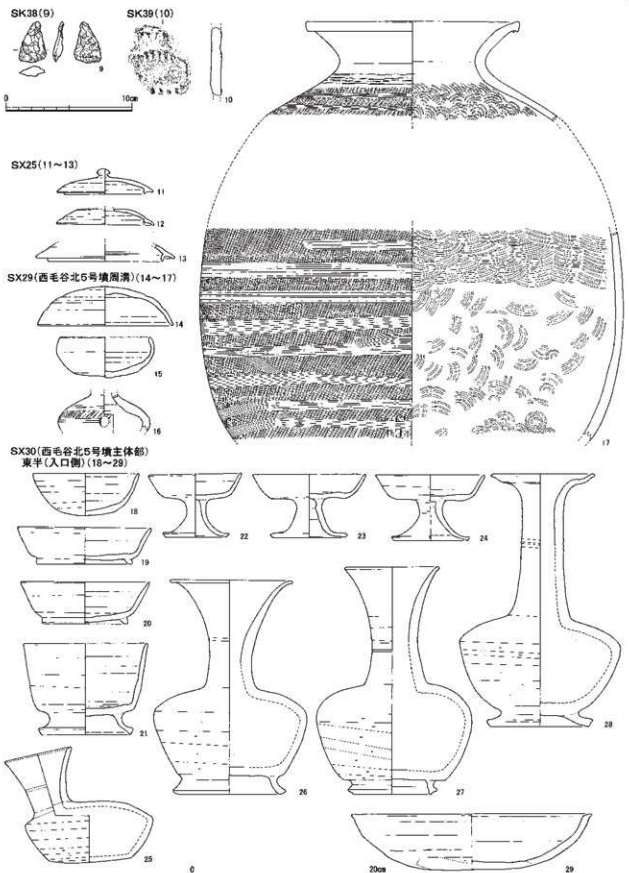
11は杯蓋である。体部上位から中位はロクロケズリ、体部下位から口縁部はロクロナデである。内面はロクロナデである。摘みはロクロナデで成形する。口縁部の返しは短く、端部の形状は鋭い。

12は杯蓋である。体部上位から下位はロクロケズリ、口縁部はロクロナデである。

13は杯蓋とみられる。外面は体部下位がロクロケズリ、外内面の口縁部はロクロナデである。口縁部



第25図 出土遺物実測図1（1：4）



第26図　出土遺物実測図２（1：4、9・10は1：3）

の返しは、11よりも長いが、端部の形状は鈍い。

ＳＸ29（第26図14～17）　西毛谷北５号墳周溝出土遺物である。

14～17は須恵器である。

14は杯蓋とみられる。口径が14.2cmで、出土資料の中では大型のものである。体部外面の上位から中位はロクロケズリ、下位はロクロナデである。内面はロクロナデである。口縁部の内側は、強いロクロナデを施し、凹面をつくる。色調は外面が灰白色であるが、内面はにぶい赤褐色となる。

15は杯である。体部中位から口縁部にかけて、強く内湾する形態となる。体部外面の下位はヘラ切り後ナデ、中位から口縁部にかけてロクロナデである。内面はロクロナデである。

16は壺である。体部外面には、２条の沈線が巡り、その間にヘラ状工具で斜線文を施す。穿孔には、注ぎ口状の突出はみられない。

17は甕である。体部の形態は長胴形に復元できる。口縁部はロクロナデ、体部外面は平行タタキ後工具ナデ、体部内面は同心円当て具による調整である。

ＳＸ30（第26・27図18～46）　西毛谷北５号墳主体部出土遺物で、須恵器と耳環がある。

18～29は、主体部東半の入口側出土資料で、全て須恵器である。

18は杯で、丸底形態のもの。体部外面の下位はヘラ切り後ナデ、中位から口縁部にかけてロクロナデの調整である。内面は下位がナデ、中位から口縁部がロクロナデとなる。

19は杯で、平底に高台が伴う形態のもの。外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデの調整である。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。耳環46の上に重なるように出土した。

20は杯である。平底形態だが、19よりも底部に丸みをもつ。外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。

21は椀である。底部には高さのある高台が付く。杯部は平底で、底部と体部の境が明瞭である。外面は底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。高台はロクロナデにより成形する。鈴鹿市西高山Ａ遺跡で類似資料がある[12]。

22～24は高杯である。杯部が平底形態で、器高に対して、口径が大きい。脚部は下位で外側に強く屈曲する形態である。

22の杯部外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。杯部との接合には、ロクロナデを施す。脚端部はやや鋭く、外側に突出する形態である。23・24に比べ、脚部の屈曲が小さい。

23は、22と同様の調整である。

24は、22と同様の調整であるが、脚部には１条の沈線が巡る。

25は平瓶である。平底形態で、把手を伴わず、肩部と体部の境が明瞭なもの。底部から体部下位にかけてロクロケズリを施す。体部中位から天井部かけてはロクロナデである。頸部から口縁部は、ロクロナデで、頸部中位には１条の沈線が巡る。

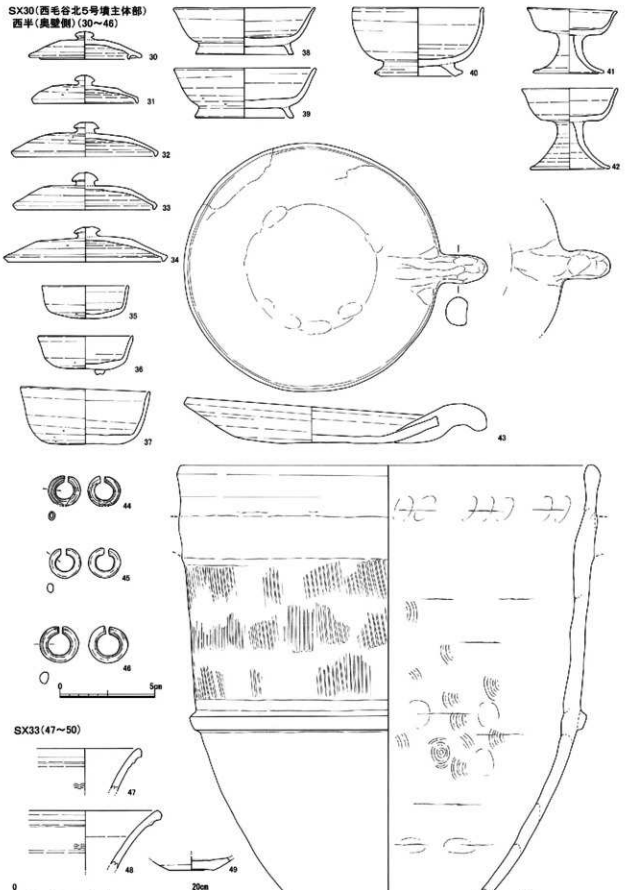
26～28は長頸壺である。

26は、頸部から口縁部にかけての開きが大きい。頸部には、１条の沈線が巡る。肩部と体部の境が明瞭で、肩部はやや膨らみをもつが、体部は直線的な形態である。体部は、底部から体部がロクロケズリ、肩部から口縁部がロクロナデである。高台は外側に広がる形態で、ロクロナデで成形する。口縁部の１箇所を打ち欠いている。

27は、頸部から口縁部にかけての開きが小さい。頸部には、２条の沈線が巡る。肩部と体部は丸みをもつため、境はやや不明瞭。外面は、底部から体部がロクロケズリ、肩部から口縁部がロクロナデである。高台は直立ぎみで、ロクロナデで成形する。

28は、頸部は直線的で、頸部上位で外側に屈曲して口縁部をなす。頸部の沈線は２条。肩部と体部の境が明瞭で、肩部はやや膨らみをもつが、体部は直線的な形態である。外面は、底部から体部がロクロケズリ、肩部から口縁部がロクロナデである。高台は水平方向に広がる形態で、ロクロナデで成形する。26・27に比べ、口縁部と肩部に自然釉が厚くかかる。口縁部の１箇所を打ち欠いている。

29は皿である。43のように、把手が付く可能性が



第27図　出土遺物実測図３（1：4、44～46は1：2）

ある。外面は、底部から体部下位が不定方向のケズリで、体部中位から口縁部がロクロナデである。内面は、底部から体部下位がナデ、体部中位から口縁部がロクロナデである。焼成はやや甘い。

30～43は主体部西半の奥壁側出土資料で、全て須恵器である。

30～34は杯蓋である。

30は、口縁部に返しが付く形態である。外面は、体部上位から下位がロクロケズリ、口縁部がロクロナデである。内面は全体にロクロナデを施す。口縁部は返しが短く、端部の形状も鈍い。摘みはロクロナデにより成形する。胎土は精緻で、墨流し風の白色土の流文がみられ、猿投産と考えられる[13]。

31は、口縁部の返しがない形態である。32～34と比べ、口径が小さい。外面は、体部上位から下位がロクロケズリ、口縁部がロクロナデである。内面は、体部上位がナデ、中位から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、鈍く丸みがある。摘みはロクロナデで成形する。

32は、口縁部の返しがない形態である。外面は、体部上位から中位がロクロケズリ、体部下位から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、31と比べ鋭い形態となる。摘みはロクロナデで成形する。

33・34は、32と同様の調整である。

35・36は杯で、平底形態のものである。

35は平底形態だが、底部にやや丸みをもつ。体部から口縁部にかけて、直線的に外側へ広がる。外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデで、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は丸い形状である。

36は、体部から口縁部にかけて、直線的に広がる形態である。外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、強いロクロナデにより、外側が浅く凹む。底部外面には、窯壁片が付着する。

37は椀である。平底形態のもので、体部から口縁部にかけて直線的に広がり、形態は35・36と類似する。外面は、底部から体部下位にかけてロクロケズリ、体部中位から口縁部にかけてロクロナデである。内面は、底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。

38・39は杯である。平底形態で、高台が付く。

38の外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、強いロクロナデにより外反する。高台は、ロクロナデで成形する。入口側で出土した杯（19・20）に比べて、高い高台である。

39は、38と同様の調整であり、口縁端部が外反する特徴もみられる。

40は椀である。体部に丸みをもつが、底部は平底に近い形態となる。外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデで、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、強いロクロナデにより外反する。高台はロクロナデによる成形である。杯（38・39）の高台の形態とは異なり、外側に突出する。

鈴鹿市末野B遺跡で類似資料がある[14]。

41・42は高杯である。入口側出土の高杯（22～24）に対し、器高が高く、口径が小さい。脚部は緩やかに外側へ広がる。

41は、杯部外面の底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、強いロクロナデにより外反する。脚部は、外内面をロクロナデで成形する。脚端部は丸く鈍い形態である。

42は、41と同様の調整である。杯部の口縁端部は、やや外反する。脚端部が鈍い形態は類似する。

43は皿である。完形の資料で1箇所に把手が伴う。外面は、底部が不定方向のケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデ・ユビオサエで、体部から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、外側に面をもつ。把手は、ナデとユビオサエにより成形したもので、下方に反る形態である。焼成はやや甘く、色調も灰白色となり、S X47の皿51と共通する。

津市西七谷北古墳に類似資料が確認できる[15]。

44～46は耳環である。出土地点は、44が主体部奥壁側、45が出土地点不明、46が主体部入口側の杯19の直下である。45は、44と同規模のため、本来セット関係にあったと推測できる。

耳環は、銅芯に金鍍金を施したものである。金の

残存状況はトーンで示したが、全体的に剥離していることがわかる。

44・45は、外径1.6～1.7cmと同形同大のもの。

46は、外径1.9～2.1cmとやや大型となる。

ＳＸ33（第27図47～50）　47～49は須恵器である。50は須恵器の調整が観察できるが、焼成がやや甘く、軟質である。本報告では、須恵器とする。

47・48は甕とみられ、同一個体の可能性がある。焼成が甘く、調整も不明瞭である。口縁端部の直下に、１条の突線が巡り、その下に波状文を施す。

49は杯とみられる。平底形態で、外面は底部から体部下位にかけてロクロケズリである。内面はロクロナデである。

50は有蓋長胴棺とみられる[6]。破片資料で、類例が乏しいため深鉢状の形態に復元したものである。色調は灰褐色に近く、全体的に焼成が甘いため、調整痕はやや不明瞭である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具、ユビオサエが観察できる。外面の体部中位には、一条のタガがあり、ヨコナデにより貼り付けている。

体部上位には、帯状の剥離痕が観察でき、もう一条タガが伴う可能性があり、タガを貼りつけた際のヨコナデが観察できる。畿内地域の有蓋長胴棺には、蓋を伴う例があり、剥離したタガは蓋受けの鍔であったことが考えられる[7]。この他、体部内面には粘土紐の積み上げ痕がみられる。

ＳＸ47（第28図51）　51は須恵器の皿である。同一個体と観察できる資料３点から復元した。外面は体部中位がケズリ、体部上位から口縁部がロクロナデである。内面は体部中位がナデ・ユビオサエ、体部上位から口縁部がロクロナデである。口縁端部の上方に面をもつ。ＳＸ30の皿43と調整が共通しているが、把手はケズリによる成形、下方への反りがない点で異なる。色調は灰色で焼成も良好である。

ＳＸ48（第28図52）　52は土師器皿か椀とみられる。焼成が甘く、調整が不明瞭である。ロクロナデにより成形したものと考えられる。

ＳＸ49（第28・29図53～58）　53・54は須恵器の甕、55～58は須恵器の杯蓋である。ＳＸ49は須恵器甕２点を用いた土器棺である。

53は、須恵器甕で肩部が欠損しており接合ができないものの、同一個体になる。意図的に打ち割ったものと考えられる。外面は、口縁部直下の突線と、頸部の沈線間に波状紋を施す。体部外面は平行タタキで、下位のみ平行タタキ後に工具ナデが施される。体部内面は同心円文当て具で、下部のみ工具ナデが施される。

54はほぼ完形の資料で、窯内での焼成時に底部が陥没し、転倒したことにより、窯壁や杯蓋が融着している。外面は、口縁部直下の突線と、頸部の沈線間に波状紋を施す。体部外面は平行タタキ後工具ナデ、内面は同心円文当て具後に工具ナデにより成形される。

54は、窯壁片の融着範囲の断面を図示した。窯壁と54の隙間には、別個体の甕の体部片が融着しており、これらは窯詰め時の窯道具として用いられたと推定できる。

55～58は杯蓋である。甕54に融着していた資料であり、同時期に窯内で焼成されたと推定する。

55は、口縁部に返しを伴うが、形骸化が進む。外面は、体部上位から中位がロクロケズリ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は、全体にロクロナデを施す。摘みはロクロナデにより成形する。

56は、55と同様な調整であり、口縁部の返しが形骸化する。

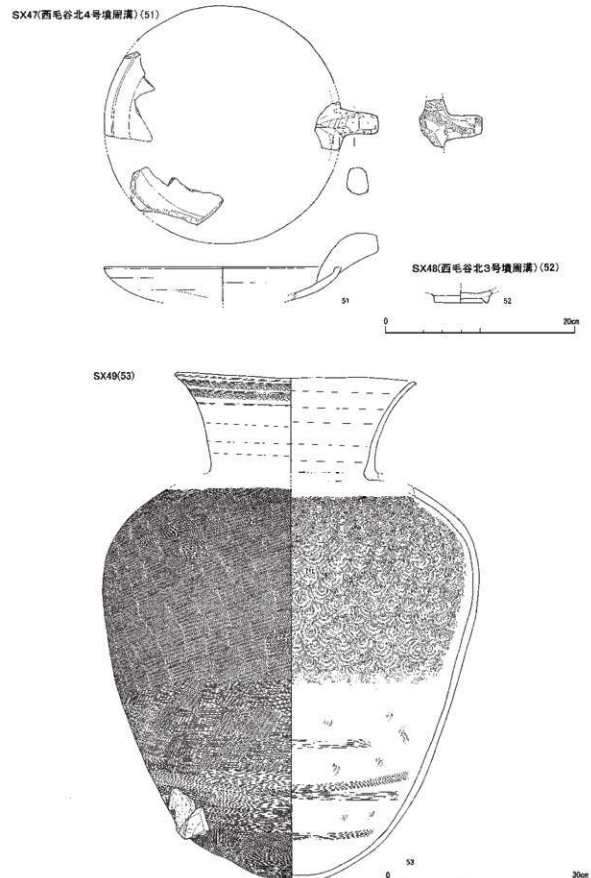
57は、口縁部の返しがないものである。外面は、体部上位から中位がロクロケズリ、下位から口縁部がロクロナデである。内面は、全体にロクロナデを施す。

58は、口縁部の返しがないもので、57と同様の調整である。

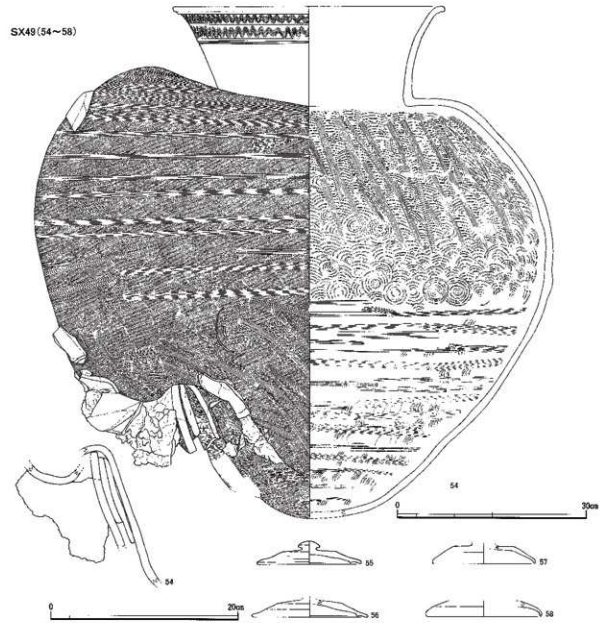
ＳＸ55（第30図59・60）　59・60は須恵器の杯である。

59は、丸底形態の杯である。外面は、体部下位はヘラ切り後ナデ、体部中位から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。口縁端部は、丸く鈍い形態である。ＳＸ30の杯18と類似する。

60は、丸底形態の杯である。外面は、体部下位がヘラ切り後ナデ、体部中位から口縁部がロクロナデである。ヘラ切り後のナデが粗い仕上がりである。内面は、底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロ



第28図　出土遺物実測図４（1：4、53は1：6）



第29図　出土遺物実測図５（1：4、54は1：6）

ナデである。口縁端部は、丸く鈍い形態である。

（2）溝

ＳＤ54（第30図61・62）　61・62は須恵器である。

61は丸底形態の杯である。外面は、底部がヘラ切り後ナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。口縁部は強いロクロナデにより、両面がやや凹む。

62は平底形態の杯であるが、体部は丸みをもつ。体部上位から口縁部にかけて、外側に屈曲する。外面は、底部から体部下位がロクロケズリ、体部中位から口縁部がロクロナデである。内面は、底部から体部下位がナデ、体部中位から口縁部がロクロナデである。

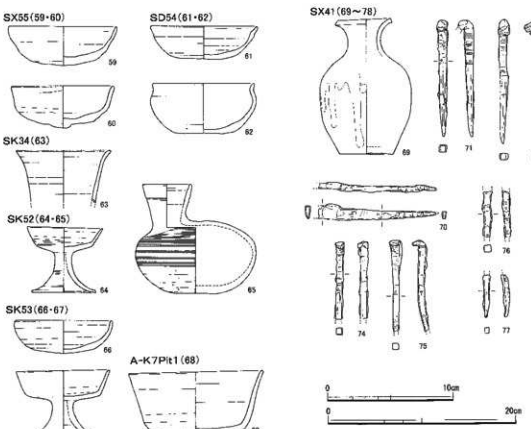
（3）土坑

ＳＫ34（第30図63）　63は須恵器の壺とみられる。全体をロクロナデで成形する。

ＳＫ52（第30図64・65）　64・65は須恵器である。

64は高杯である。杯は底部に丸みをもつ。杯部外面は、底部がロクロケズリ、体部から口縁部がロクロナデである。体部下位には、３条の沈線が巡る。内面は、全体がロクロナデである。脚部は、外内面ともロクロナデにより成形する。脚部には沈線が巡り、下位に１条、中位に２条施される。脚端部は、外側に面をもつ形態である。

65は平瓶で、体部に丸みをもつ。外面は、底部か



第30図　出土遺物実測図６（1：4、70～78は1：3）

ら体部下位がロクロケズリ、体部中位から上位がカキメである。頭部から口縁部はロクロナデで、頭部には1条の沈線が巡る。

ＳＫ53（第30図66・67）　66・67は須恵器である。

66は丸底形態の杯である。外面は、底部がヘラ切り後ナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は、底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。

67は高杯である。杯部は平底形態となる。杯部外面は、底部がロクロケズリ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部から口縁部がロクロナデである。脚部は、外内面をロクロナデで成形する。脚端部は、丸く鈍い形態である。

（4）Pit

Ａ－Ｋ７ Pit１（第30図68）　68は須恵器で平底形態の椀である。外面は底部がロクロケズリ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。

3　平安時代

（1）墓

ＳＸ41（第30図69～78）　69は灰釉陶器の小瓶である。底部は回転糸切り、体部下位はロクロケズリ、体部中位から口縁部がロクロナデである。

70～78は鉄製品である。70は刀子で、茎と刃の一部が残存する。茎には刃と直交する木目痕が観察できる。

71～78は鉄釘で、木棺に使用されたものである。木材が残存するものや木目痕が観察でき、木目の向きは頭部から中位にかけ直交するが、中位から釘先は平行している。形態は頭部を折り曲げており、横断面は方形となる。

4　江戸時代

（1）墓

ＳＸ26（第31図79～84）　79はキセルで、雁首と吸口は青銅製、羅宇は竹製で一部が残存する。雁首と吸口は青銅板を丸めて、合わせ目は真鍮で溶接している。雁首と羅宇の隙間は和紙で埋めており、羅宇の吸口側は刃物で削り出し成形する。火皿には脂が付着する。

80～84は寛永通宝で、81は文銭である。

（2）土坑

ＳＫ15（第31図85～90）　85・86・89は瀬戸産陶器である。85は腰錆茶椀、86は広東椀、89は擂鉢の口縁部である。18世紀末～19世紀前半のもの。

87・88は肥前産磁器の染付椀である。

90は瓦質土器の焙烙で、鍔上部には穿孔がみられる。鍔から体部にかけて煤が付着する。

ＳＫ16（第31図91）　91は土師器の小皿である。外内面はナデにより成形で、色調は明赤褐色となる。

ＳＫ18（第31図92～97）　92・94は瀬戸産陶器である。93・95は美濃産陶器である。

92の椀は、口縁部に緑釉を施す。

94は糸目茶椀である。19世初頭のものである。

93は挽骨茶椀で内面底部にトチン跡がある。18世紀前半～中頃のもの。

95は灯明受皿で、内面に煤が付着する。19世紀初頭のもの。

96は青磁碗で、美濃産のものか。

97は瓦質土器の焙烙で、鍔部の上部に穿孔が施される。鍔から体部にかけて、煤が付着する。

ＳＫ20（第31図98・99）　98はキセルの青銅製の吸口である。外面には毛彫りが観察できる。内面には脂が付着する。

99は瀬戸・美濃産陶器の秉燭である。外面の体部下位には、煤が付着する。

ＳＫ21（第31図100～103）　100・101は瀬戸産陶器擂鉢の口縁部である。19世紀初頭～前半のもの。

102は瓦質土器の焙烙である。

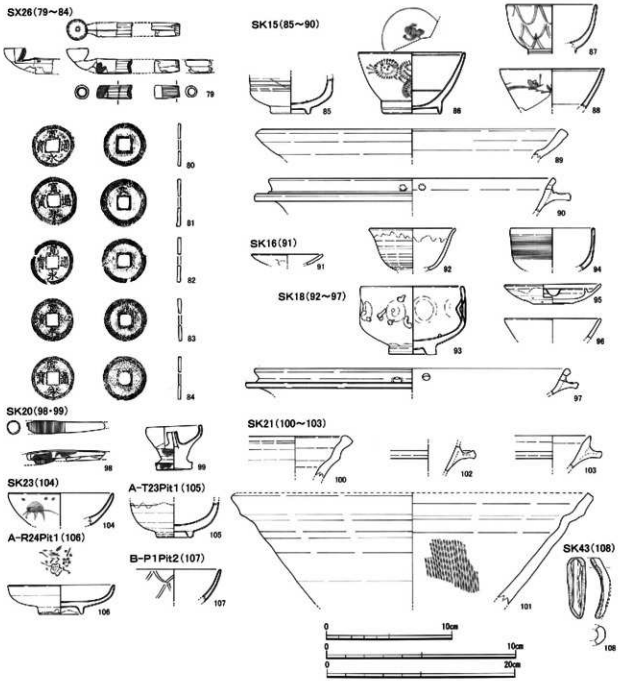
103は土師器の焙烙である。鍔から体部にかけて、煤が付着する。

ＳＫ23（第31図104）　104は肥前産磁器の染付碗である。

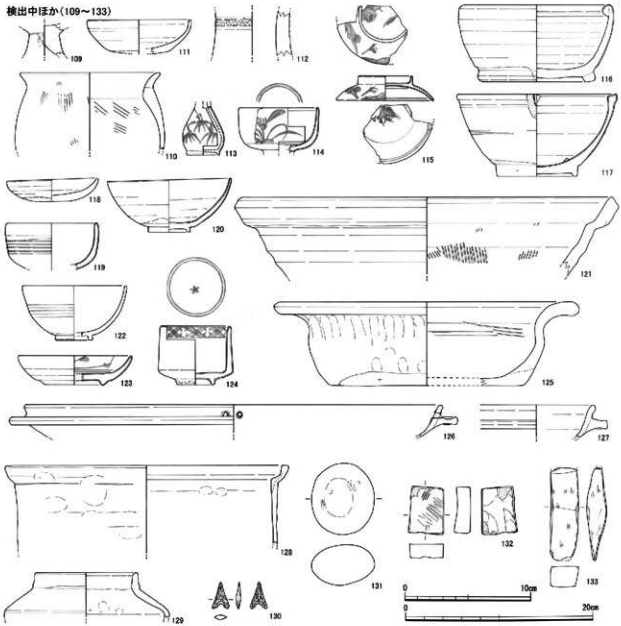
（3）Pit

Ａ－Ｔ23 Pit１（第31図105）　105は瀬戸産陶器の腰錆茶椀である。19世紀前半のものであろう。

Ａ－Ｒ24 Pit１（第31図106）　106は瀬戸産陶器の梅文皿である。18世紀後半のものである。



第31図　出土遺物実測図７（1：4、79・98は1：3、80～84は1：2）



第32図　出土遺物実測図８（1：4、130は1：3）

Ｂ－Ｐ１ Pit2（第31図107）　107は肥前産陶器の染付椀である。

５　時期不明、表土・包含層

（１）土坑

ＳＫ43（第31図108）　108は不明石製品である。外内面ともに研磨されている。

（２）表土・包含層（第32図109～133）

109は土師器の高杯である。脚部の外面は縦方向のハケメを施す。

110は土師器甕である。体部の外内面にはハケメが施される。口縁部はヨコナデである。

111・112は須恵器である。

111は丸底形態の杯である。外面は、底部がヘラ切り後ナデ、体部下位から口縁部がロクロナデである。内面は、底部から口縁部がロクロナデである。

112は器台である。脚部の外面には、２条の沈線間に列点文が巡る。

113～121は瀬戸・美濃産陶器である。

113は瀬戸産染付小壺で18世紀後半～19世紀初頭のもの。

114は美濃産染付丸碗である。19世紀前半～中頃のもの。

115は広東椀の蓋である。外内面に施文がある。

116は瀬戸産火鉢である。18世紀後半～19世紀初頭のもの。

117は美濃産片口である。片口部分は欠損している。18世紀後半のもの。

118は灯明皿である。外面の底部に煤が付着する。18世紀後半～19世紀初頭のもの。

119は瀬戸産の腰錆茶椀である。

120は刷毛目椀である。18世紀後半のもの。

121は擂鉢である。18世紀後半のもの。

122は信楽系の陶器椀である。体部外面には線状の鉄絵が施される。

123・124は肥前産磁器である。

123は皿である。内面にのみ施文がある。

124が青磁染付筒形湯呑で外面は青釉、内面は白釉で、内面のみ施文がみられる。

125は常滑産陶器の赤物火鉢で、19世紀前半のもの。

126・128は瓦質土器である。

126は焙烙で鍔上部には穿孔がみられる。

128は鍋と見られ、外面に煤が付着する。

127・129は土師器である。

127は焙烙、129は茶釜とみられる。

130はサヌカイト製の石鏃である。

131は磨石である。全体的に研磨されている。

132・133は砥石である。使用面は132が３面、133が２面である。　（小原）

【註】

（１）出土遺物の編年は下記の文献を参考にした。

①西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』　奈良国立文化財研究所　1978

②小田裕樹「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現状と各時代の特質』　考古学研究会関西例会　2016

③愛知県『愛知県史別編　窯業２』　2007

④江戸近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』　2000

（２）鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅱ』　2016

（３）産地について、尾野善裕氏よりご教示いただいた。

（４）鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅲ』　2016

（５）河芸町史編さん委員会『河芸町史』史料編上巻　2000

「把手付浅鉢」と報告されるものだが、本論の分類に従い「皿」とした。

（６）中西常雄「近畿地方土器棺の基礎研究-５～８世紀-」『古文化談叢』第72集　九州古文化研究会　2014

「土器棺」、「円筒棺」、「有蓋長胴棺」の分類は、文献の分類に従う。

（７）註６前掲

報告書 番号	実測 番号	器種等	産地	地区	遺構 取り上げNo.	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (12分割中)	備考
1	00106	須恵器 壺	—	T1　35.00m 清掃中	—	—	密	良	黄灰2.5Y6/1	小片	
2	00107	須恵器 杯	—	T5　0.00m付近 表採	—	—	やや密	良	灰5Y5/1	小片	
3	00108	須恵器 器台	—	表採 (墳丘付近)	—	—	やや密	良	黄灰2.5Y4/1	台1	
4	00101	陶器 椀	瀬戸・ 美濃	T5 20.00m付近 検出中	—	9	密	良	素地：灰黄2.5Y7/2 釉：明ｵﾘｰﾌﾞ 灰2.5GY7/1	口1	灰釉
5	00102	陶器 鍋	瀬戸・ 美濃	T5 20.00m付近 検出中	—	13.4	密	良	素地：灰白5Y7/1 釉：灰褐7.5YR4/2	口1	鉄釉
6	00103	磁器 染付碗	肥前	T5 20.00m付近 検出中	—	11.4	密	良	素地：浅黄2.5Y7/3 釉：灰白7.5Y7/1 青灰5B5/1	口2	
7	00104	陶器 火鉢	常滑	T5 18.00m付近 機械掘削中	—	18	やや粗	良	にぶい赤褐2.5YR5/4	口2	
8	00105	須恵器 壺	—	T7 0.00m付近 清掃中	溝内	17.8	やや密	良	灰N6/	底2	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
10	01603	縄文土器	—	A-N15	SK39	—	粗	良	にぶい黄橙10YR7/4	小片	
11	01001	須恵器 杯蓋	—	A-V20	SX25	10	やや粗	良	灰黄2.5Y7/2	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
12	01003	須恵器 杯蓋	—	A-V21	SX25	10.2	やや密	良	灰N4/	3	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
13	01002	須恵器 杯蓋	—	A-V20	SX25	14.5	やや密	良	灰白5Y7/1	口2	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
14	01004	須恵器 杯蓋	—	A-S16	SX29	14.2	やや密	良	灰白10Y7/1	口2	胎土は精緻で礫少ない
15	01005	須恵器 杯	—	A-S18 A-R17	SX29	9.5	やや粗	良	灰5Y6/1	5	胎土に1㎜程の礫を全体に含む
16	01007	須恵器 𤭯	—	A-S17	SX29	—	やや粗	良	灰N6/	4	穿孔一部残存、胎土は精緻で礫少ない
17	01201	須恵器 甕	—	A-S16	SX29	22.4	密	良	灰白5Y7/1	口5	胎土に1㎜程の礫を全体に含む
18	00503	須恵器 杯	—	A-T17	SX30 No.9	11.1	やや密	良	灰N5/	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
19	00403	須恵器 杯	—	A-T17	SX30 No.6	13.9	やや密	良	黄灰2.5Y6/1	7	内外面煤付着、口縁部打ち欠く、胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
20	00704	須恵器 杯	—	A-T17	SX30 No.23	13.4	密	良	黄灰2.5Y4/1	ほぼ完存	内面炭化物付着、胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
21	00706	須恵器 椀	—	A-T17	SX30	13	密	良	灰N4/	口9	炭化物付着、胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
22	00404	須恵器 高杯	—	A-T17	SX30 No.5	9.7	粗	良	褐灰5YR5/2	完存	胎土に1㎜程の礫を全体に含む
23	00402	須恵器 高杯	—	A-T17	SX30 No.2	11.8	やや粗	良	灰5Y5/1	11	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
24	00703	須恵器 高杯	—	A-T17	SX30 No.22	11.4	やや密	良	灰N5/	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
25	00702	須恵器 平瓶	—	A-T17	SX30 No.21	6.9	やや密	良	灰N5/	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
26	00401	須恵器 長頸壺	—	A-T17	SX30 No.4	12.6	やや粗	良	灰N4/	ほぼ完存	口縁部打ち欠く、胎土に1㎜程の礫を全体に含む
27	00301	須恵器 長頸壺	—	A-T17	SX30 No.1	9.8	やや粗	良	灰N4/	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
28	00302	須恵器 長頸壺	—	A-T17	SX30 No.3	10.6	やや粗	良	灰5Y5/1	ほぼ完存	口縁部打ち欠く、胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
29	00801	須恵器 皿	—	A-T17 A-R17	SX30 検出中	25.4	やや粗	甘い	灰白2.5Y7/1	口9	炭化物付着、胎土に1㎜程の礫を全体に含む
30	00602	須恵器 杯蓋	猿投	A-T17	SX30 No.14	11.6	密	甘い	灰白5Y7/1	完存	胎土は精緻で、墨流し風の白色土の流文がみられる。
31	00502	須恵器 杯蓋	—	A-T17	SX30 No.8	10.9	やや密	良	灰5Y6/1	ほぼ完存	外面に重ね焼き痕、胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
32	00504	須恵器 杯蓋	—	A-T17	SX30 No.10	15	粗	良	灰7.5Y6/1	完存	胎土に1㎜程の黒色粒を全体に含む
33	00701	須恵器 杯蓋	—	A-T17	SX30 No.19・20	14.5	粗	良	灰N6/	ほぼ完存	胎土に1㎜程の礫を全体に含む

第４表　遺物観察表①（土器等）

報告書番号	実測番号	器種等	産地	地区	遺構	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存(口分割中)	備考
34	00505	須恵器杯蓋	—	A-T17	SX30 No.11	16.3	粗	良	灰白5Y7/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
35	00705	須恵器杯	—	A-T17	SX30 No.25	9	やや密	良	灰N5/	口3	胎土に1mm程の礫を全体に含む
36	00605	須恵器杯	—	A-T17	SX30 No.17	10	やや密	良	灰黄2.5Y6/2	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
37	00501	須恵器椀	—	A-T17	SX30 No.7	13.6	やや粗	良	灰白N7/	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
38	00506	須恵器杯	—	A-T17	SX30 No.12	14.8	やや密	良	灰5Y6/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
39	00604	須恵器杯	—	A-T17	SX30 No.16	14.9	やや粗	良	灰5Y6/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
40	00601	須恵器椀	—	A-T17	SX30 No.13	13.6	密	良	灰5Y4/1	完存	胎土は精緻で礫少ない
41	00606	須恵器高杯	—	A-T17	SX30 No.18	9.4	やや密	良	灰5Y4/1	10	胎土は精緻で礫少ない
42	00603	須恵器高杯	—	A-T17	SX30 No.15	10	やや粗	良	黄灰2.5Y5/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
43	00802	須恵器皿	—	A-T17	SX30 No.24	26.6	粗	甘い	灰白2.5Y7/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
47	01802	須恵器甕	—	A-T15	SX33	—	やや密	不良	灰白5Y7/1	小片	48と同一個体か
48	01801	須恵器甕	—	A-U14	SX33	—	密	不良	灰黄2.5Y7/2	小片	47と同一個体か
49	01006	須恵器杯	—	A-U14	SX33	底4.7	やや密	良	灰N4/	底8	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
50	00901	須恵器長胴棺	—	A-U14	SX33	43.4	やや密	良	灰白5Y7/2	1	調整は須恵器だが、焼成が甘く軟質
51	01104	須恵器皿	—	A-P8	SX47	25	やや粗	甘い	灰7.5Y6/1	口2	胎土に1mm程の礫を全体に含む
52	01103	土師器鼠小判	—	A-L6	SX48	底5.6	やや密	甘い	橙5YR6/8	底6	調整不明瞭
53	02401	須恵器甕	—	A-L7	SX49-1	37.7	密	良	灰白N5/	10	胎土に1mm程の礫を全体に含む
54	02501	須恵器甕	—	A-L7	SX49-2	43.4	密	良	灰N4/	9	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
55	02503	須恵器杯蓋	—	A-L7	SX49-2	10.8	密	良	灰N5/	口2	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
56	02505	須恵器杯蓋	—	A-L7	SX49-2	12	密	良	灰N5/	口1	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
57	02504	須恵器杯蓋	—	A-L7	SX49-2	10.8	密	良	灰N5/	口4	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
58	02502	須恵器杯蓋	—	A-L7	SX49-2	12	密	良	灰N5/	口2	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
59	01102	須恵器杯	—	A-J4	SX55	11.3	粗	甘い	灰白2.5Y8/2	8	胎土に1mm程の礫を全体に含む
60	01101	須恵器杯	—	A-J4	SX55	10.7	やや粗	良	灰7.5Y5/1	完存	胎土に1mm程の礫を全体に含む
61	01704	須恵器杯	—	A-L4	SD54	11.2	密	良	灰7.5Y6/1	1/3口完存	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
62	01705	須恵器杯	—	A-L4	SD54	10.6	粗	良	灰白5Y7/1	7	胎土に1mm程の礫を全体に含む
63	01602	須恵器壺？	—	A-V17	SK34	9.8	密	良	灰N5/	口4	胎土は精緻で礫少ない
64	01701	須恵器高杯	—	A-M4	SK52	7.9	密	良	灰N4/	完存	胎土は精緻で礫少ない
65	01605	須恵器平瓶	—	A-M4	SK52	5.1	密	良	褐灰10YR5/1	完存	胎土は精緻で礫少ない、体部の穿孔は調査時に欠損
66	01703	須恵器杯	—	A-K5	SK53	10.2	密	良	灰7.5Y6/1	口7	胎土に1mm程の礫を全体に含む
67	01702	須恵器高杯	—	A-K5	SK53	9.8	やや密	良	灰N6/	1/3口完存	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
68	01904	須恵器椀	—	A-K7	Pit1	14.2	やや密	良	灰5Y4/1	口10	胎土に1mm程の黒色粒を全体に含む
69	01008	灰釉陶器小瓶	—	A-Q13	SX41 No.1	5.5	やや粗	良	灰黄2.5Y7/2	1/3口完存	
85	01304	陶器腰錆茶椀	瀬戸	A-R25	SK15	底4.0	密	良	素地：灰白5Y8/2、黒7.5YR2/1、暗オーブ 5Y4/4	底8	鉄釉、灰釉
86	01302	陶器広東椀	瀬戸	A-R25	SK15	11.2	密	良	白地に藍	6	
87	01303	磁器染付碗	肥前	A-R25	SK15	9.4	密	良	白地に藍	口1	

第５表　遺物観察表②（土器等）

報告書番号	実測番号	器種等	産地	地区	遺構 遺存上げ%	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	残存 (口分割中)	備考
88	01305	磁器 染付碗	肥前	A-R25	SK15	11	密	良	素地：灰白10YR8/2 釉：灰褐7.5YR4/2	口2	
89	01301	陶器 擂鉢	瀬戸	A-S25	SK15	31.8	密	良	素地：灰白10YR8/2 釉：灰褐7.5YR4/2	口1	鉄釉
90	01308	瓦質土器 焙烙	—	A-R25	SK15	30	やや密	良	暗灰N3/	口1	穿孔1箇所残 煤付着
91	01306	土師器 小皿	—	B-R1	SK16	7.4	やや密	良	明赤褐5YR5/8	口1	
92	01401	陶器 椀	瀬戸	B-S1 B-T1	SK18	9	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：緑	口1	灰釉
93	01404	陶器 半弁菊椀	美濃	B-S1 B-T1	SK18	10.8	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：黒7.5YR2/1	底完存	長石釉による施文
94	01402	陶器 糸目茶椀	瀬戸	B-S1 B-T1	SK18	8.8	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：にぶい黄橙 10YR4/3	口2	鉄釉
95	01307	陶器 灯明受皿	美濃	B-S1 B-T1	SK18	10	密	良	素地：にぶい黄橙 10YR7/4 釉：褐7.5YR4/6	完存	鉄釉、内面に煤付着
96	01403	青磁 碗	美濃？	B-S1 B-T1	SK18	10	密	良	素地：にぶい黄橙 10YR7/2 釉：灰オリーブ5Y6/2	口5	
97	01405	瓦質土器 焙烙	—	B-S1 B-T1	SK18	32.8	やや密	良	灰5Y4/1	口2	穿孔2カ所残 外面煤付着
99	01406	陶器 東播	瀬戸・美濃	A-O23	SK20	5.6	密	良	素地：灰白2.5Y8/1 釉：黒褐5YR2/1	口9	鉄釉 外面煤付着
100	01502	陶器 擂鉢	瀬戸	A-S23	SK21	—	密	良	素地：にぶい黄橙 10YR7/4 釉：灰褐7.5YR4/2	小片	鉄釉
101	01501	陶器 擂鉢	瀬戸	A-S23	SK21	37	密	良	素地：にぶい黄橙 10YR7/4 釉：灰褐7.5YR4/2	口1	鉄釉
102	01504	瓦質土器 焙烙	—	A-S23	SK21	—	密	良	灰N4/	小片	
103	01503	土師器 焙烙	—	A-S23	SK21	—	密	良	橙5YR6/6	小片	外面煤付着
104	01505	磁器 染付碗	肥前	A-S21	SK23	11.1	密	良	素地：灰白10Y8/1 釉：灰白10Y8/1、 灰オリーブ7.5Y4/2	口3	
105	01903	陶器 腰錆茶椀	瀬戸	A-T23	Pit1	—	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：黒褐7.5YR3/2 灰白5Y7/2	底10	灰釉
106	01901	陶器 椀又皿	瀬戸	A-W24	Pit1	11.3	密	良	素地：灰白2.5Y8/1 釉：灰白5Y8/2 底	底完存	灰釉
107	01902	磁器 染付碗	肥前	B-P1	Pit2	—	密	良	白地に藍	小片	
109	02003	土師器 高杯	—	A-T17 検出中	—	—	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	基部のみ	調整不明瞭
110	01601	土師器 壺	—	A-V15 検出中	—	14.6	やや粗	良	にぶい橙5YR6/4	口3	外面ハケ6本/cm
111	01908	須恵器 杯	—	A-L4 検出中	—	10.8	やや密	良	灰N5/	4	胎土に1mm程の礫を全体に含む
112	02004	須恵器 器台	—	A-X20 一次調査坑	—	—	やや密	良	灰5Y6/1	体1	胎土に1mm程の礫を全体に含む
113	02007	陶器 染付小壺	瀬戸	表土掘削	—	底 3.3	密	良	白地に藍	底完存	
114	02006	磁器 染付丸碗	美濃	表土掘削	—	8.2	密	良	白地に藍	口4	
115	02306	磁器 蓋	瀬戸・美濃	表採	—	10.2	密	良	白地に藍	3	
116	01905	陶器 火鉢	瀬戸	A-W21 検出中	—	15.8	やや密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：黒褐7.5YR2/2	4	鉄釉
117	02001	陶器 片口	美濃	表土掘削	—	16.9	密	良	素地：灰白2.5Y7/1 釉：黄褐2.5Y5/6	底完存	黄釉
118	02005	陶器 灯明皿	瀬戸・美濃	表土掘削	—	9.7	密	良	素地：灰白10YR8/2 釉：褐10YR4/4	6	鉄釉 外面煤付着
119	02303	陶器 腰錆茶椀	瀬戸	表土掘削	—	9.6	密	良	素地：灰白5Y8/1 釉：にぶい黄橙 10YR7/4	3	鉄釉
120	02002	陶器 御七日椀	瀬戸・美濃	表土掘削	—	13.1	やや密	良	にぶい橙7.5Y7/4	底完存	
121	02202	陶器 擂鉢	瀬戸・美濃	表土掘削	—	39.2	やや密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：にぶい黄橙 10YR5/4	口3	鉄釉

第6表　遺物観察表③（土器等）

報告書番号	実測番号	器種等	産地	地区	遺構 取り上げNo.	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存(口分割中)	備考
122	02304	陶器 椀	信楽系	表土掘削	—	11	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：黒褐10YR3/1 灰黄2.5Y7/2	4	
123	02305	磁器 皿	肥前	表採	—	12.1	密	良	白地に藍	1	
124	01907	磁器 筒形湯呑	肥前	B-T1 検出中	—	7.3	密	良	明ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY7/1	完存	青磁
125	02201	陶器 火鉢	常滑	表土掘削	—	30.6	やや粗	良	にぶい赤褐5YR5/4	3	
126	02301	瓦質土器 焙烙	—	表土掘削	—	44	やや密	良	灰白N4/	口1	穿孔1箇所残
127	02302	土師器 焙烙	—	表土掘削	—	—	やや密	良	橙5YR6/6	小片	
128	02203	瓦質土器 鍋	—	表土掘削	—	29.9	やや密	良	灰N4/	口1	外面煤付着
129	01906	土師器 茶釜	—	A-G24 検出中	—	10.7	やや密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口2	

第７表　遺物観察表④（土器等）

報告書番号	実測番号	種類・材質	名称	地区	遺構 取り上げNo.	法量(cm)	重さ(g)	備考
44	00208	銅製	耳環	A-T17	SX30 耳環1	1.7×1.6×0.52	1.8	
45	00209	銅製	耳環		SX30 攪乱	1.7×1.6×0.46	2.0	
46	00210	銅製	耳環	A-T17	SX30 耳環2	2.1×1.9×0.5	4.7	
70	00216	鉄製	刀子	A-Q13	SX41 M6	9.25×0.29×0.65	9.5	木質残存か
71	00211	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M1	9.3×1.0×0.9	8.7	
72	00212	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M2	9.9×0.53×0.54	9.8	
73	00213	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M3	7.1×0.65×0.71	7.6	
74	00214	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M4	6.1×0.58×0.58	5.1	
75	00215	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M5	7.23×0.49×0.58	10.1	
76	00217	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M8	3.38×0.59×0.61	2.3	
77	00218	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M7	3.71×0.67×0.57	3.2	
78	00219	鉄製	釘	A-Q13	SX41 M9	9.23×0.54×0.71	12.3	木質残存か
79	00202	青銅製	キセル	A-Y23	SX26	7.7×1.2×0.8	3.7	煙草の脂付着 和紙残存
80	00203	銅製	銭貨	A-Y23	SX26	径2.3	1.7	寛永通宝
81	00204	銅製	銭貨	A-Y23	SX26	2.56×2.52	2.8	寛永通宝（文銭）
82	00205	銅製	銭貨	A-Y23	SX26	2.36×2.37	1.6	寛永通宝
83	00206	銅製	銭貨	A-Y23	SX26	2.29×2.28	2.3	寛永通宝
84	00207	銅製	銭貨	A-Y23	SX26	2.34×2.32	1.8	寛永通宝
98	00201	青銅製	キセル	A-Q23	SK20	6.2×1.1×0.8	2.0	

第８表　遺物観察表⑤（金属製品）

報告書番号	実測番号	名称	地区	遺構	法量(cm)	重さ(g)	備考
9	02104	フレーク	A-L14	SK38	3.18×2.18×0.71	3.4	サヌカイト
108	01604	不明品	A-P12	SK43	—	17.34	外内面研磨
130	02105	石鏃	A-S22 検出中	—	2.07×1.34×0.47	0.5	サヌカイト
131	02102	磨石	検出中	—	7.62×6.75×4.45	331.5	
132	02103	砥石	表土掘削	—	4.95×3.73×1.76	54.3	3面使用
133	02101	砥石	検出中	—	9.83×2.98×2.21	80.5	2面使用

第９表　遺物観察表⑥（石器・石製品）

5　自然科学分析

a　分析の目的

西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群の調査では、7世紀第4四半期から8世紀にかけての墓が8基確認された。中でも西毛谷北5号墳は、横穴式木室で火化された状態で出土しており、西毛谷北古墳群の所在する丘陵で他に類例がないものである。また、土器棺と考えられるSX49は須恵器の大甕2個体を合口にした状態で出土した。

まず、西毛谷北5号墳については、①時期の特定。②構築部材等の樹種同定。中でも樹種の選択性について、構築部材と棺材などの違いを樹種から辿れるのか、構築部材の中でも壁材と天井材で樹種の違い。③木室内の須恵器の内容物が存在するかを検討する。④木室内から出土した耳環の材質同定、の4点に主眼を置いて分析を実施した。

次にSX49については、⑤甕内に遺物が認められず、被葬者像に繋がるようなものがあるのか⑥甕内出土の炭化材の同定、の2点に主眼を置いて分析を実施した。

これらの分析は、平成27・28年度の2箇年で計3回、第10表のとおり委託実施した。①については放射性炭素年代測定を、②・⑥については樹種同定を、③・⑤については、炭素窒素安定同位体比分析及び微細物分析を、④については成分分析を実施した。

（原田）

b　自然科学分析報告-放射性炭素年代測定、樹種同定1・2、炭素・窒素安定同位体比分析・微細物分析-

株式会社　パレオ・ラボ

1　はじめに

検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定、樹種同定（2回）、炭素・窒素安定同位体比分析及び微細物分析を行った。それぞれの分析結果について報告する。

2　放射性炭素年代測定（平成27年度実施）

（1）試料と方法

試料は、横穴式木室であるSX30から出土した、棺材または木室構築部材（試料No. 1-1：PLD-30161）と、木室構造部材（側壁）（試料No. 10-1：PLD-30162）の2点の炭化材である。いずれの試料も最終形成年輪は残っていなかったが、試料No. 1-1では辺材部が残っていた。なお遺構の時期は、発掘調査所見では7世紀第4四半期と考えられている。測定試料の情報、調製データは第11表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

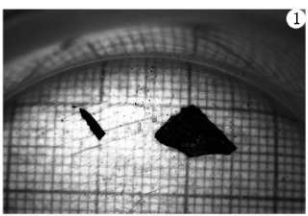
委託実施年度	目的	報告文掲載節項：分析内容	数量	対象遺構（対象遺物）	委託実施業者
平成27年度	年代測定	b-2：放射性炭素年代測定	2	SX30	株式会社パレオ・ラボ
	木室の樹種特定	b-3：樹種同定	12	SX30	
平成28年度	木室の樹種特定	b-4：樹種同定	15	SX30、SX49	株式会社パレオ・ラボ
	内容物の分析	b-5：炭素・窒素安定同位体分析	1	SX30（報20付着炭化物）	
	内容物の分析	b-6：微細物分析	3	SX30（報18・43内）、SX49（報54内）	
	材質の同定	c：耳環の成分分析	3	SX30（報44～46）	（株）吉田生物研究所

第10表　自然科学分析委託内容

（2）結果

第12表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第34図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がそ



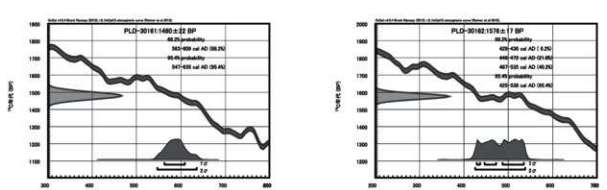
第33図　放射性炭素年代測定試料　1．PLD-30161　2．PLD-30162

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30161	遺構：SX30 試料No. 1-1 遺物No. 炭58	種類：炭化材（スギ） 器種：樹材または木室構築部材 試料の性状：辺材部 部位：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-30162	地区：A-T17 遺構：SX30 試料No. 10-1 遺物No. 炭37	種類：炭化材（スギ） 器種：木室構造部材（側壁） 試料の性状：部位不明 部位：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

第11表　測定試料および処理

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30161 試料No. 1-1 遺物No. 炭58	-25.75±0.32	1480±22	1480±20	563-609 cal AD (68.2%)	547-635 cal AD (95.4%)
PLD-30162 試料No. 10-1 遺物No. 炭37	-25.01±0.17	1576±17	1575±15	429-436 cal AD (6.2%) 446-472 cal AD (21.8%) 487-535 cal AD (40.2%)	425-538 cal AD (95.4%)

第12表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第34図　暦年較正結果

の^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には0xCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（3）考察

以下、2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

横穴式木室であるＳＸ30の試料No. 1-1（PLD-30161）は547-635 cal AD（95.4%）で６世紀中頃～７世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代後期から飛鳥時代に相当する。また試料No. 10-1（PLD-30162）は、425-538 cal AD（95.4%）で5世紀前半～6世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期に相当する。なお、今回の試料はいずれも炭化材で、最終形成年輪は残っていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、試料No. 1-1は辺材部について測定が行われており、僅かながら古木効果の影響を受けていると考えられる。また試料No. 10-1は部位不明であり、古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

発掘調査所見では、ＳＸ30は７世紀第４四半期と考えられているが、測定結果は発掘調査所見よりも古い暦年代を示した。試料No. 1-1と10-1は共に年輪が非常に詰まった炭化材であり（樹種同定の項参照）、古木効果の影響を受けていると考えられる。

【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

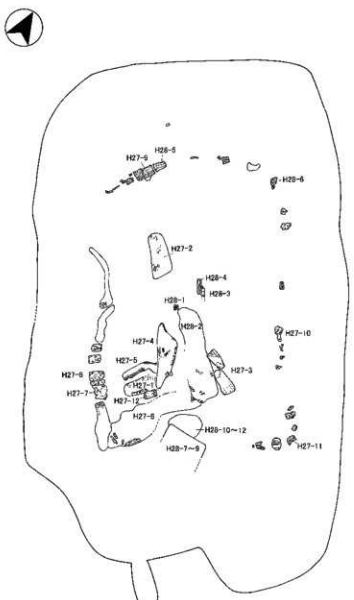
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

3　樹種調査結果１（平成27年度実施）

（1）試料と方法

試料は、横穴式木室であるＳＸ30から出土した炭化材である。試料は12袋あり、袋内には複数の炭化材がみられた。ここでは試料No. 1～4、7～12の袋からは各４点、試料No. 5の袋からは２点、試料No. 6の袋からは６点を抽出し、計48の同定を行った。発掘調査所見では７世紀第４四半期頃と考えられ、放射性炭素年代測定では試料No. 1-1が６世紀中頃～７世紀前半、試料No. 10-1が５世紀前半～６世紀前半の暦年代を示した。測定可能な試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は、試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンス



第35図　炭化材樹種同定試料採取箇所図（1：40）

パッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（2）結果

同定の結果、いずれの試料も針葉樹のスギであった。年輪の計測では、残存半径2.9cm内に111年輪がみられた試料No. 9-1のように、いずれの試料も年輪幅が非常に狭く、年輪が詰まった試料であった。同定結果を第13表に示す。

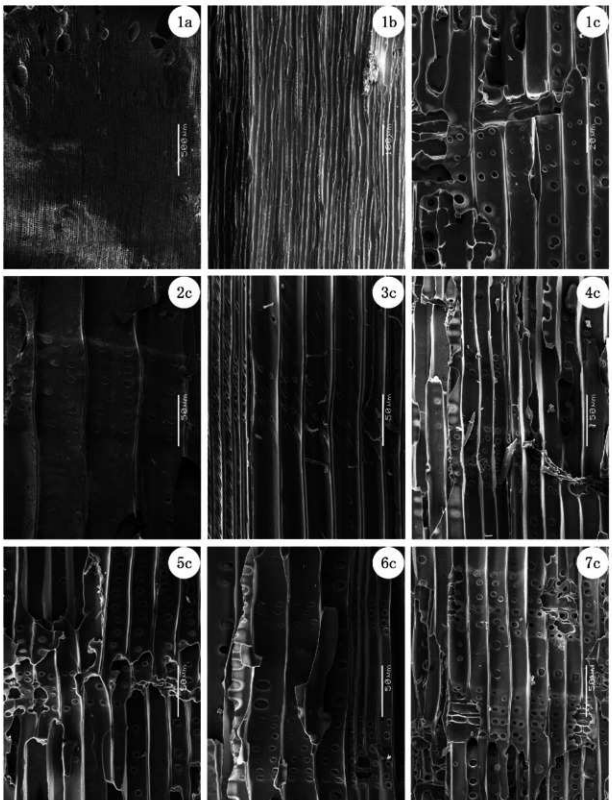
次に、同定された材の特徴を記載し、第36図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)スギ　*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don　スギ科　第36図　1a-1c (No. 1-1)、2c (No. 1-4)、3c (No. 4-4)、4c (No. 9-1)、5c (No. 10-4)、6c (No. 11-1)、7c (No. 12-3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩

試料No.	グリッド	遺構	取上No.	器種	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	年代測定番号
1-1		SX30	炭58		スギ	0.7	18	PLD-30161
1-2		SX30	炭58	棺材または	スギ	1.5	53	
1-3		SX30	炭58	木室構築部材	スギ	1.4	17	
1-4		SX30	炭58		スギ	1.7	13	
2-1	A-T17	SX30	炭49		スギ	−	−	
2-2	A-T17	SX30	炭49	棺材または	スギ	0.5	7	
2-3	A-T17	SX30	炭49	木室構築部材	スギ	−	−	
2-4	A-T17	SX30	炭49		スギ	−	−	
3-1		SX30	炭1		スギ	2.9	75	
3-2		SX30	炭1	木室構造部材	スギ	1.6	23	
3-3		SX30	炭1	（天井材か）	スギ	−	−	
3-4		SX30	炭1		スギ	1.5	32	
4-1	A-T17	SX30	炭12		スギ	0.6	25	
4-2	A-T17	SX30	炭12	木室構造部材	スギ	2.1	21	
4-3	A-T17	SX30	炭12	（天井材か）	スギ	1.6	33	
4-4	A-T17	SX30	炭12		スギ	0.7	31	
5-1	A-T17	SX30	炭13	木室構造部材	スギ	−	−	
5-2	A-T17	SX30	炭13	（天井材か）	スギ	−	−	
6-1	A-T17	SX30	炭55		スギ	1.2	18	
6-2	A-T17	SX30	炭55		スギ	1.0	16	
6-3	A-T17	SX30	炭55		スギ	1.0	26	
6-4	A-T17	SX30	炭55	燃料材？	スギ	0.8	38	
6-5	A-T17	SX30	炭55		スギ	0.5	26	
6-6	A-T17	SX30	炭55		スギ	0.9	37	
7-1	A-T17	SX30	炭82		スギ	1.2	25	
7-2	A-T17	SX30	炭82	木室構造部材	スギ	2.4	46	
7-3	A-T17	SX30	炭82	（側壁）	スギ	2.2	62	
7-4	A-T17	SX30	炭82		スギ	1.5	51	
8-1	A-T17	SX30	炭84		スギ	2.7	83	
8-2	A-T17	SX30	炭84	木室構造部材	スギ	1.2	52	
8-3	A-T17	SX30	炭84	（側壁）	スギ	−	−	
8-4	A-T17	SX30	炭84		スギ	−	−	
9-1	A-T17	SX30	炭64		スギ	2.9	111	
9-2	A-T17	SX30	炭64	木室構造部材	スギ	1.5	28	
9-3	A-T17	SX30	炭64	（奥壁）	スギ	2.0	77	
9-4	A-T17	SX30	炭64		スギ	2.1	87	
10-1	A-T17	SX30	炭37		スギ	3.4	92	PLD-30162
10-2	A-T17	SX30	炭37	木室構造部材	スギ	2.9	111	
10-3	A-T17	SX30	炭37	（側壁）	スギ	2.5	23	
10-4	A-T17	SX30	炭37		スギ	3.5	102	
11-1	A-T17	SX30	炭78		スギ	1.0	24	
11-2	A-T17	SX30	炭78	木室構造部材	スギ	1.6	44	
11-3	A-T17	SX30	炭78	（側壁）	スギ	0.9	19	
11-4	A-T17	SX30	炭78		スギ	1.0	26	
12-1	A-T17	SX30	炭54		スギ	1.6	37	
12-2	A-T17	SX30	炭54	木室構造部材	スギ	1.4	41	
12-3	A-T17	SX30	炭54	か燃料材？	スギ	1.8	22	
12-4	A-T17	SX30	炭54		スギ	1.1	31	

第13表　炭化材の樹種同定結果①



第36図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真１

1a-1c. スギ(No. 1-1)、2c. スギ(No. 1-4)、3c. スギ(No. 4-4)、4c. スギ(No. 9-1)、5c. スギ(No. 10-4)、6c. スギ(No. 11-1)、7c. スギ(No. 12-3)

a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

やかである。放射組織は単列で、高さ１～４列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

（３）考察

横穴式木室であるＳＸ30から出土した試料は、棺材、木室構造部材、燃料材のいずれかの可能性が考えられているが、いずれもスギであった。横穴式木室とは、石を用いず木と粘土で（あるいは木のみで）側壁部や天井部を構築した横穴系埋葬施設で、遺体を副葬品と一緒に焼く（これを火化と呼ぶ）事例、火化が認められない事例が確認されている（小森、2013）。西毛谷Ａ遺跡のＳＸ30では、玄室内から多数の炭化材が確認され、火化されていると考えられる。今回の同定では、棺材、木室構造部材、燃料材のいずれも年輪が詰まったスギであり、器種ごとに用材傾向の差はみられなかった。

年輪が詰まった材は、一般的に日照条件が悪い森林で生育したと考えられる。また津市に所在する六大Ａ遺跡の古墳時代頃の花粉分析の結果では、スギが比較的多く確認され（金原・金原，2003）、鈴鹿市の甲懸Ⅱ遺跡の弥生時代または古墳時代の層の花粉分析でも、スギは比較的多く確認されている（株式会社古環境研究所，2005）。そのため古墳時代頃の西毛谷Ａ遺跡周辺では、人の手が加えられていない、未開発の森林中にスギが生育していた可能性があり、そのスギを伐採利用していたと考えられる。

また横穴式木室は、須恵器窯跡群の近くに築かれることや、木室内に火を放つことなどから、須恵器工人との関連が深いとする説がある（小森，2013）。西毛谷Ａ遺跡の周辺には、徳居窯跡群がみられる。横穴式木室を窯の要領で火入れしていたと考えると、窯跡で使用されていた燃料材を分析し、横穴式木室および燃料材の構成樹種と比較することによって、須恵器工人と横穴式木室の関係性の一端を知ることができると考えられる。ただし徳居窯跡群では燃料材等の樹種同定は行なわれていないため、今回は関係性については確認できなかった。今後の調査事例の増加に期待したい。

【参考文献】

株式会社古環境研究所（2005）甲懸Ⅱ遺跡における自然化学分析．鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館編「一般国道23号線中勢道路発掘調査報告－鈴鹿５工区甲懸Ⅱ遺跡－」31-32，鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館編．

金原正明・金原正子（2003）環境考古学分析．三重県埋蔵文化財センター編「六大Ａ遺跡－資料分析・遺物観察表・写真図版編－」：11-42，三重県埋蔵文化財センター．

小森哲也（2013）横穴式木室考－先行研究の整理と分布・構造からみた地域間交流－．考古学雑誌，97，4：195-239．

４　樹種調査結果２（平成28年度実施）

（１）試料と方法

試料は、横穴式木室であるＳＸ30から出土した炭化材13袋、甕棺墓であるＳＸ49-1およびＳＸ49-2から出土した炭化材各１袋である。ＳＸ30の試料のうち、３袋には複数の炭化材がみられたため、試料No.2からは４点、試料No.3からは５点、試料No.6からは３点を抽出し、同定した試料数は合計で24点となった。発掘調査所見によれば、ＳＸ30は７世紀第４四半期、ＳＸ49は７世紀代の遺構と考えられている。

各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（２）結果

同定の結果、針葉樹のスギ1分類群と広葉樹のスダジイ1分類群の、計2分類群がみられた。年輪の計測では、スギは残存半径1.0cm内に52年輪がみられた試料No.8のように、いずれも年輪幅が非常に狭く、年輪が詰まった試料であったが、スダジイは残存半

径1.1cm内に３年輪がみられた試料No.15のように、２点とも年輪幅が広かった。同定結果を第14表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第37図に走査型電子顕微鏡写真を示す。なお、同定にあたって、現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参照した。

(1)スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D.Don ヒノキ科 第37図 1a-1c(No.1)、2c(No.2-4)、3c(No.3-3)、4c(No.5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2)スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 第37図 5a-5c(No.15)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

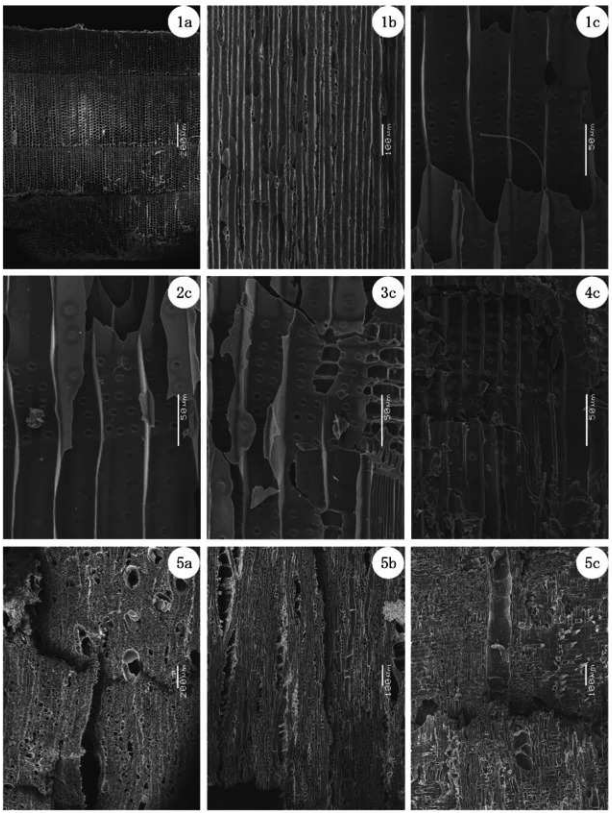
（3）考察

横穴式木室であるＳＸ30から出土した炭化材は、棺材または木室構造部材、天井材？、側壁、燃料材で、いずれもスギであった。横穴式木室とは、木と粘土で（あるいは木のみで）側壁部や天井部を構築した横穴系埋葬施設で、遺体を副葬品と一緒に焼く（これを火化と呼ぶ）事例と、火化が認められない事例が確認されている（小森、2013）。ＳＸ30では、玄室内および焚口付近から多数の炭化材が認められ、火化されたと考えられる。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種である（伊東ほか、2011）。また、燃料材としてのスギは火付きが良く、広葉樹よりも燃焼性が高い（平井、1996）。加工性と燃焼性からスギが選択的に利用されたと考えられる。

津市の六大Ａ遺跡の古墳時代頃の花粉分析の結果

試料No.	グリッド	遺構	取上No.	器種	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数
1	A-T17	SX30	炭18	棺材または木室構築部材	スギ	0.9	20
2-1	A-T17	SX30	炭19	棺材または木室構築部材	スギ	1.6	15
2-2	A-T17	SX30	炭19	棺材または木室構築部材	スギ	1.4	11
2-3	A-T17	SX30	炭19	棺材または木室構築部材	スギ	2.2	61
2-4	A-T17	SX30	炭19	棺材または木室構築部材	スギ	0.9	10
3-1	A-T17	SX30	炭40	天井材？	スギ	2.2	21
3-2	A-T17	SX30	炭40	天井材？	スギ	1.4	10
3-3	A-T17	SX30	炭40	天井材？	スギ	2.3	19
3-4	A-T17	SX30	炭40	天井材？	スギ	2.2	14
3-5	A-T17	SX30	炭40	天井材？	スギ	1.7	12
4	A-T17	SX30	炭41	天井材？	スギ	－	－
5	A-T17	SX30	炭63	側壁	スギ	0.8	35
6-1	A-T17	SX30	炭69	側壁	スギ	1.1	49
6-2	A-T17	SX30	炭69	側壁	スギ	2.8	48
6-3	A-T17	SX30	炭69	側壁	スギ	2.7	70
7	A-T17	SX30	炭12	燃料材	スギ	1.7	32
8	A-T17	SX30	炭12	燃料材	スギ	1.0	52
9	A-T17	SX30	炭12	燃料材	スギ	－	－
10	A-T17	SX30	炭53	燃料材	スギ	1.2	18
11	A-T17	SX30	炭53	燃料材	スギ	0.4	16
12	A-T17	SX30	炭53	燃料材	スギ	0.9	16
13	A-T17	SX30	No.24内	木室構造部材？	スギ	1.0	37
14	A-L7	SX49-1		用途不明	スダジイ	0.9	4
15	A-L7	SX49-2		用途不明	スダジイ	1.1	3

第14表　炭化材の樹種同定結果②



第37図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真２

1a-1c. スギ(No. 1)、2c. スギ(No. 2-4)、3c. スギ(No. 3-3)、4c. スギ(No. 5)、5a-5c. スダジイ(No. 15)

a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

では、スギが比較的多く確認され（金原・金原,2003）、鈴鹿市の甲塚Ⅱ遺跡の弥生時代または古墳時代の層の花粉分析でも、スギが比較的多く確認されている（株式会社古環境研究所，2005）。したがって、西毛谷A遺跡の周辺にもスギ林が存在した可能性が高く、遺跡周辺のスギが伐採利用されたと考えられる。

甕棺墓であるＳＸ49から出土した用途不明の炭化材は、いずれもスダジイであった。スダジイは、やや堅硬であるが、比較的加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。また、スダジイは薪炭材としても普通に利用される樹種である（平井，1996）。遺跡周辺に生育していたスダジイが伐採利用されたと考えられる。

西毛谷A遺跡の横穴式木室ではスギのみが、甕棺墓ではスダジイが利用されていた。いずれも遺跡周辺に生育していたと考えられる。ＳＸ30からはスギ以外の樹種が確認されなかった点を考慮すると、横穴式木室では、棺材、木室構造部材、燃料材にスギのみを選択的に利用していたと考えられる。

【参考文献】

平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房．

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌，238p，海青社．

株式会社古環境研究所（2005）甲塚Ⅱ遺跡における自然化学分析．鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館編「一般国道23 号線中勢道路発掘調査報告－鈴鹿５工区 甲塚Ⅱ遺跡－」31-32，鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館編．

金原正明・金原正子（2003）環境考古学分析．三重県埋蔵文化財センター編「六大A遺跡－資料分析・遺物観察表・写真図版編－」：11-42，三重県埋蔵文化財センター．

小森哲也（2013）横穴式木室考－先行研究の整理と分布・構造からみた地域間交流－．考古学雑誌，97,4：195-239．

5　炭素・窒素安定同位体比分析

（平成28年度実施）

（1）試料と方法

試料は、横穴式木室であるＳＸ30から出土した須恵器の杯（報20）の内面付着炭化物1点（試料No.19）である。発掘調査所見では、７世紀第4四半期～８世紀初頭の杯と考えられている。測定を実施するにあたり、試料に対して、酸・アルカリ・酸洗浄（HCl：1.2N，NaOH：1.0N）を施して試料以外の不純物を除去した後、測定を行った。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。また、炭素安定同位体比（$\delta^{13}C_{PB}$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N_{AIR}$）の測定には、質量分析計DELTA V（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

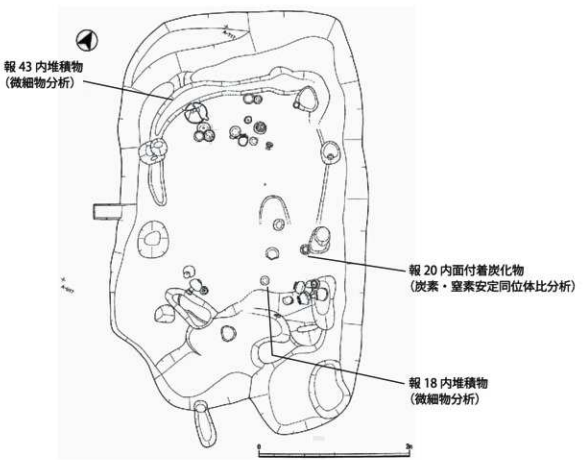
測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO_2とN_2を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度45℃である。分離したCO_2およびN_2はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

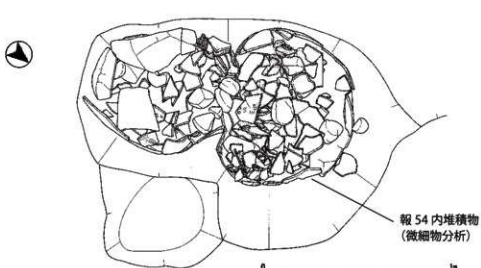
試料No.	試料情報	$\delta^{13}C_{PB}$ (‰)	$\delta^{15}N_{AIR}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
19	遺構：ＳＸ30 遺物番号：20（R007-04） 種類：土器付着炭化物 器種：須恵器杯 付着部位：内面	-23.6	-1.78	4.20	0.067	73.1

第15表　炭素・窒素安定同位体比分析結果

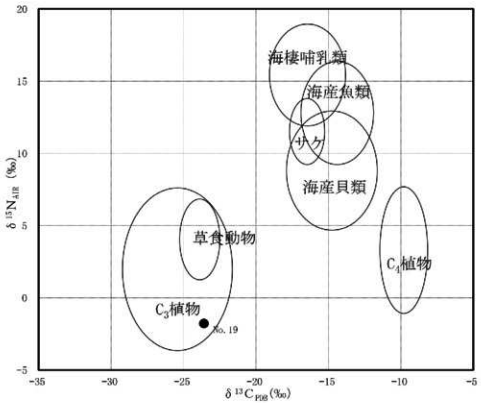
SX30（西毛谷北5号墳主体部）



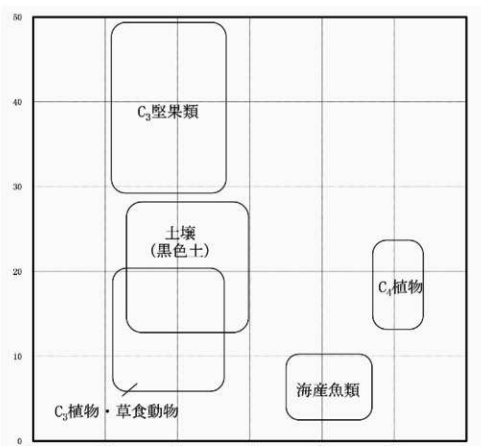
SX49



第38図　炭素・窒素同位体分析、微細物分析試料採取箇所図（SX30は1：50、SX49は1：20）



第39図　炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田（2009）に基づいて作製）



第40図　炭素安定同位体比とC/N比の関係（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

（2）結果

第15表に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。なお、窒素安定同位体比については、窒素含有量が少なく、適正出力が得られなかったため補正をかけているが、通常よりもバラツキの大きい値と予想される。第39図には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、第40図には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

第39図において、須恵器杯の内面付着炭化物（試料No.19）はC_4植物の位置にプロットされた。第40図においては、須恵器杯の内面付着炭化物（試料No.19）は図中のC/N比の範囲外であるため、図中にはプロットされていない。

（3）考察

試料について、得られた炭素と窒素の安定同位体比およびC/N比の値から、須恵器杯内面付着炭化物（試料No.19）は、第39図でC_4植物の位置にプロットされ、第40図はC/N比の値が大きいためプロットされなかった。試料は窒素をほとんど含んでいないため、C_4植物に由来する何かが高温で熱せられて付着した炭化物と推定される。本試料は須恵器杯の内面の付着炭化物であり、土器内でC_4植物由来の油などの高温で燃焼するものが燃えたために付着したと推定される。

【参考文献】

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢・佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132-143，クバプロ．

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305-315．

米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261-263，豊田市教育委員会．

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究．平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」，85-95．

吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器．新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」：87-99，新潟日報事業社．

6　微細物分析（平成28年度実施）

（1）試料と方法

試料は、堆積物試料３試料である。試料は、「カマド塚」であるＳＸ30から出土した須恵器（報43（皿）内と報18（杯）内）、甕棺墓であるＳＸ49から出土した須恵器（報54甕内の底の方）から採取された。遺物の時期は、ＳＸ30が７世紀第４四半期～８世紀初頭、ＳＸ49が7世紀代である。

試料の水洗は、パレオ・ラボにて行った。採取された全量の堆積物について、最小0.5mm目の篩で水洗した。

微細物の抽出および同定は実体顕微鏡下で行なった。炭化種実の抽出・計数・同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行なった。同定は、パレオ・ラボ所有の標本と比較して行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。

（2）結果

同定した結果、炭化種実では木本植物で広葉樹のヒサカキ属種子、草本植物のワタ炭化子葉の、計２分類群が見いだされた。科以上に細分できる識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には子嚢菌、炭化材が多数みられたが、同定の対象外とした（第16表）。

以下に、炭化種実の産出状況を遺構別に示す（同定不能炭化種実は除く）。

ＳＸ30　報43（皿）内：同定可能な炭化種実は得られなかった。

ＳＸ30　報18（杯）内：ヒサカキ属とワタがわずかに得られた。

ＳＸ49（報54甕内の底の方）：同定可能な炭化種実は得られなかった。

次に、炭化種実の記載を行い、第41図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・梶田（2003-）に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1)ヒサカキ属 *Eurya* spp.　炭化種子　ツバキ科

上面観は扁平、側面観はいびつな腎形ないし円形。凹孔をもつ多角形の網目状隆線が臍を中心に同心円状に並ぶ。臍から種子中央にかけて少し窪む。長さ1.1㎜、幅1.5㎜。

(2)ワタ *Gossypium arboreum* L. var. *obtusifolium* (Roxb.) Roberty　炭化子葉　アオイ科

倒卵形体。端部が又状に分岐する。基部下端につく。先端と基部を結ぶ浅い稜線が縦方向に1周する。表面は平滑。表面褐色にみえるが、内部は炭化している。長さ6.5㎜、幅4.4㎜、厚さ4.2㎜。

（3）考察

7世紀第4四半期～8世紀初頭と推定されているＳＸ30から出土した須恵器（報43（皿）内と報18（杯）内）と、7世紀代と推定されているＳＸ49から出土した須恵器（報54甕内の底の方）から採取された土壌内を水洗した結果、ほとんどが炭化材で、炭化種実はＳＸ30報18（杯）内から常緑低木のヒサカキ属と栽培植物のワタがわずかに得られた。ワタは799（延暦18）年に伝来したといわれているため、須恵器の推定時期の7世紀第4四半期～8世紀初頭が正しいとすれば、最古級のワタ子葉（内種皮）遺体の出土事例となる（深津，2001）。また江戸時代にはワタの種子から油を絞り、燈油として利用されていた。

【参考文献】

深津　正（2001）燈用植物．ものと人間の文化史50．418p，法政大学出版局．

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList），http://ylist.info

	試料No.	16	17	18
	遺構	SX30		SX49-2
	報告書掲載No.	43（皿）内	18（杯）内	54(甕)内の底の方
	時期	7世紀第4四半期～8世紀初頭		7世紀
分類群	水洗量(g)	1510	245	390
ヒサカキ属	炭化種子		(2)	
ワタ	炭化子葉		1	
同定不能	炭化種実	(8)	(5)	
子嚢菌	炭化子嚢	2	1 (3)	

第16表　出土炭化種実（括弧内は破片数）

第41図　出土炭化種実

1.ヒサカキ属炭化種子（SX30、報18（杯）内）、2.ワタ炭化子葉（SX30、報18（杯）内）、3.ワタ子葉（現生）、4.子嚢菌炭化子嚢（SX30、報43（皿）内）

c　西毛谷Ａ遺跡出土金属製品の成分分析

（平成28年度実施）

（株）吉田生物研究所

（１）はじめに

三重県に所在する西毛谷Ａ遺跡ＳＸ30から出土した耳環３点（報44～46）の材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

（２）試料

調査した資料は報44～46の耳環3点である（第42図）。

（３）方法

資料を用いて蛍光Ｘ線分析を行い、元素を同定し、同時に検出された元素のマッピングを行った。装置は堀場製作所製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置XGT－5200WRである。測定範囲径は10μm。走査幅は0.512mm。積算回数は20回である。

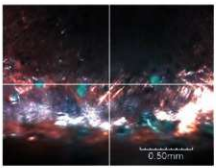
（４）分析結果

成分分析結果のスペクトルと元素マッピング図（第43～45図）を付す。第17表に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。分析結果から、報44の耳環１点は芯材については銅芯であったか、別材の芯であったかは不明である。残存状況から銅芯ないしは銅箔に検出された水銀から金鍍金が施されたと考えられる。報45の耳環１点は銅芯に、水銀が検出されているので金鍍金が施されたものと考えられる。報46の耳環１点はDXでは金、水銀は検出されていないが、元素マッピングでは反応が確認できる。この為、銅芯に、金鍍金が施されたものと考えられる。

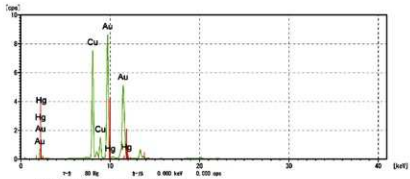
第42図　対象試料

	報44(wt%)	報45(wt%)	報46(wt%)
Si	—	3.74	—
S	—	—	0.79
Fe	—	1.16	—
Cu	12.08	94.06	99.21
Au	87.42	0.95	—
Hg	0.50	0.09	—

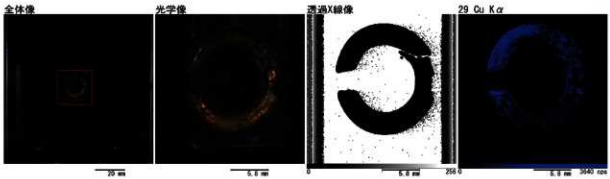
第17表　EDX／XGT分析結果一覧



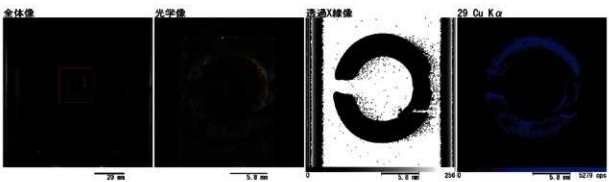
計測箇所



EDX/XGT スペクトル図

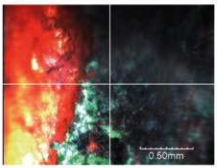


表マッピング図

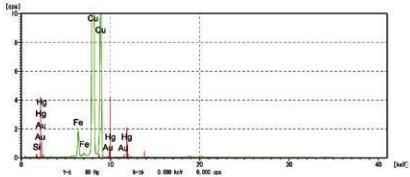


裏マッピング図

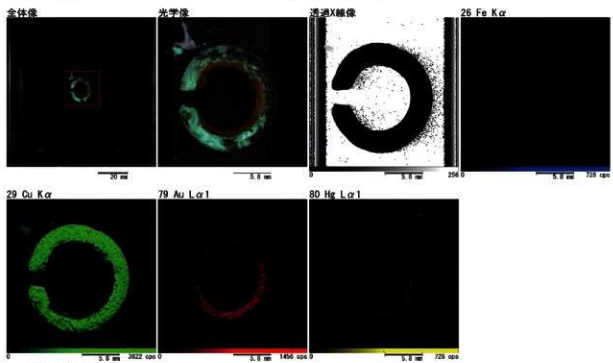
第43図　報44成分分析結果



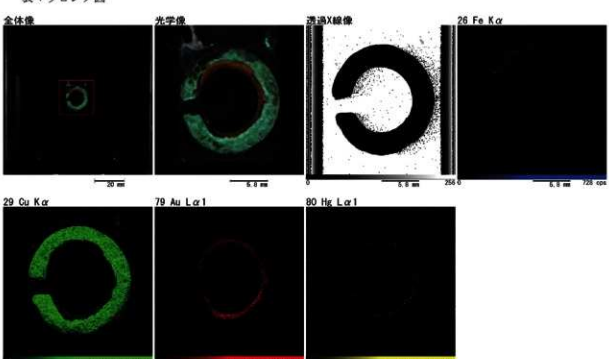
計測箇所



EDX/XGT スペクトル図

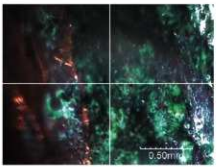


裏マッピング図

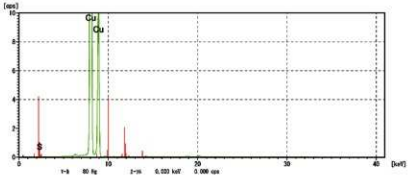


裏マッピング図

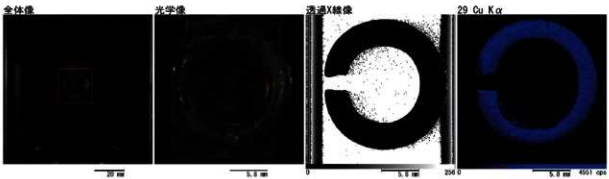
第44図　報45成分分析結果

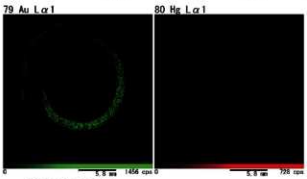


計測箇所

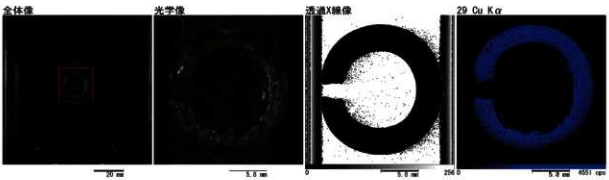


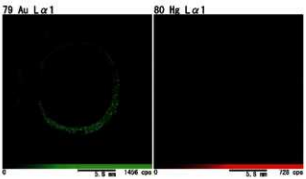
EDX/XGT スペクトル図





表マッピング図





裏マッピング図

第45図　報46成分分析結果

6 結 語

a 火化された横穴式木室の古墳

1 はじめに

ＳＸ29・30（西毛谷北５号墳）の主体部を検出し始めた時、一面炭で覆われ、処々に木々や須恵器が姿を現しかけていた。炭を除去し、プランを確認しながら掘り進めていくと、焼土が検出され、須恵器26点が出土した。また、斜め方向に立ちつつ、周囲を方形にとりまく木材が焼けた状態で見つかった。このことから西毛谷北５号墳は、横穴式木室の構造を持ち、しかも火化されていると認識した。

横穴式木室は、木や粘土を使って造られた横穴式構造の主体部を指す。木を芯にして粘土で覆って造られているものが多いが、西毛谷北５号墳のように粘土を欠くものも存在する。横穴式石室に比べると、横穴式木室の調査事例は少なく、しかも火化された事例となると極端に少なくなる。以下、火化された横穴式木室について検討を試みたい。

2 研究略史

火化された横穴式木室最古の事例は、森浩一氏が1959年、日本考古学協会第23回総会で「窯棺を主体施設とする火葬古墳の新例」と報告したもので、対象となった古墳は大阪府堺市陶器千塚21号墳である。この古墳は陶邑窯跡群の地域に所在し、主体部は杉の丸太とスサ混じりの粘土でつくられており、その形状は須恵器の焼成窯に類似していると捉えられた。遺体を埋葬後、火がかけられ、丸太は焼け落ち、粘土は固く焼きしまっていた。森氏は周辺に須恵器の窯があったことを踏まえて、この古墳をカマド塚と命名している[11]。

その後、大阪府和泉市聖神社２号墳が調査され、複数の遺体が同時に火にかけられていたことが明らかになった[12]。また、同地域で道田池２号墳、菩提池西古墳等、主体部が横穴式木室で構成され、火化された古墳が調査された[13]。

さらに、兵庫県小野市の中番２号墳・18号墳[14]、同加東市杜町の名草３号墳・４号墳[15]、大阪府茨木市の上寺山古墳[16]、滋賀県蒲生郡日野町の小御門Ⅱ－２号墳[17]も調査の結果、上記と同じ特殊な埋葬施設・埋葬方法を有する古墳であることが明らかになった。

これら近畿地方に所在する特殊な古墳の築造時期は、いずれも６世紀末から７世紀末で、それ以降どのような変遷をとげたかについては、明らかになっていない。しかも突如として出現したこの埋葬方法は、上記期間内で次々に波及してはおらず、依然として土葬が主流をなしており、同じ群集墳の中でもほんの数例にすぎない（陶器千塚古墳群内で火化された古墳は１例のみである）。火化が行われたすぐ後の時期になると、新たな古墳の築造は減少し、既存の横穴式石室へ追葬が盛んに行われていた。言い換えれば横穴式木室及びそこでの火化行為の出現が横穴式石室を衰退させ、取って代わったものではない[18]。

わが国における火葬の起源は、文武４年（700）、僧道昭が火葬された例をもって始まりとされている。しかし、道昭以前に遺体が焼かれた事象は、陶器千塚21号墳の事例からも存在するが、火化行為が仏式葬儀に則るかどうかである。

森氏は、道田池２号墳の被葬者と、その北方に所在した白鳳期の上代廃寺は年代的に２～３世代の隔たりしか認められないことに言及し、仏教との関連を示唆している[19]。

一方、上寺山古墳の調査を行った水野正好氏は、火葬とはひとつの遺体を茶毘にふし、拾骨して埋納するといった一連の行為を指し、仏教的儀礼を伴うものであると指摘する。これに対し、陶器千塚21号墳のような火化事例は、複数の遺体を同時に焼いた後、拾骨せずに埋めているということを指摘し、仏教との関わりを否定した。その上で主体部が火化されている古墳は群集墳の盛行期間に特殊な場合に用いられる葬法として出現したもので、火葬とは系譜や盛行の時期を別にすると述べている。そして、火葬と区別するため、火化という文言を用い、木室は追葬が終了した時点で火化されるとした[16]。

火化に対する森氏・水野氏の評価は別れるところ

であるが、特殊な場合に用いられた埋葬形態である点において共通している[115]。

その後、静岡県浜松市瓦屋西C５号墳で木室構築前、同D１号墳で埋葬前に火化が行われていた事例[116]や、火化後に遺物が副葬された三重県伊勢市昼河古墳群の事例[117]が報告され、木室を火化施設と捉え、追葬が完結した時点で火化されるとした水野説に対し、いくつかの特異点が生じてきた。

鈴木氏は、火化が少数で未火化が大半を占める東海地方の事例に着目し、水野説をそのままこれらの地域にあてはめるのは無理があるとした上で、何故、火化されないものが存在するのか、特にそれが遠江や畿内以外で多いかについて説明できないとしている[118]。

このように横穴式木室における、火化有無の分かれ目、火化はいつの段階で行われるかについて検討の余地が生じてきている。さらに、後述する横穴式木室を採用し、火化を行った集団像や、檜尾塚原古墳群[119]（和泉市）、明ヶ島古墳群[120]（磐田市）のように、主体部が横穴式木室（火化の有無）の他に横穴式石室、木棺直葬、陶棺・甕棺を使用した土壙墓と、一つの古墳群の中で様々な埋葬形態を有した集団像について、今後の研究成果が待たれるところである。

３　時期と分布（第18表・第46図）

横穴式木室の時期と分布は第18表・第46図のとおりである。

時期については６世紀中葉から７世紀末にかけて火化され、それ以降は行われていない。つまり、この墓制は約100年間しか継続せず、短命で終了している。

調査事例数では、備前１、播磨４、摂津８、和泉15、河内１、丹波３、山城１、近江２、加賀３、美濃１、伊勢７、遠江44、関東４で、遠江が一番多く、次いで、近畿地方の34例となっている。また、現在のところ、備前以西、関東以北では見つかっていない。着目すべきは、近畿地方といっても、大和などの政権中枢部では、１例も確認されていないことである[121]。

次に調査事例をもとにした火化率は、備前・美濃・播磨６例（100%）、摂津８例中３例（約37%）、和泉15例中６例（40%）、加賀３例中1例（約33%）、近江２例中１例（50%）、伊勢７例中５例（71%）、遠江44例中４例（約９%）、関東０例である。伊勢以西は摂津と加賀を除いて、４割以上が火化されている。また、現在のところ、横穴式木室の調査事例が多い遠江で火化率が低い。このことは近畿地方とは別の集団がいた可能性が考えられる。なお、火化率はあくまでも調査事例に基づいて算出した割合であることに注意が必要である。

４　火化の様相（第19表）

研究略史でも述べたが、火化された横穴式木室は、政権の中枢部ではなく、外側に分布しており、しかも限られた地域に存在する傾向がある。播磨では加古川中流左岸、和泉では泉北丘陵、摂津では千里丘陵、近江では湖東、遠江では磐田原台地と三方原台地、太田・原野川流域である。鈴木氏は火化のあるなしを含めて、玄室構造について検討し、次のように分類した（18）。なお、それぞれの玄室構造の詳細は第19表の通りである。この分類をもとに、地域ごとに考察していくこととする。

①播磨・和泉

棟持柱を持たず、奥壁側と両壁側に丸太等を打ち込み、それらを天井部で合掌に組み合わせ、粘土を被覆して造られている。

②摂津・近江

４本の主柱に桁と梁を渡し外枠とし、桁と梁から垂木を周囲に打ち込んでいる。

③伊勢

西毛谷北５号墳は、摂津・近江のタイプに該当する。昼河古墳群では２つのタイプが存在する。C13号墳とA５号墳は播磨・和泉タイプに属する。A２号墳C12号墳は摂津・近江のタイプに属するが、長方形の掘り方にコノ字状に布掘りがなされ、そこに丸太等が打ち込まれている点で若干の相違がある。興味深いのは、同じ古墳群内において、構造が２つに分かれていることである。

④遠江（磐田原台地）

主体部奥壁中央と入口側中央に２個の主柱穴がある。この柱に棟木がのせられ、棟木から側面へ垂木

がされたものと考えられ、断面は合掌形を呈すると想定される。

⑤遠江（三方原台地）

2つのタイプが存在する。1つは磐田原台地と同じで、主体部の断面が合掌形を呈しているものである。違いとしては、主体部入口部に棟持柱の主柱穴を持たない。

もう1つのタイプは主体部の四隅に柱を立て、横木（桁）を渡し、その内側から丸太材を10～15㎝の間隔で立て、側壁を構成する。天井部には板材を使用している。

横穴式木室を内部主体とする古墳は、君ヶ口古墳[18]と瓦屋西B3号墳[19]が最古の事例で、6世紀前半である。続いて築造されたのは南山古墳[21]、明ヶ島2号墳、明ヶ島22号墳－2、明ヶ島29号墳、権現山1号墳など[22]で、6世紀中葉にあたる。つまり、6世紀中葉頃までの横穴式木室墳は東海地方に存在することが確認されている。構造について検討した結果、小森氏が述べているように、それぞれの地域で独自の展開をみせており、発信源及び系譜の存在は認められない[23]。

また、火化については横穴式木室出現より、約半世紀以上遅れの6世紀後半以降、上記の地域で一斉にみられるようになる。火化されているのは各古墳群の中でごく僅かであるとともに、火化されている横穴式木室だけが、特別な構造や規模を有してはいない。このことは全ての地域にあてはまる[24]。

ほとんどの地域で墓室を構築した後、複数の遺体を安置し、同時に火化している。但し、三方原台地に所在する瓦屋西古墳群（D1号墳とC5号墳第2主体部）については、墓室構築後に火化し、清掃と整形等を行ってから遺体を安置しており、他と異なる[25]。

横穴式木室は被葬者の火化を目的とする施設であるとする木野説は火化された瓦屋西古墳群を除いてあてはまる。

いずれにしても、仏教の影響を受けた火葬と称される行為（1体を茶毘にふす、収骨する、埋納する）は、これらの古墳には共通してあてはまらず、火化された横穴式木室と奈良時代以降の火葬墓とは一線を画すると言えるだろう。

限られた地域で、少数派である横穴式木室を採用し、さらにその中で火化が僅かに行われたのは何故か。この命題について、小森氏は火化の背景や被葬者像について整理する中で次のように述っている。

渡来系集団説、外来系集団説（国内の他の地域から移住してきた）、須恵器工人説、技術者集団説、石材入手困難説、移配隼人説である。石材入手を除いて一般人の中に存在した特殊集団の関与について述べている[26]。

西毛谷北5号墳が所在する場所は、県下でも有数の須恵器生産地である徳居窯跡群[27]が隣接している。その地域に居住していた特殊集団（ここでは須恵器工人）が、横穴式木室を構築し、遺体を入れて、燃やしたのであろうか。

5　周辺の環境（第47～55図）

加東市杜町に所在した名草3号墳・4号墳[29]から、周辺環境について見ていくことにする。

これらの古墳には奥ノ谷28号窯・奥ノ谷23号窯（共に加東市滝野町上滝野奥ノ谷）・吉馬32－V号窯（加東市杜町吉馬）が近接する[28]。須恵器窯の時期は、陶邑編年ではTK217型式からTK48型式に、飛鳥・藤原編年では飛鳥Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに該当し、7世紀前半から7世紀末である[30]。

特に、名草3号墳出土杯と奥ノ谷28号窯の出土杯の一部を比較すると、小型化、天井部及び底部の成形がヘラ切りに限られ省略化、杯蓋には短いかえりと宝珠つまみをもつなど、いくつかの点において類似しており、古墳の築造と窯の操業がほぼ同時期であることが窺える。

小野市に所在した中番地区群集墳25基は、発掘調査によって、7世紀前半から約1世紀にわたって継続的に築造されていたことが明らかになっている（火化された2・18号墳は7世紀後半）[31]。この群集墳には王子ヶ池窯（加東市杜町山国）・別所池窯（小野市曽根町別所前）が近接し、時期は陶邑編年、TK209型式で7世紀前半にあたる[32]。こちらについても操業と築造の時期に関係性が窺える[33]。

和泉市信太山丘陵北側に所在した道田池2号墳と菩提池西古墳、西端に所在した聖神社2号墳は陶邑窯跡群大野池地区に隣接する[36]。また、堺市に所

在した檜尾塚原９号墳－３は窯跡群の光明池地区に包括され、同市に所在した陶器千塚21号墳は、窯跡群の陶器山地区・高蔵寺地区に隣接している。陶邑窯跡群は全国でも有数の須恵器窯跡であり、上記地区の窯は５世紀から９世紀にかけて操業されている[35]。

三田市けやき台に所在する平方遺跡群は、平方古墳群と須恵器を焼いていた平方窯跡群を包括しており、２つの遺跡は隣接する。平方１・２号墳、平方１～３号窯は発掘調査が行われ、その結果、ともに６世紀後半を中心に盛行していたことが明らかとなっている[36]。

茨木市上穂積に所在した上穂積神社西古墳、同市中穂積に所在した上寺山古墳は、上穂積のゴルフ場内で発見された須恵器窯跡に近接している。この窯跡は吹田窯跡からは距離があるものの、千里窯跡群の一部として把握することができる[37]。

日野町小御門に所在した小御門古墳群の西方約3kmの位置に金折山窯跡と作谷窯跡がある。しかし、これらの窯跡の操業は７世紀末～８世紀で、築造が６世紀末と考えられている小御門古墳群とは時期差があり、古墳と窯跡の関連を述べるのは困難である。また、小御門古墳群と同時期の窯跡としては、蒲生郡の西に展開した大規模な鏡山古窯跡群があるが距離が離れすぎている[38]。

津市河芸町杜の街に所在した西毛谷北５号墳は、前述のように徳居窯跡群に隣接している（現在、38基が認知）。上記の古墳及びそこから南西へ約600mの位置に所在した徳居10号窯から出土した杯身・杯蓋や皿等の器形は酷似しており、時期は７世紀代であると考えられる[39]。

伊勢市朝熊町に所在した昼河古墳群の周囲には、現在のところ窯跡は見つかっていない。

浜松市有玉西町に所在した瓦屋西古墳群と有玉古窯は近接している（直線で約700m）。有玉古窯は６世紀前半、後期群集墳の出現期に築かれ、須恵器を生産した。有玉古窯で生産された須恵器を出土した古墳には瓦屋西古墳群Ｃ小支群、瓦屋西Ｂ２号墳がある[40]。

このように見てくると、火化された横穴式木室墳が採用された地域では、例外はあるものの、同時代に操業していた思われる須恵器窯跡が隣接・近接しており、両者には何らかの関係があるように窺える。

菱田氏は、「陶邑窯跡群の周囲に横穴式木室が多く分布したことも、この墓制と須恵器生産との関係を示唆する。平方遺跡では６世紀後半の須恵器窯とその工房の竪穴建物があり、その至近距離に横穴式木室を主体とする古墳が存在[41]。須恵器生産に関わる者以外に被葬者を想定することは難しい」と評価する[42]。中村氏は「檜尾塚原９号古墳の被葬者について、とくにそこから出土した須恵器を中心として考察を進めてきた。これらによって当該古墳埋納された大半の須恵器が地元陶邑窯で生産された可能性が濃いことが明らかになった。このことは当該古墳の被葬者が陶邑に在住する人物であったことは容易に推定されよう」と指摘しており[43]、複数の研究者が陶邑窯跡群と須恵器生産との関連を述べているところである。　　（長谷川）

【註】

（１）森浩一「大阪府堺市陶器千塚21号」『日本考古学年報』９　日本考古学協会　1959

（２）①中塚喬清『信太郷土史』 1987

②森浩一「大阪府和泉市堅神社カマド塚」『日本考古学年報』12　日本考古学協会　1964

（３）信太山遺跡調査団『信太山遺跡調査概報』 1966

（４）小野市教育委員会『小野市中番地区群集墳調査概報』 1969

（５）兵庫県加東郡教育委員会『名草３号墳・４号墳』 1984

（６）上寺山古墳研究会『上寺山古墳の研究』 2015

（７）①滋賀県教育委員会『蒲生郡日野町小御門古墳群発掘調査概要』 1966

②滋賀県教育委員会ほか『小御門古墳群』 2009

（８）森浩一「葬法の変遷よりみた古墳の終末」『末永先生古希記念　古代学叢論』末永先生古希記念会　1967

（９）註３前掲

（10）①水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』５　1970

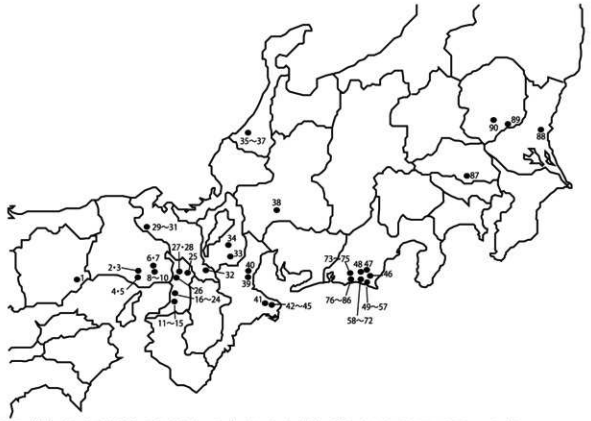
②水野正好「群集墳の群構造とその性格−兵庫県小野市所在東野中番地区古墳群をめぐる分析−」『高山古墳群調査報告書』小野市教育委員会　1974

（11）①柴田稔「横穴式木芯粘土室の基礎研究」『考古学雑誌』第68巻第４号　日本考古學會　1983

②北野博司「箱形粘土棺の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』1　石川考古学研究会　1983
（12）①浜松市教育委員会『瓦屋西古墳群』 1991
②浜松市文化協会『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上巻・瓦屋西C古墳群-』 1991
（13）伊勢市教育委員会『廻间古墳群』 1993
（14）鈴木敏則「横穴式木室雑考」『三河考古』第4号　愛知三河考古刊行会　1991
（15）大阪府教育委員会『陶邑Ⅶ』 1990
（16）①磐田市教育委員会『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 2003
②磐田市史編さん委員会『磐田市史』資料編1考古・古代・中世　1992
（17）註11②前掲
（18）註14前掲
（19）津市教育委員会『若ヶ口古墳発掘調査報告』 1974
（20）註12前掲
（21）伊勢市教育委員会『南山古墳発掘調査報告』 1982
（22）註16①②前掲
（23）小森哲也「横穴式木室考-先行研究の整理と分布・構造からみた地域間交流-」『考古学雑誌』第97巻第4号　日本考古學會　2013
（24）註14前掲
（25）註12前掲
（26）註23前掲
（27）米山浩之「県内最大の古墳検探訪」『河芸町史』本文編　河芸町史編さん委員会　2001
（28）註5前掲
（29）上月昭信『播磨地方における6世紀・7世紀の須恵器生産』 2004
（30）須恵器編年は以下の文献を参考にした。
①田辺昭三『須恵器大成』 1981
（31）註4前掲
（32）註30前掲
（33）註29前掲
（34）註3前掲
（35）註1、15前掲の他に、下記文献を参照した。
①堺市教育委員会「四ッ池遺跡・陶器千塚29号墳」『昭和58年度国庫補助事業発掘調査報告書』 1984
②大阪府教育委員会『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡：府営集落基盤整備事業[陶器北地区]に伴う発掘調査』 2007
（36）①兵庫県文化財調査報告『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書3　平方遺跡群ほか』 1993
②兵庫県文化財調査報告『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書5　西山遺跡群ほか』 1993
（37）前掲註6の他に、下記文献を参照した。
①菱田哲郎「横穴式石室と六世紀の茨木」『新修茨木市史』第一巻通史Ⅰ　茨木市史編さん委員会　2012
（38）註7前掲の他に、下記文献を参照した。
①日野町教育委員会『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1985
②滋賀県教育委員会『昭和五十年度滋賀県文化財調査年報』 1977
（39）2014年に津市教育委員会が調査。
（40）前掲註12①②の他に、下記文献を参照した。
①浜松市教育委員会『有玉古墳』 2004
（41）註36①②前掲
（42）註37①前掲
（43）中村浩「檜尾塚原古墳の被葬者像」『須恵器から見た被葬者像の研究』 芙蓉書房出版　2012

【参考文献】

（44）田村隆太郎「東海の横穴式木室と葬送」『東海の古墳風景』 雄山閣　2008
（45）清水邦彦「横穴式木室と火化の関係」『上寺山古墳の研究』 上寺山古墳研究会　2015
（46）和泉丘陵内遺跡調査会『和泉丘陵の古墳』 1992
（47）京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』 1972
（48）京都府教育委員会『上野平遺跡発掘調査報告書』 1973
（49）京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』 1998
（50）滋賀県教育委員会ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅵ-5』 1979
（51）石川県寺井町教育委員会『加賀 能見古墳群』 1997
（52）石川県埋蔵文化財保存協会『八幡遺跡Ⅰ』 1998
（53）岐阜県立関高等学校社会研究部『中池カマド塚について』 1959
（54）静岡県磐田郡浅羽町教育委員会『北山遺跡』 1987
（55）浅羽町史編さん委員会『浅羽町史　通史編』 2000
（56）静岡県磐田市教育委員会『匂坂下原古墳群発掘調査報告書』 1991
（57）浜松市教育委員会『半田山古墳群(Ⅳ中支群)』 1988



第46図　横穴式木室を主体部とする古墳の分布（註（23）掲載の横穴式木室分布図を引用して改変）

No.	古墳名	所在地	旧分国名	墳形・規模（m）	時期	火化	註
1	大門遺跡	岡山県備前市	備前			○	註(6)掲載の集成表
2	名草3号墳	兵庫県加東市（杜町）	播磨	円墳・13	6C末～7C末	○	(5)
3	名草4号墳			円墳・10	6C後～7C前	○	
4	中番2号墳	兵庫県小野市	播磨	円墳・9	7C後	○	(4)
5	中番18号墳			円墳・7.5	7C後	○	
6	平方1号墳	兵庫県三田市	摂津	不明	6C後		(36)①
7	平方2号墳	〃	摂津	不明	6C後	○	
8	西山古墳群2号墳	〃	摂津	円墳・7	7C前		(36)②
9	西山古墳群13号墳	〃	摂津	円墳・8.3	7C中		
10	西山古墳群18号墳	〃	摂津	円墳・11	7C初		
11	逼田池2号墳	大阪府和泉市	和泉	円墳・14	6C末	○	(3)
12	逼田池4号墳	〃	和泉	円墳・15	6C末		
13	菩提池西古墳	〃	和泉	封土なし	6C末	○	
14	聖神社2号墳（東）	〃	和泉	円墳・30	6C後	○	(2)
	聖神社2号墳（西）	〃	和泉		6C後	○	
15	明神原古墳	〃	和泉	円墳・18	6C後		(46)
16	檜尾塚原8号墳	大阪府堺市	和泉	円墳	6C後		(15)
17	檜尾塚原9号墳－3	〃	和泉	前方後円墳・17	6C後	○	
18	牛石5号墳	〃	和泉				註(6)掲載の集成表
19	野々井30号墳	〃	和泉	円墳・13	6C後		
20	陶器千塚1号墳	〃	和泉	円墳・6以上	6C末		註(6)掲載の集成表
21	陶器千塚7号墳	〃	和泉	円墳・16	6C末		
22	陶器千塚21号墳	〃	和泉	円墳・15	6C後	○	(1)
23	陶器千塚29号墳	〃	和泉	円墳・10？	6C後		(35)
24	陶器千塚93号墳	〃	和泉	方墳	7C初		註(6)掲載の集成表
25	宇山1号墳	大阪府枚方市	河内	円墳・12	7C初		註(6)掲載の集成表
26	新芦屋古墳	大阪府吹田市	摂津		6C末		註(23)掲載の集成表
27	上寺山古墳	大阪府茨木市	摂津		6C末	○	(6)
28	上穂積神社西古墳	〃	摂津		6C末	○	註(23)掲載の集成表
29	中坂5号墳－3	京都府福知山市	丹波	帆立貝・18	7C前		(47)
30	中坂7号墳	〃	丹波	円墳・13	7C前	△	
31	弘山1号墳	〃	丹波	円墳・12	7C初		(48)
32	片山3号墳	京都府木津川市	山城			○	(49)
33	小銅門Ⅱ－2号墳	滋賀県蒲生郡日野町	近江	円墳・14	6C後	○	(7)
34	塚原古墳	滋賀県愛知郡愛荘町	近江	円墳	6C		(50)
35	和田山10号墳	石川県小松市	加賀				(51)
36	八幡2号墳	〃	加賀	円墳・15	7C前	○	(52)
37	寺井山3号墳	〃	加賀	不明	6C前		(51)
38	中池カヲド塚	岐阜県関市	美濃	円墳か	？	○	(53)

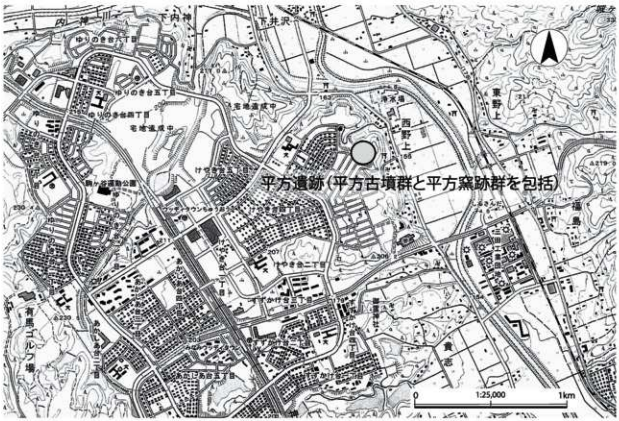
第18表　横穴式木室集成①（註(6)(23)掲載の集成表を改変）

No.	古墳名	所在地	旧分国名	墳形・規模（m）	時期	火化	註
39	君ヶ辻古墳	三重県津市	伊勢	前方後円墳・24	６Ｃ前		(19)
40	西毛谷北５号墳	三重県津市（河芸町）	伊勢	方墳・	７Ｃ後	○	本報告
41	南山古墳第Ｉ主体	三重県伊勢市	伊勢	円墳・18	６Ｃ中		(21)
42	昼河Ａ２号墳	〃	伊勢	楕円・13	７Ｃ前	○	(13)
43	昼河Ｃ12号墳	〃	伊勢		７Ｃ前	○	
44	昼河Ｃ13号墳	〃	伊勢		７Ｃ前	○	
45	昼河Ｃ14号墳	〃	伊勢		７Ｃ前	○	
46	堀ノ内13号墳	静岡県掛川市	遠江	円墳・25	６Ｃ後		(44)
47	林５号墳	〃	遠江	円墳・15	６Ｃ後～７Ｃ初		
48	上神増Ｅ３号墳（Ⅱ24号）	〃	遠江	円墳・12	６Ｃ後～７Ｃ初		
49	北山Ａ１号墳	静岡県袋井市（浅羽町）	遠江	円墳・７	６Ｃ後		(54)(55)
50	北山Ａ２号墳	〃	遠江	円墳・11	６Ｃ後	○	
51	北山Ａ３号墳	〃	遠江	円墳・11	６Ｃ後		
52	北山Ａ４号墳	〃	遠江	円墳・11	６Ｃ後		
53	団子塚10号墳	〃	遠江	円墳・13	６Ｃ後～７Ｃ初		(44)
54	団子塚３区１（仮）	〃	遠江	円墳・10			
55	団子塚３区３（仮）	〃	遠江	円墳・？			
56	高尾向山５号墳	静岡県袋井市	遠江	円墳・12	６Ｃ後		註(6)掲載の集成表
57	高尾向山７号墳	〃	遠江	円墳・11	６Ｃ後		
58	明ヶ島１号墳	静岡県磐田市	遠江	円墳	６Ｃ		(16)①
59	明ヶ島２号墳	〃	遠江	円墳・12	６Ｃ		
60	明ヶ島３号墳	〃	遠江	円墳・５	６Ｃ		
61	明ヶ島７号墳	〃	遠江	円墳・８	６Ｃ		
62	明ヶ島10号墳	〃	遠江	方墳・10	５・６Ｃ	○	(16)②
63	明ヶ島11号墳	〃	遠江	円墳・10	６Ｃ		(16)①
64	明ヶ島22号墳－２	〃	遠江	円墳・７	６Ｃ		
65	明ヶ島25号墳	〃	遠江	円墳・８	６Ｃ		
66	明ヶ島29号墳	〃	遠江	円墳・８	６Ｃ	○	
67	権現山１号墳（旧２号墳）	〃	遠江	前方後円墳・18	６Ｃ前～中		(16)②
68	権現山２号墳（旧３号墳）	〃	遠江	円墳・10	６Ｃ後～７Ｃ初		
69	屋敷山１号墳（南）	〃	遠江	前方後円墳・17	６Ｃ前～中		
	屋敷山１号墳（北）	〃	遠江				
70	屋敷山３号墳	〃	遠江	円墳・９	６Ｃ前～中		
71	城之崎２号墳	〃	遠江	円墳・14	６Ｃ後		註(23)掲載の集成表
72	匂坂下原17号墳	〃	遠江	円墳・12	７Ｃ初	△	(56)
73	半田山Ｂ４号墳	静岡県浜松市	遠江	前方後円墳・21.5	６Ｃ中		註(14)掲載の集成表
74	半田山Ｄ10号墳	〃	遠江	円墳・8.1	６Ｃ後		(57)
75	半田山Ｅ４号墳	〃	遠江	円墳・12.5	６Ｃ後		
76	瓦屋西Ｂ１号墳	〃	遠江	円墳・５	６Ｃ中		(12)①
77	瓦屋西Ｂ３号墳	〃	遠江	前方後円墳・28	６Ｃ前		
78	瓦屋西Ｂ５号墳	〃	遠江	円墳・８	６Ｃ中		
79	瓦屋西Ｂ７号墳	〃	遠江	円墳・10			
80	瓦屋西Ｄ１号墳	〃	遠江	方墳・11	６Ｃ末	○	
81	瓦屋西Ｃ５号墳－１	〃	遠江	前方後円墳・23	６Ｃ後		(12)②
	瓦屋西Ｃ５号墳－２	〃	遠江		６Ｃ後	△	
82	瓦屋西Ｃ10号墳－２	〃	遠江	円墳・17.5	６Ｃ後		
83	瓦屋西Ｃ14号墳	〃	遠江	円墳・12	６Ｃ末		
84	瓦屋西Ｃ17号墳	〃	遠江	円墳・10	６Ｃ中		
85	瓦屋西Ｃ19号墳－１	〃	遠江	円墳・11	６Ｃ後		
	瓦屋西Ｃ19号墳－２	〃	遠江		６Ｃ後		
86	瓦屋西Ｃ24号墳	〃	遠江	円墳・９	６Ｃ後		
87	（牛塚古墳） ２次埋葬	埼玉県川越市		前方後円墳・45.6	６Ｃ後		註(23)掲載の集成表
88	ニガサワ２号墳	茨城県水戸市		前方後円墳・31	６Ｃ後		
89	上原５号墳	栃木県壬生町		円墳・18	６Ｃ後		
90	西浦２号墳	栃木県真岡市		円墳・？			

第18表　横穴式木室集成②（註(6)(23)掲載の集成表を改変）

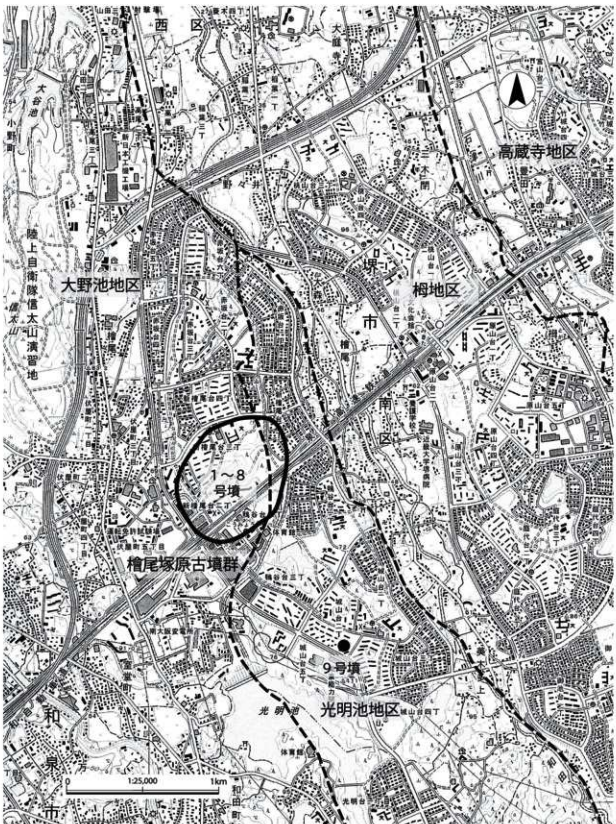
第47図　名草古墳群と奥ノ谷28号窯・奥ノ谷23号窯・吉馬32－Ⅴ号窯〔国土地理院「西脇」「比延」1:25,000より作成〕

第48図　中番地区群集墳と王子ヶ池窯・別所池窯〔国土地理院「社」1:25,000より作成〕

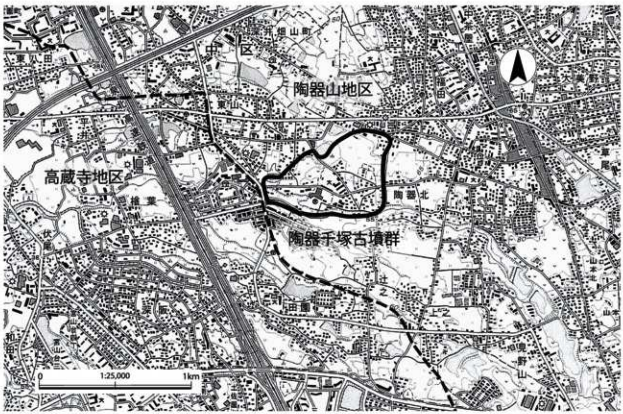


第49図　平方遺跡群〔国土地理院「三田」1:25,000より作成〕

第50図　道田池古墳群・菩提池西古墳・聖神社古墳と陶邑窯跡群大野池地区〔国土地理院「堺」1:25,000より作成〕

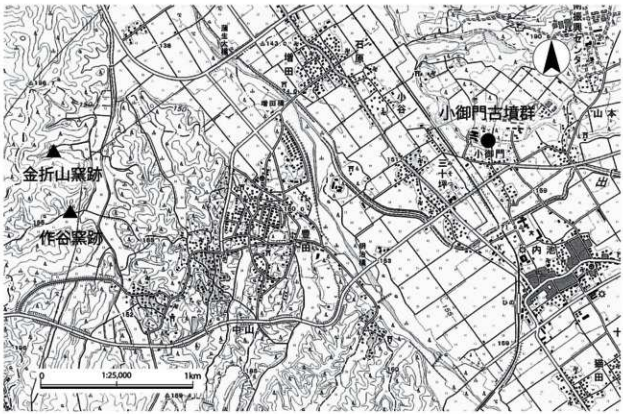


第51図　檜尾塚原古墳群と陶邑窯跡群大野池・光明池地区〔国土地理院「岸和田東部」1:25,000より作成〕

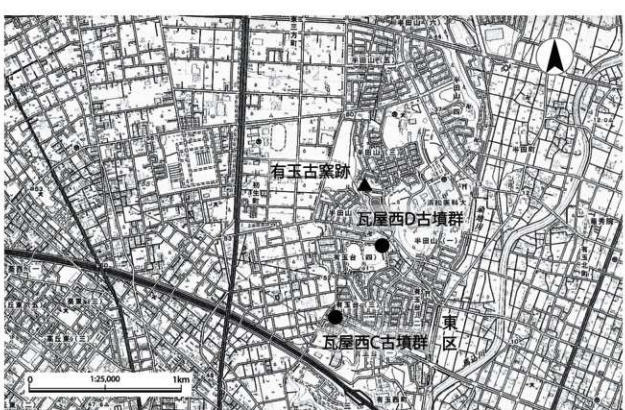


第52図　陶器千塚古墳群と陶邑窯跡群陶器山地区・高蔵寺地区〔国土地理院「古市」1:25,000より作成〕

第53図　上寺山古墳と須恵器窯跡〔国土地理院「吹田」1:25,000より作成〕



第54図　小御門古墳群と金折山窯跡・作谷窯跡〔国土地理院「日野西部」1:25,000より作成〕



第55図　瓦屋西古墳群と有玉古窯〔国土地理院「気賀」1:25,000より作成〕

No.	古墳名	断面形	木室構造復元（報告書等の記述から）	火化のタイミング等	註
2	名草３号墳	△	床面は地山面を10cmあまり掘り下げ、周囲に径15～20cmの柱穴を73本分うがって造られている。奥壁の木柱根は、床面に対して約80度の角度をもって埋め込まれている。両側壁は床面に対して55～60°の角度をもって内傾、柾目はヒノキの丸太材を使用して合掌状に組んだ。	６体以上、同時に焼く。	(5)
3	名草４号墳	△	床面は地山面を10cmあまり掘り下げてつくられているが、フラットではない。柱穴は奥壁で11箇所、北側壁で29箇所、南側壁で27箇所の計67箇所。穿ち方には粗雑があり、特に奥壁の両端部は柱穴を欠く。３号墳と同じ合掌形式。	２～３体以上、同時に焼く。	
4	中番２号墳	△	地山を南北約2.5m、東西約2.5m、深さ15cmのほぼ方形に掘り込み、周囲を灰白砂質粘土（漆喰状）で固めた。墓坑掘部にほぼ等間隔に立てた径３～４cmの樹枝が墓坑内に倒れ込んだ状態で検出された。	灰化した骨が認められたが、形状は不明。	(4)
5	中番18号墳	△	楕形の粘土郭。粘土郭は樹皮を芯にし、粘土を塗りこんだカマボコ状。奥壁より90cmのところに円環状の煙出しが、南端に焚口を設けている。奥壁は垂直で約12cm間隔で木材を横に塗り込んだもの。	３体同時に焼く。	
7	平方２号墳	△	墓室は基盤層を長辺2.2m、短辺2.2m、奥壁2.0m、最大深さ40cmのやや楕形の長方形を呈する。 壁際には溝が巡り、溝の内側には炭化したスギ材が左12本、奥15本、右３本残されていた。炭化材はいずれも内傾していたが、土圧によるものと思われる。	人骨細片出土。 生焼から高温で焼成。個体数不明	(36)①
11	道田池２号墳	△	カマド郷は南北長３m、幅2.45m、両側には土師を内傾させた丸太痕あり。その数は北辺17本、西辺19本。 北辺は奥壁にあたり、柱痕の傾斜はわずかであるが、両側壁は約48度の急傾斜で傾く。	２体以上	(3)
13	菩提池西古墳	△	北西部に焚き口あり。柱穴は65本、丸太材は側柱は整形した20cm前後のものであるが、煙出し部は他の原木をそのまま使用しているようである。 側壁の柱穴カーブは約60度で、上部へ行く程カーブがきつくなる。	３体	
14	聖神社２号墳（東） 聖神社２号墳（西）	△	郭域を設定し、1/3ほどを残して両側から40～50°の角度で径10～15cmの丸太を合掌式に組合す（丸太は掘立式に約50cm地下に埋められている）。この部分が硬成室にあたり、先端に煙出しが天井にあいている。 残りの1/3ほどは周囲からほぼ直角に丸太が並べられる。この部分は天井が高く焚口にあたる。 藁を混えた粘土で厚さ20cmほど覆う。焚口以外の内部へ礫を敷き詰める。	軟部がほとんど消失してから、４つの木棺におさめ、８体を同時に焼く。 ２体同時に焼く。１体は追葬（焼けていない）。	(2)
17	檜尾塚原９号墳－３	△	奥壁部幅1.9m。左側壁延長3.2m、右側壁延長4.6m。壁に接する形で、三方向に柱穴が斜め方向に掘られている。中央部入口で奥壁部の２個１組に対応する柱穴が確認。中央が高く両側が低い、合掌式の屋根構造をもっていたものと思料される。	３体程度か	(15)
22	陶器千塚21号墳	△	葺石のある部分では、南側から直径15～25cmくらいの丸太を、地面に対して30度の角度をつくって、合掌式に組合わせている。 北端の敷石のない部分は、丸太が80度に立てられているから天井はない。	２体。 １体ずつ焼いたと考えられる条件が多かった。	(1)
27	上寺山古墳	⏢	基準点をもとに土坑（玄室）を掘る（長4.5m、幅３m）。主柱を６本建てる。主柱に梁と桁をかける。高さは床面から115cm前後。 木材を梁や桁に立てかける。傾斜角度は70度程度。 煙出しを構築する。 屋根材（天井）にする加工木材を葺く。柱の間が広いところには葦や小枝などの木舞を入れて鍬土を被せ壁や屋根にする。	第１号木棺を埋葬後、奥に片づける。 第２号木棺・第３号木棺を入れ、火をかける。	(6)
33	小御門Ⅱ－２号墳	⏢	地山を平面形に30cmほど掘削、周縁を幅20cmの溝を掘る。 南北中軸線上に２妻柱をたて、その左右60cm前後はなれた位置に南北中軸線に側柱をたて、これに桁、梁をわたし、そこから周縁の溝へ向けて側壁材（控柱）を打ち込む。そしてその内外に厚く粘土を貼付、妻柱、側柱は浅く打ちこまれているに反し、側壁材は深く打ち込まれており、木室が強化されている。	２棺火化。	(7)
36	八幡２号墳	不明	奥壁側・入口側の幅はそれぞれ2.0m、1.8m、長さ3.9m。床面には川原石が密に並べられている。 旧表土又は地山を掘り込み、木忠を組んだ後に粘土で覆ったと思われる。 焼土や炭化材が多数出土しており、火化されたことを示す。	焼土や炭化材は、入口付近、礫床や副葬品に焼けた痕跡なし。 埋葬施設を燃やす、あるいはその中で火を炊くことが目的か？	(52)

第19表　火化された横穴式木室構造①（左端の通し番号は第18表に対応）

No.	古墳名	断面形	木室構造復元（報告書等の記述から）	火化のタイミング等	註
38	中池カマド塚		ローム層上に長方形の粘土棺を作り（その側面には丸太を使用）、その中に遺体を安置し、周囲に焚木をふかせ、丸太で組天井を作り、その上に粘土を張る。 その後燃やし、そのまま盛土をした（調査担当者の推定）。	南北約１m、東西約0.5m、厚さ約６～８cmにかけて広がる炭の中に人骨片が多く混在。	(53)
40	西毛谷北５号墳		主体部の規模は長さ5.6m、幅3.3m。 梁行１間×桁行３間の構造物（木室）になると想定される柱穴を検出。また、木室を構成する柱に対し、周囲から径15～30cm程度の丸太材あるいは半截材を立てかけ、壁を構成。	１体を埋葬、数年～数十年を経てもう１体を埋葬した後、火化。	本報告
42	昼河Ａ２号墳		長方形の掘り方に沿ってコの字形に布掘りの溝を巡らし、そこに垂木状の材をほぼ直立気味に立て並べて両側壁と奥壁を構築する。平面形は長方形の木室。		
43	昼河Ｃ12号墳		Ａ２号墳と同じつくりであるが、以下の点が異なる。主柱穴らしい柱穴が認められる。両側壁はやや内傾する。		
44	昼河Ｃ13号墳		平面形は長方形の木室。内傾する両側壁、奥壁部には小穴が巡る。棟持柱はなく打ち込んだ垂木（丸太）材を合掌形に組み合わせたテント状の木室が想定される。 床面は木室内を区画したような高まりが３ヶ所みられる。		(13)
45	昼河Ｃ14号墳		平面形は入口にかけてすぼまる長方形状である。構造はＣ13号墳と同じであるが、木室内にはＣ13号墳のような櫛はみられない。		
50	北山Ａ２号墳		主柱は２本で、柱間は254cm。玄室幅は140cm。出入口は主柱の横にある。	火化骨出土。	(54)・(55)
62	明ヶ島10号墳		玄室は地山を方形に0.35m掘り込んで形成。土坑のほぼ中軸線上に幅0.2m、深さ0.4mの主柱穴有り。 土坑の壁に沿って約40本の小穴があり、一部炭化した木材が遺存。小穴は深さ0.1m前後。溝状に掘られた部分に垂木に相当する木材を建てたと考えられる柱痕と、木材を打ち込んだと考えられる柱痕とがある。側壁側では内側に内傾、奥壁側では直立。主柱穴の柱痕は直立。 床面に円礫による敷石。敷石面には炭化物と焼土が多量に発見。	埋葬遺体は２体以上。	(16)②
66	明ヶ島29号墳		墓坑内部には、木室の板材・柱材を強化するため、粘土が貼られていた。 粘土帯の内側を玄室と考えると、南北2.23m、東西1.9mを測り、長方形を呈する。 第１号人骨の直上。玄室の主軸に対して直行方向に炭化材や灰が堆積。木棺ではなく、木室の部材は焼け落ちたものと考えられる。	若年男性（第１号人骨）と熟年女性（第２号人骨）の人骨出土。 火化は２回（第１号⇒第２号）【調査所見や鑑定所見を反映】	(16)①
80	瓦屋西Ｄ１号墳	不明	木と粘土で構築（粘土厚－天井・側壁約10cm、奥壁約15cm）。 側壁基底部分に浅い溝があり、径５～10cmの丸太材が10～15cm間隔で打ち込まれていたものと考えられる。 奥壁の両端に１個ずつピット検出。径13cmほどの大型の丸太材が使用されていたと考えられ、同様の丸太材が入口にも存在したとすれば、これに桁、梁をわたして側壁の丸太材と連結させて外枠を形成したと思われる。	木室構築後、焼成。 その後、整形と清掃を行い、床石を敷き、木管と副葬品を入れた。	(12)①
81	瓦屋西Ｃ５号墳－第２主体部	不明	床面に小石列、列と列の間に床石が乱雑に敷かれている。 横穴式木室と考えられるが、棟木などを支える柱穴は認められず、また粘土も使用していない。側壁に併行する幅15cmほどの小石列間に板材などを立てて木室をつくったものと思われる。	墓壙構築後、何らかの理由によって火化させ、その後、床石や石敷組を敷いている。	(12)②

第19表　火化された横穴式木室構造②（左端の通し番号は第18表に対応）

b　須恵器の年代と生産地の分析

1　はじめに

西毛谷北５号墳（以下、５号墳）ＳＸ30は、主体部の横穴式木室を火化したことで、壁や天井を構築する木材や盛土が一度に崩落している。崩落時の影響を考慮しても、副葬品の出土状況は埋葬時の最終段階を示していると考えられる。

副葬品は、耳環３点と須恵器26点である。耳環の点数や出土地点、須恵器の出土状況が玄室の奥壁側と入口側にまとまることから、２体の埋葬が想定される。そこで、埋葬行為が行われた時期や回数を裏付けるために、須恵器の年代を検討する。

さらに、５号墳は河芸丘陵に所在しており、周囲には須恵器生産地である徳居窯跡群が広がる。徳居窯跡群の製品は周辺の集落や墓へ供給されることが想定できるが、５号墳出土須恵器は徳居窯跡群から供給されたものか、他地域から流通したものか分析する。

2　西毛谷北５号墳出土須恵器の年代

（1）徳居窯跡群における須恵器編年の現状

徳居窯跡群は古墳時代後期から奈良時代の須恵器窯跡群で、38基の窯跡が把握されている。主要な研究は、後生卓司による窯跡の変遷と周辺の古墳や集落の整理がある[1]。ただし、徳居窯の資料の多くが採集資料という制約のため、詳細な編年研究には課題が残る。

近年では、徳居窯跡群の発掘調査や報告書刊行がなされた。古墳時代後期の徳居31・32号窯[2]、飛鳥時代の徳居10号窯[3]の調査成果があり、今後の研究の進展が期待される。

徳居窯跡群は資料的制約が大きく、５号墳出土資料との年代的な対比は困難な状況である。そのため、本論では都城編年[4]を軸に検討を進め、年代を推定する。

（2）分析方法

５号墳ＳＸ30は、副葬品の須恵器が玄室の奥壁側と入口側の大きく２箇所にまとまる。須恵器が出土した地点で、時期差を認められるか検討し、埋葬過程を明らかにする。ここでは、玄室の奥壁側を奥壁グループ（第27図30～45）、入口側を入口グループ（第26・27図18～29・46）と呼称して検証する。

玄室の平面には、柱穴とみられるPitがあり、壁や天井を支持する構造材と考えられる。土層断面では、地山上に明褐色砂質土層が観察でき、これは床面を構成する整地土と考えられる[5]。

出土状況を整理すると、奥壁グループは床面直上から検出されたもので、棺外の副葬品と考えられる。入口グループは床面直上のものと、床面より８㎝程高い位置で検出した杯19と耳環46がある。前者は棺外の副葬品、後者は棺内の副葬品が想定される。

分析は両グループの器種構成を整理し、各器種の製作技法、胎土、焼成の特徴をまとめる。こうした特徴と都城出土資料を対比することで、年代の絞り込み作業を行う。

なお、以下の本文で示した遺物番号は、基本的には第26～30図の遺物を示している。それ以外を示す場合のみ、図・遺物番号を併記する。

（3）器種分類

器種の分類は、基本的には都城編年を軸に進める[6]。しかし、地域的特徴を有する器種がいくつか存在するため、上記の分類と一致しない場合がある。そこで、本論における分類を新たに設定し、都城編年と特徴が類似するものは、第56・57図・第20表で、本論の分類との対応関係を示した。

①杯

底部の形態から大きく丸底と平底のものに大別し、体部・口縁部の形態、高台の有無で細分する。

丸底杯Ⅰ

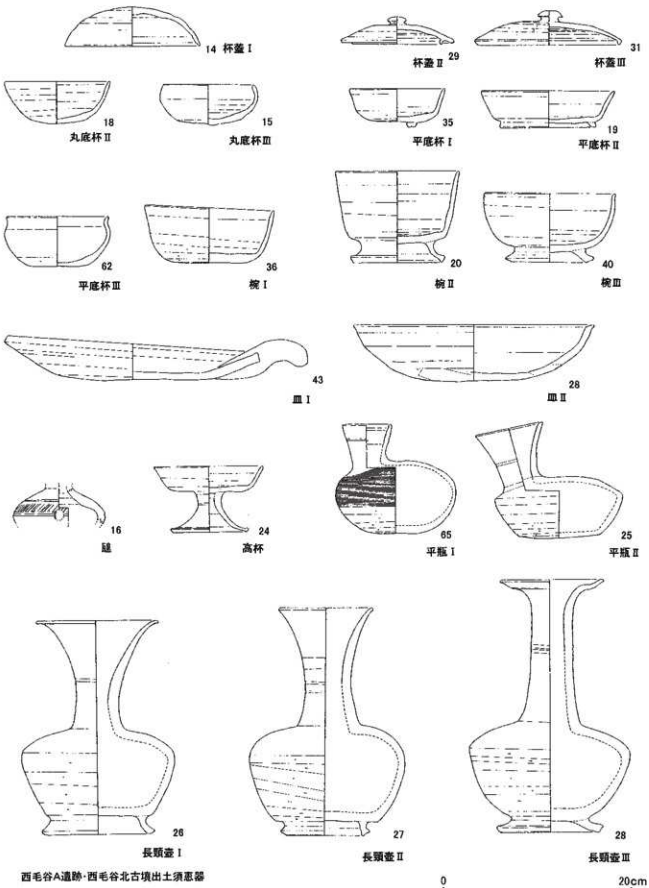
古墳時代中・後期にみられる丸底杯で、口縁部は蓋受けを伴う。本調査では出土していないが、これに伴う杯蓋が出土したため、分類を設定した。都城分類の杯Ha1に相当する。

丸底杯Ⅱ

丸底で口縁部に受け部を伴わない形態。口縁部は直線的に外側に開くもの、あるいは緩く内湾するものがある。古墳時代中・後期における杯H蓋を天地逆にした形態に類似する[7]。

丸底杯Ⅲ

丸底で受け部が伴わない形態。体部から口縁部に

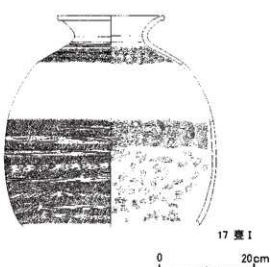


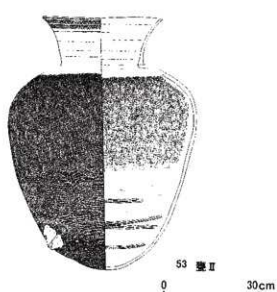
第56図　器種分類図①（1：4）

本論分類		都城分類
杯	丸底杯Ⅰ	杯H
	丸底杯Ⅱ	—
	丸底杯Ⅲ	—
	平底杯Ⅰ	杯G
	平底杯Ⅱ	杯B
	平底杯Ⅲ	—
杯蓋	杯蓋Ⅰ	杯H蓋
	杯蓋Ⅱ	杯G蓋
	杯蓋Ⅲ	杯B蓋
椀	椀Ⅰ	椀A
	椀Ⅱ	椀B
	椀Ⅲ	椀C

本論分類		都城分類
皿	皿Ⅰ	—
	皿Ⅱ	—
高杯	高杯	高杯
鬚	鬚	—
平瓶	平瓶Ⅰ	平瓶
	平瓶Ⅱ	
長頸壺	長頸壺Ⅰ	壺K
	長頸壺Ⅱ	
	長頸壺Ⅲ	
甕	甕Ⅰ	—
	甕Ⅱ	—

第20表　器種分類対応表





西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳出土須恵器

第57図　器種分類図②（1：8，1：12）

かけて強く内湾する。地域的な特徴を有する器種と考える[8]。

平底杯Ⅰ

平底で高台が伴わない杯。口縁部は直線的に外側へ開く形態。都城分類の杯Gに相当する。

平底杯Ⅱ

平底で高台が伴う杯。口縁部は直線的に外側に開く形態。都城分類の杯Bに相当する。

平底杯Ⅲ

体部は丸みをもつが、底部は平底となる。肩部から口縁部にかけて、外側に屈曲する[9]。地域的な特徴を有する器種と考える

②杯蓋

体部の形状、口縁部の返しの有無、摘みの有無から細分する。

杯蓋Ⅰ

古墳時代中・後期にみられる杯蓋。天井部が丸形の形態で、摘みはない。都城分類の杯H蓋に相当する。

杯蓋Ⅱ

天井部には摘みが付き、口縁部には返しが伴う形態。都城分類の杯G蓋に相当する。

杯蓋Ⅲ

天井部に摘みが付き、口縁部の返しがない形態。都城分類の杯B蓋に相当する。

③椀

体部の形態、高台の有無で細分する。

椀Ⅰ

平底で、口縁部は直線的に外側へ開く形態。都城分類の椀Aに相当する。

椀Ⅱ

椀Ⅰに高台が伴う形態。都城分類の椀Bに類するが、高い高台を持つ。

椀Ⅲ

平底だが、体部は丸みをもつ形態。高台を伴う。都城分類の椀Cに相当する。

④高杯

小型の高杯。平底杯Ⅰと杯部の形態が近似する。透かしのない脚部をもつ形態。

⑤皿

把手の有無で細分する[10]。

皿Ⅰ

口縁部に把手を伴い、浅手のもので、口縁部は直線的に外側に開く。地域的な特徴を有する器種と考える。

皿Ⅱ

口縁部に把手を伴わないもの。深手のもので、口縁部はやや内湾する。

⑥鉢

出土資料で全体の形状が明らかなものはない。肩部には2条の沈線が巡り、その間を斜線文で装飾する。穿孔部は、注ぎ口状の突出はみられない。

⑦平瓶

平底で扁平な体部の形態。器軸からずらした広口の頸部が伴う。体部の形状から細分する。

平瓶Ⅰ

丸みを持つ体部で、体部と肩部の境は不明瞭。天井部から体部中位にかけてカキメが施される。頸部は上方を向く。

平瓶Ⅱ

体部は直線的で、肩部との境で強く屈曲する形態。頸部は斜方を向く。

⑧長頸壺

細長い頸部で、肩部が張り稜角をもつ形態の壺。都城編年の壺Kに相当する。口縁部、体部、台部の形状から細分する。

長頸壺Ⅰ

頸部から口縁部にかけての開きが大きい。頸部の沈線は1条。肩部と体部の境が明瞭である。肩部はやや膨らみをもつが、体部は直線的な形態。高台は外側に広がる。

長頸壺Ⅱ

頸部から口縁部にかけての開きが小さい。頸部の沈線は2条。体部の形態は丸みをもち、肩部との境はやや不明瞭。高台は直立ぎみである。

長頸壺Ⅲ

頸部は直線的で、頸部上位で屈曲して口縁部をなす。頸部の沈線は２条。肩部と体部の境が明瞭。高台は水平方向に広がる。

⑨甕

大きさと体部・頸部から口縁部の形態で細分する。

甕Ⅰ

中型で長胴形のもの。口径は20cm程で、頸部から口縁部まで短く、外側への傾きが大きい。

甕Ⅱ

大型で長胴形のもの。口径は40cm前後で、頸部から口縁部まで長く、外側への傾きが小さい。

⑩器種構成

第21表に、各遺構の器種構成をまとめた。器種ごとに特徴を整理する。

杯は、平底杯Ⅰ・Ⅱの出土が特徴的で、５号墳ＳＸ30のみで確認できる。これに対して、丸底杯Ⅱが相対的に多くみられる。

杯蓋は、杯と比べて出土遺構が少ない傾向にある。５号墳ＳＸ30奥壁グループは杯蓋Ⅱ・Ⅲがあり、杯との対応関係がわかる。杯蓋Ⅱは平底杯Ⅰ、杯蓋Ⅲは平底杯Ⅰ・Ⅱと対応する。杯蓋Ⅲは口径に大小２通りあり、前者が平底杯Ⅱ、後者が平底杯Ⅰとなる。

この他に、ＳＸ25とＳＸ49は杯蓋のみの出土で、杯との対応関係は不明である。

丸底杯Ⅱが出土する遺構では、これに対応する杯蓋が確認できないため、丸底杯Ⅱは蓋を伴わない器種と考える。丸底杯Ⅲについても、対応する蓋は確認できず、蓋を伴わない可能性が高い。

椀は、５号墳ＳＸ30とＡ－Ｋ７Ｐｉｔ７で確認できる。５号墳ＳＸ30奥壁グループの椀Ⅰ・Ⅲは、どちらにも杯蓋Ⅲが伴う可能性がある。ただし、両者の口径が同じ法量であり、この事例のみで判断することが難しい。

椀Ⅱは、ＳＸ30入口グループでのみ出土する。入口グループでは、杯蓋が出土しておらず、蓋が伴わない可能性がある。

高杯は、５号墳ＳＸ30とＳＫ52・53で確認できる。複数出土するのは、５号墳ＳＸ30に限られる。

この他の器種は、出土遺構が限定的で、数も少ない特徴がある。

器種構成は、５号墳ＳＸ30の多様性、出土量が目立つ。この他の遺構は、杯を主体として２～３器種ほどで構成される。５号墳ＳＸ30が埋葬施設という性格を考慮しても、西毛谷北古墳群における被葬者の階層や須恵器生産との強い関連性が想定できる。

（４）製作技法

器種分類ごとに製作技法の特徴を整理し、傾向を示す（第22表）。

①杯

底部外面の調整に特徴があるため、下記に各分類の所見を示す。内面は底部がナデ、体部下位から口縁部がロクロナデとなる。

丸底杯Ⅰ

出土資料はないが、杯蓋Ⅰと同様に底部外面はロクロケズリ、ロクロナデと考えられる。

丸底杯Ⅱ

底部外面はヘラ切り後ナデである。ヘラ切り痕を丁寧に消すものが多くを占めるが、粗い仕上がりのもの（60）もある。

丸底杯Ⅲ

底部外面はヘラ切り後ナデである。

平底杯Ⅰ

底部外面はロクロケズリである。

平底杯Ⅱ

底部外面はロクロケズリである。高台はロクロナデにより貼り付ける。

平底杯Ⅲ

底部外面はロクロケズリである。体部外内面はロクロナデ、底部内面はナデである。

②杯蓋

杯蓋Ⅰ～Ⅲは、外面がロクロケズリとロクロナデ、内面がナデとロクロナデである。

③椀

椀Ⅰ～Ⅲは、底部外面がロクロケズリである。外内面は体部下位から口縁部がロクロナデ、底部内面がナデとなる。椀Ⅱ・Ⅲの高台は、ロクロナデによ

第21表　器種構成一覧

器種＼時期		5号墳入口 SX30	5号墳奥壁 SX30	5号墳周溝 SX29	SX25	SX33	4号墳周溝 SX47	土器棺 SX49	SX55	SD54	SK52	SK53	A－K7 Pit7
		7世紀後	7世紀後	7世紀後	7世紀後	7世紀中～後	7世紀後	7世紀後	7世紀後	7世紀後	7世紀中～後	7世紀後	7世紀後
杯	丸底杯Ⅰ												
	丸底杯Ⅱ	○							○	○		○	
	丸底杯Ⅲ			○									
	平底杯Ⅰ		○										
	平底杯Ⅱ	○	○										
	平底杯Ⅲ					？				○			
杯蓋	杯蓋Ⅰ			○									
	杯蓋Ⅱ		○		○			○					
	杯蓋Ⅲ		○					○					
椀	椀Ⅰ		○										○
	椀Ⅱ	○											
	椀Ⅲ		○										
皿	皿Ⅰ		○				○						
	皿Ⅱ	○											
高杯		○	○								○	○	
鉢				○									
長頸壺		○											
平瓶	平瓶Ⅰ										○		
	平瓶Ⅱ	○											
甕				○		○		○					
その他		耳環	耳環			長胴棺?							

り貼り付ける。

④高杯

杯部は、底部外面がロクロケズリ、外内面の体部から口縁部がロクロナデ、底部内面がナデである。脚部はロクロナデで成形する。

⑤皿

底部外面は不定方向のケズリ、外内面は体部から口縁部がロクロナデ、底部内面がナデと指オサエである。皿Ⅰは、把手の調整がケズリのものと、ナデ・ユビオサエのものがある。

⑥鉢

体部には2条の沈線間に斜線文が施される。体部外内面はロクロナデである。

⑦平瓶

平瓶Ⅰ

体部上位から中位がカキメ、中位から底部がロクロケズリとなる。

平瓶Ⅱ

口縁部から体部下位までロクロナデ。底部外面はロクロケズリである。

⑧長頸壺

長頸壺Ⅰ～Ⅲは、口縁部から肩部にかけてロクロナデ、体部から底部がロクロケズリである。台部はロクロナデで貼り付ける。

⑨甕

甕Ⅰ

口縁部から頸部にかけてロクロナデ。体部外面は平行タタキで、工具ナデが全体的に施すものと、下位のみ施すものがある。内面は同心円当て具である。

甕Ⅱ

口縁部から頸部にかけてロクロナデ。体部外面は平行タタキで、その後に工具ナデを施す。内面は同心円当て具、その後に工具ナデである。

⑩製作技法の傾向

丸底杯Ⅱ・Ⅲは、底部外面の調整がヘラ切り後ナ

器種		外面					内面	
		ロクロケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	ケズリ	ロクロナデ	ナデ
杯	丸底杯Ⅰ	?	?				?	?
	丸底杯Ⅱ		○	○			○	○
	丸底杯Ⅲ		○	○			○	○
	平底杯Ⅰ	○	○				○	○
	平底杯Ⅱ	○	○				○	○
	平底杯Ⅲ	○	○				○	○
杯蓋	杯蓋Ⅰ	○	○				○	○
	杯蓋Ⅱ	○	○				○	○
	杯蓋Ⅲ	○	○				○	○
椀	椀Ⅰ	○	○				○	○
	椀Ⅱ	○	○				○	○
	椀Ⅲ	○	○				○	○
皿	皿Ⅰ		○		○	○	○	○
	皿Ⅱ		○			○	○	○
高杯		○	○				○	○

第22表　杯・杯蓋・椀・皿・高杯製作技法一覧

デであり、他の杯類の調整とは異なる。この他の杯類の製作技法が、ロクロケズリ・ロクロナデで統一されることからも、こうした差異を強調できる。器種分類で、形態的にも地域的特徴をもつと指摘したとおり、製作技法の面でも追認できると考える。

皿Ⅰは、把手の調整にケズリとナデ・ユビオサエがある。51は、全体をケズリで成形し、把手の端部に面を持たすなど、比較的丁寧な調整である。43は、全体をナデで成形し、端部に面はみられない。こうした差異は、時期や生産地に求めることができるが、他の遺跡での事例と検証する課題がある。

この他の器種は、製作技法の差異は確認できなかった。

（5）胎土・焼成

胎土・焼成の観察の所見から4つに大別する。A・B類が多くを占めており、C・D類は少数である。

①分類

A類

灰色系の色調で、焼成は良好からやや甘いものを含む。胎土には1～3㎜程の黒色粒を全体に含む。

B類

灰色系の色調で、焼成は良好からやや甘いものを含む。胎土には1～3㎜程の礫を全体に含む。

C類

暗灰色系の色調で、焼成は良好。胎土は精緻で礫などは少ない。

D類

明るい灰白色系の色調で、焼成はやや甘い。胎土は精緻で、墨流し風の白色土の流文がみられる。猿投産須恵器の特徴として指摘される[11]。

②胎土・焼成の傾向

第23表で5号墳における焼成・胎土の傾向を奥壁グループ、入口グループで示した。奥壁グループの構成はB類が主体となり、A・C・D類が少数含まれる。入口グループの構成は、A類が主体となり、B類が少数、C・D類は確認できない。

両グループを比較すると、主体となる胎土・焼成に一定の傾向を見いだせることは評価できる。生産地や時期差を示唆するものだろう。

ただし、A・B類の特徴は各地の須恵器窯出土資料でも確認でき、この特徴のみで一概に地域を限定することは困難である。また、同一生産地でも粘土採掘地などの違いも要因となることが考えられる。

5号墳の周辺には徳居窯跡群があり、これらの製品の分析をもって再評価することが望ましい[12]。

C類は、5号墳SX30の椀Ⅲ（40）、高杯（41）が該当する。2点とも薄く自然釉がかかり、器面に光沢がある特徴を持つ。これらは、A・B類と産地の違いを示唆する可能性がある。第24表では、5号墳周溝SX29、SX25、SK34、SK52の製品に確認できる。

D類は、5号墳SX30の杯蓋Ⅱ（30）のみ該当し、猿投産の須恵器と考えられる。

5号墳の周辺は、徳居窯跡群の製品が流通する地域である。その中でも、他地域の製品が流通する状況は、地域間での生産技術や情報の交流を示すものと考える。

これまで、畿内の大規模な須恵器生産地である陶邑窯跡群の製品が、地方へ広く流通する事例があることから、中央政権と地方との影響関係が注目されてきた。こうした事例とともに、地方間の影響関係や製品流通を検討することが課題となる。SX30出土資料は、これらを考察するうえで重要な事例といえよう。

（6）西毛谷北5号墳須恵器の年代

5号墳の奥壁グループと入口グループの須恵器を器種分類ごとに、遺物の年代や時期差の有無を検討する。第25表では、杯・杯蓋・椀・高杯の口径計測値の傾向を示した。

①杯・杯蓋

両グループで共通する器種の平底杯Ⅱを分析する。奥壁グループは、38が口径14.8㎝・高さ4.9㎝、39が口径14.9㎝・高さ5.3㎝で、法量も近似する。高い高台が付き、口縁端部は強いロクロナデにより、やや外反する特徴がある。

入口グループは、19が口径13.9㎝・高さ3.9㎝、20が口径13.4㎝・高さ4.4㎝で、奥壁グループに対して口径・器高が小さい。口縁部は直線的に外側へ開く形状だが、奥壁グループにみられる口縁端部が

器種		SX30入口グループ 胎土分類				SX30奥壁グループ 胎土分類			
		A類	B類	C類	D類	A類	B類	C類	D類
杯	丸底杯Ⅰ								
	丸底杯Ⅱ	18							
	丸底杯Ⅲ								
	平底杯Ⅰ						35、36		
	平底杯Ⅱ	19、20					38、39		
	平底杯Ⅲ								
杯蓋	杯蓋Ⅰ								
	杯蓋Ⅱ								30
	杯蓋Ⅲ					31	32～34		
椀	椀Ⅰ						37		
	椀Ⅱ	21							
	椀Ⅲ							40	
皿	皿Ⅰ						43		
	皿Ⅱ		29						
高杯		23、24	22				42	41	
長頸壺	長頸壺Ⅰ	26							
	長頸壺Ⅱ	27							
	長頸壺Ⅲ		28						
平瓶	平瓶Ⅰ								
	平瓶Ⅱ	25							

※数字は遺物番号を示す

第23表　胎土分類一覧①

遺構	胎土分類			
	A類	B類	C類	D類
5号墳周溝　SX29		15、17	14、16	
SX25	11、13		12	
SX33	49	47？、48？		
4号墳周溝　SX47		51		
SX49	54～58	53		
SX55	59	60		
SD54		61、62		
SK34			63	
SK52			64、65	
SK53	67	66		
A－K7　Pit7	68			

※数字は遺物番号を示す

第24表　胎土分類一覧②

外反する特徴はみられない。

杯蓋は、奥壁グループのみで確認できる。猿投産の杯蓋Ⅱ（30）を除けば、杯蓋Ⅲが主体となる。

杯蓋Ⅲは、口径と口縁部の返しの形状から大きく2つに区分できる。31は口径が10.9cmと比較的小さく、口縁部の返しが鋭い。32～34は口径が14.5～16.3cmと比較的大きく、口縁部の返しは内向きに屈曲し、断面が三画形に近い形態である。

両グループは、平底杯Ⅱ（杯B）やロ縁部に返しのない杯蓋Ⅲ（杯B蓋）を構成の主体とすることから、都城編年の飛鳥Ⅳ～飛鳥Ⅴ（7世紀後半）の時期と捉えたい。

グループ間で、平底杯Ⅱには口径や高台の高さに差異がみられるが、この要素のみで積極的に時期差を認めることは避けたい。そのため、他器種の状況を整理したうえで、総合的に評価する。

②椀

奥壁グループでは、椀Ⅰと椀Ⅲがある。椀Ⅰ（37）は口径13.6cm・高さ5.9cm、椀Ⅲ（40）は口径13.6cm・高さ7.3cm（うち、杯部高6.2cm）で、口径に共通性がある。また、椀Ⅰ（37）と平底杯Ⅰ（36）は、体部から口縁部にかけ直線的に広がり、口縁端部に強いロクロナデを施す点で近似することから、同時期の可能性が高く、奥壁グループの時期的なまとまりが考えられる。

入口グループの椀Ⅱ（21）は、口径13.0cm・高さ9.7cm（うち、杯部高7.7cm）である。杯部の形態が椀Ⅰ（37）に類するが、底部と体部の境が明瞭である点や杯部に高さがある点で異なる。グループ内で、対比できる器種がないため、時期的なまとまりは不明である。

③高杯

奥壁グループは2点、入口グループは3点出土している。奥壁グループは、41が口径9.4cm・高さ7.0cm（うち、杯部高2.8cm）、42が口径10.0cm・高さ9.6cm（うち、杯部高3.5cm）である。口縁端部は強いロクロナデによって、やや外反する形態である。また、42の杯部と平底杯Ⅰ（36）は、形態と法量の共通性が高く、同時期のものと考える。

入口グループの高杯は、22が口径9.7cm・高さ6.7cm（うち、杯部高2.7cm）、23が口径11.8cm・高さ6.7cm（うち、杯部高2.6cm）、24が口径11.4cm・高さ7.0cm（うち、杯部高2.6cm）であり、法量の共通性が高い。口縁部は外側に直線的に開く特徴も一致する。

入口グループの高杯は、奥壁グループよりも口径が大きく、脚部の下位で外側に強く屈曲する形態となる。法量と形態の共通性から、22～24は同時期のものと位置づける。

グループ間の法量と形態の差は、時期差を示していると考えられる。後述するSK52では、より口径の小さい高杯（64）と、丸い体部の平瓶（65）が共伴しており、都城編年の飛鳥Ⅱ～Ⅲに位置づけられる。SX30の奥壁側の一群が、口径が小さいのに対して高さがある形態は、相対的に古い要素と考える。

④皿

皿Ⅰ（43）は口径26.6cm・高さ3.6cmである。奥壁側のみで出土しているため、同一遺構内での比較検討は難しい。そのため、近隣遺跡の出土例を参考にしたい。

西毛谷北古墳の採集資料のなかで、皿Ⅰが確認できる[13]。発掘調査の出土資料ではなく、資料的な問題があるものの参考として挙げたい。

資料の器種構成をみると杯蓋Ⅱ、平底杯Ⅰ・Ⅱ、丸底杯Ⅲ、高杯、鉢、平瓶、皿Ⅰがある。特に、口縁部に返しを伴う杯蓋Ⅱとそれに対応する平底杯Ⅰ・Ⅱが中心となることから、5号墳SX30よりも古い要素を持つと考えられる。皿Ⅰは口径23.1cm・高さ6.8cmで、5号墳よりも口径が小さく、深手の形態となる。

このほかには、津市埋蔵文化財センターが調査した西毛谷北1・2号墳のSD5出土資料がある[14]。古墳の周溝から杯蓋Ⅱと平底杯Ⅰが6セットと、皿Ⅰが共伴して出土した。皿Ⅰは5号墳よりも口径が小さく、深手の形態で、把手の成形にケズリを用いる。これらの要素は相対的に古いと位置づけることができる。

上記の事例をふまえると、5号墳SX30の口径が大きく、浅手の皿Ⅰは、杯蓋Ⅲを主体とする時期の資料と位置づけても矛盾はない。

遺構	器種＼口径	7.1～7.9cm	8.1～9.0cm	9.1～10.0cm	10.1～11.0cm	11.1～12.0cm	12.1～13.0cm	13.1～14.0cm	14.1～15.0cm	16.1～17.0cm
5号墳奥壁 SX30	平底杯Ⅰ		1	1						
	平底杯Ⅱ								2	
	杯蓋Ⅱ					1				
	杯蓋Ⅲ				1			1	1	1
	椀Ⅰ							1		
	椀Ⅲ							1		
	高杯			1		1				
5号墳入口 SX30	丸底杯Ⅱ					1				
	平底杯Ⅱ							2		
	椀Ⅱ						1			
	高杯			1		2				

5号墳周溝 SX29	杯蓋Ⅰ								1	
	丸底杯Ⅲ			1						
SX25	杯蓋Ⅱ			1	1				1	
SX49	杯蓋Ⅱ				1	1				
	杯蓋Ⅲ				1	1				
SX55	丸底杯Ⅱ				1	1				
SD54	丸底杯Ⅱ					1				
	平底杯Ⅲ				1					
SK52	高杯	1								
SK53	丸底杯Ⅱ				1					
A－K７ Pit1	椀Ⅰ								1	

第25表　杯・杯蓋・椀・高杯の口径

⑤平瓶

平瓶は入口グループで1点出土している。平瓶の変遷については、大林達夫や木村理恵の研究で整理されており、第58図で研究成果を引用した[103]。平瓶の出現時期は7世紀以降と指摘される。最も古いものは、飛鳥Ⅰ期中の川原寺下層ＳＤ367出土資料で、体部が丸い形態を呈する。その後、7世紀末の藤原京期以降には、体部が扁平で平底の形態へと変遷する。

5号墳ＳＸ30の平瓶25は、体部が扁平で、平底の形態である。第58図と比較すると、大きさや形態から、飛鳥Ⅳの雷丘東方遺跡ＳＤ110、飛鳥Ⅴの藤原宮内濠ＳＤ1400（第58図7・8）に類似する。陶邑窯の資料であるが、飛鳥Ⅳ～Ⅴに相当するＴＫ48号窯（第58図9）とも、特徴が一致する。ＳＸ30の平瓶は、飛鳥Ⅳ～Ⅴ（7世紀後半）に相当すると考える。ただし、都城編年では、時期が新しいほど小型化する傾向が見受けられることから、飛鳥Ⅴ寄りの時期と捉えたい。

⑥長頸壺

長頸壺は、入口グループで3点出土している。第59図より、都城での長頸壺の出土例から時期を検討する[104]。

藤原宮ＳＥ1105の長頸壺（第59図1）は、飛鳥Ⅴの資料である。口縁部は欠損するが、緩やかに外側に開く形態とみられる。肩部と体部は膨らみをもつため、境はやや不明瞭である。底部も膨らみをもち、体部との境が不明瞭である。高い高台が付き、5号墳ＳＸ30の資料よりも大型のものである。

藤原宮西方官衙ＳＥ1150の長頸壺（第59図2）は、飛鳥Ⅴの資料である。口縁部は欠損するが、緩やかに外側へ開く形態とみられる。頸部には2条の沈線が巡る。肩部は直線的であるが、体部は膨らみをもつ形態で、肩部と体部の境には1条の沈線が巡る。底部は膨らみをもつため、体部との境が不明瞭である。高台は外側に広がる。

下ツ道西側溝ＳＤ1900Ａの長頸壺（第59図3）は、平城Ⅰの資料である。口径10.7cm・高さ21.5cmである。頸部から口縁部にかけての開きが大きい。肩部と体部の境が明瞭で、肩部はやや膨らみをもつが、体部は直線的な形態。底部は平底のため、体部との境が明瞭である。高台は外側に広がる。

上記の資料と、5号墳の資料と比較する。長頸壺Ⅰ（26）は、口縁部の開きが大きく、肩部はやや膨らみをもつが、体部は直線的な形態となる。底部は平底で、体部との境が明瞭である。これは、下ツ道西側溝ＳＤ1900Ａ出土資料と特徴が近似する。

長頸壺Ⅱ（27）は、長頸壺Ⅰ（26）よりも肩部の膨らみが大きいものの、底部は平底で、体部との境が明瞭な形態である。下ツ道西側溝ＳＤ1900Ａ出土資料と特徴に近いと考える。

長頸壺Ⅲ（28）は、肩部と体部が直線的で、境界が明瞭な形態となる。底部は膨らみをもち、体部との境が不明瞭である。藤原宮西方官衙ＳＥ1150の長頸壺に近似する。

以上から、5号墳ＳＸ30の長頸壺は、飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ（7世紀後半～8世紀初頭）に相当すると位置付ける。

⑦5号墳ＳＸ30の埋葬時期

各器種の分析から、奥壁グループと入口グループには時期差があり、2度の埋葬行為が実施されたと考える。

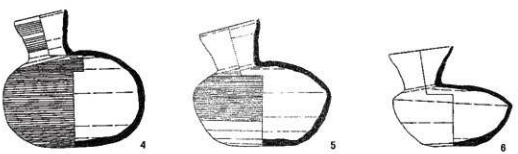
西毛谷Ａ遺跡ＳＫ52出土の高杯から、口径に対して器高が大きいものを古い要素と考える。奥壁グループの高杯は、入口グループよりも口径が小さく、器高が高いため、相対的に古い時期のものと位置付ける。

また、平底杯Ⅱや高杯の口縁部・高台の形態を比較すると、奥壁グループは強いロクロナデにより、口縁部がやや外反し、高い高台が付く特徴がある。これに対して、入口グループは、直線的な口縁部で、低い高台が付く。こうしたグループ間の差異も指摘できる。

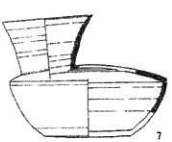
入口グループの平瓶や長頸壺は、肩部や体部の膨らみが小さく、直線的な形態であることから、飛鳥・藤原編年のなかでも、比較的新しい時期に位置づけられると考える。

以上から、入口グループは飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ（7世紀後半～8世紀初頭）に相当すると判断する。奥壁グループは、入口グループとの明確な型式差を示す

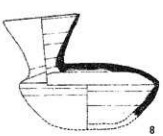
水落遺跡基壇周辺（飛鳥Ⅱ）（1～3）



石神遺跡SE800（飛鳥Ⅲ）（4～6）

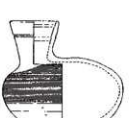


雷丘東方遺跡SD110（飛鳥Ⅳ）

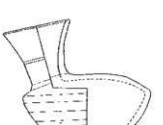


藤原宮内濠SD1400（飛鳥Ⅴ）

陶邑窯　TK48号窯（TK48型式・飛鳥Ⅳ～Ⅴ）

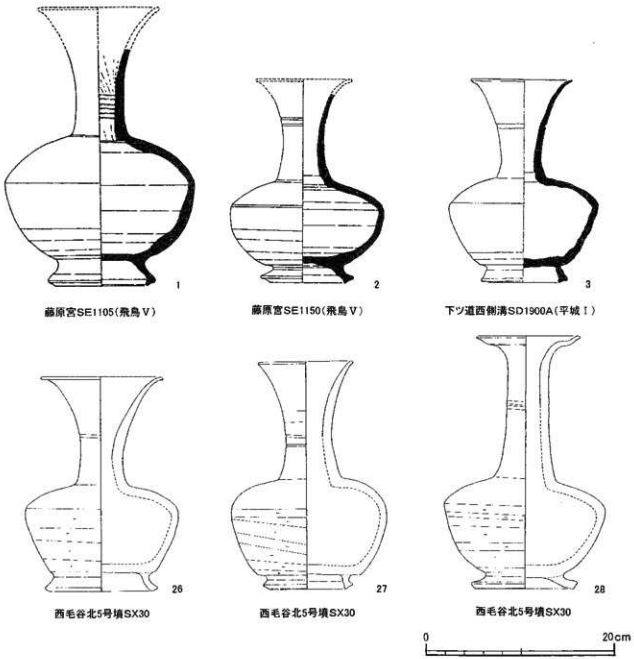


西毛谷A遺跡SK52



西毛谷北5号墳SX30

第58図　平瓶の比較（1：4）



第59図　長頸壺の比較（1：4）

ことは難しいが、古い要素をもつ一群があるため、飛鳥Ⅳ～Ⅴに相当すると判断する。

実年代にすれば、飛鳥Ⅳが670年代後半～藤原京遷都まで、飛鳥Ⅴが藤原宮期（694～710年）である。５号墳ＳＸ30の埋葬行為は、数年～十数年程度の比較的短期間で、２度実施されたと捉えたい。

（７）周辺遺構の時期

５号墳ＳＸ30と周辺遺構の時期を対比することで、古墳群の形成時期を検討する（第21表）。

①墓

ＳＸ25

杯蓋Ⅱ（11～13）で構成され、口縁部の返しは、相対的によく残る。口縁端部は丸く、鈍い形態である。ＳＸ30よりも古く位置づけられ、７世紀後半（飛鳥Ⅲ～Ⅳ）のものと考える。

５号墳周溝ＳＸ29

杯蓋Ⅰ（14）は、天井部に丁寧なロクロケズリが施されており、焼成は硬質な仕上がりである。甕（16）は、穿孔部が注ぎ口状に突出しておらず、古い要素を残す。これらは古墳時代後期のもので、混入資料であろう。

丸底杯Ⅲ（15）は、５号墳ＳＸ30の築造時期に近い可能性がある。ＳＸ30では、丸底杯Ⅱが出土しており、７世紀後半～８世紀初頭（飛鳥Ⅳ～Ⅴ）まで丸底形態の杯が残存することが分かる。丸底杯ⅡとⅢは、底部外面にヘラ切り後ナデを施しており、製作技法の共通性が強いといえ、同時期の製品であろう。

長胴棺ＳＸ33

甕（47・48）は、口縁部外面の直下に１条の突線が巡り、突線下に波状文が描かれる。これはＳＸ49の甕（53・54）と類似する特徴であり、近い時期の可能性がある。

長胴棺（50）とみられる資料は、形態が合致する例は不明である。土器棺の年代や地域的な広がりについて、中西常雄の研究成果が挙げられる[11]。近畿地方の５～８世紀の土器棺の形態や分布について述べるなかで、長胴で蓋受けの鍔を伴う、「有蓋長胴棺」について整理し、７世紀中頃～後半の墳墓で出土することを指摘する。

ＳＸ33出土資料は、体部上位に鍔の痕跡とみられる帯状の剥離痕が観察できる。体部中位には突帯が巡るが、こうした類例は確認できない。焼成は軟質であるが、調整は外面が平行タタキ、内面が同心円文当て具が施されており、須恵器の製作技術を用いている。仮に有蓋長胴棺であれば、５号墳と近い７世紀後半～８世紀初頭のものであろう。

４号墳周溝ＳＸ47

皿Ⅰ（51）があり、口径25.0㎝・高さ3.8㎝以上である。ＳＸ30の皿Ⅰ（43）より、口径がやや小さく、深手の形態となり、把手の成形もケズリを用いる。ＳＸ30よりも古い要素と考えられるが、７世紀後半の範疇と考える。

３号墳周溝ＳＸ48

土師器の杯か椀（52）とみられる。残存状況も悪く時期は不明である。

土器棺ＳＸ49

甕（53・54）と杯蓋Ⅱ（55・56）、杯蓋Ⅲ（57・58）がある。杯蓋Ⅱ・Ⅲは、甕（54）が焼成時に体部下位が陥没し、転倒した際に融着した資料で、同時期に窯内で焼成されたと考えられる。

杯蓋Ⅱは、口縁部の返しが形骸化していることから、杯蓋Ⅲが主体となる時期と考えられる。都城編年の７世紀後半～８世紀初頭（飛鳥Ⅳ～Ⅴ）のものと考える。

ＳＸ55

丸底杯Ⅱ（59・60）がある。59は、ＳＸ30の丸底杯Ⅱ（18）と口径の法量が近似しており、形態も類似する。７世紀後半～８世紀初頭（飛鳥Ⅳ～Ⅴ）のものと考える。

②溝

ＳＤ54

丸底杯Ⅱ（61）と平底杯Ⅲ（62）がある。丸底杯は口径11.2㎝・高さ3.5㎝で、ＳＸ30丸底杯（18）やＳＸ55丸底杯（59）と口径の法量が近似する。ただし、口縁部を強いロクロナデで成形して、やや外側に開く点が異なる。ＳＸ30よりもやや古い時期の可能性もあるが、７世紀後半～８世紀初頭の範疇のものであろう。

平底杯Ⅲは、本調査で出土したのが、この資料の

みである。今後、時期の検討が必要である。

③土坑

SK34

壺（63）の口縁部とみられる資料である。７世紀代のものか。

SK52

高杯（64）と平瓶（65）がある。高杯は口径7.9cm・高さ6.9cm（うち、杯部高2.7cm）である。SX30の高杯と比較すると、口径と器高が小さい。杯部の形態は、底部にやや丸みをもち、完全に平底形態に変化していない。脚部中位には、沈線が２条巡る。SX30よりも古い要素をもつ資料と考える。

平瓶は丸い形態の体部で、体部上位にはカキメを施す。この特徴から、７世紀中頃～後半（飛鳥Ⅱ～Ⅲ）ものと考える。

SK53

丸底杯Ⅱ（66）と高杯（67）がある。丸底杯Ⅱは口径10.2cm・高さ3.5cmで、SX30の丸底杯Ⅱ（18）よりも小型の形態である。

高杯は口径9.8cm・高さ7.3cm（うち、杯部高3.1cm）で、SX30の高杯（22）よりも、やや大型になるが、口縁部が外側に直線的に開く形態は一致する。SX30の入ログループと同時期で、７世紀後半～８世紀初頭（飛鳥Ⅴ）のものと考える。

④Pit

A－K７ Pit1

椀Ⅰ（68）は、口径14.2cm・高さ6.5cmと、SX30の椀Ⅰ（37）よりも大型となる。口縁部上位で、やや外側に開く形態である。７世紀後半（飛鳥Ⅳ～Ⅴ）のものと考える。

（8）小結

出土遺物の検討から、西毛谷北４・５号墳の時期は７世紀後半～８世紀初頭に位置づけられる。西毛谷北３号墳SX48や西毛谷北６号墳SX28は、時期を特定できる遺物がないため、詳細は不明である。ただし、西毛谷北３号墳は近接して７世紀後半～８世紀初頭の土器棺SX49があり、同時期の可能性が高い。

土器棺は、古墳（周溝を含む）に埋置される例と古墳群内およびその周辺に埋置される例が指摘される[19]。後者には、周溝の切れ目に接して埋置する例や古墳の近くに埋納される例がある。これらは、古墳との年代差は少なく、従属的な位置にあることが指摘される。

上記のことから、少なくとも西毛谷北３～５号墳は７世紀後半～８世紀初頭を中心とした古墳群と評価できる。周辺遺構は、７世紀中頃の遺物を含むが、古墳群造営時期は、７世紀後半～８世紀初頭が中心と考える。

この他に、西毛谷北古墳群の副葬品は、須恵器が中心であり、土師器が欠落している点が特筆される。これらは、徳居窯跡群が近接する影響が大きいことが想定できる。

その中でも、５号墳の副葬品の特徴は、器種が多様で、点数も多いことである。第26表に鈴鹿市内の７世紀の古墳と副葬品をまとめた[18]。埋葬施設の副葬品は須恵器の杯類が主体であり、この他は、寺谷11号墳と稲荷山古墳で平瓶が確認できる程である。５号墳が他の古墳よりも後出することや時代背景の検討が必要となるものの、器種の多様性と数量からみれば、これらの古墳の被葬者よりも上位の階層であり、徳居窯跡群における須恵器生産に関連性も強いと評価できよう。

３　須恵器からみた地域性

（1）須恵器窯・集落・古墳の広がり

河芸丘陵の北側にあたる中ノ川流域では、特異な器種、形態の須恵器が多く分布する。これは、以前から多くの研究者によって指摘されている[20]。

しかし、こうした器種がいつ、どのような影響下で出現したのか課題が残る。具体的には、特異な器種の出現が、他地域からの外来的な影響であるのか、須恵器生産地における地域的特色の発達より出現したのか、大きく２つの要因が想定できる。こうした関係性を整理することで、地域像を明らかにし、５号墳SX30の被葬者像を検討する一助としたい。

分析は、６～７世紀を中心に須恵器窯、集落、古墳の資料を対象とする。西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳の所在する地形は、東側の台地と西側の丘陵に分

第60図　徳居窯跡群周辺の遺跡分布図（1:50,000）

かれる。前者は「郡山台地」、後者を「河芸丘陵」と区別して用いる（第60図）。

① 須恵器窯

徳居窯跡群の変遷を整理する[121]。第60図から窯跡の広がりは、東側の郡山台地と西側の河芸丘陵で分布の特徴がわかる。

郡山台地には、小谷が形成され、これらの谷筋に沿って窯跡が分布する。窯跡は、集落や古墳の分布域と重複する特徴がある。

河芸丘陵は、田中川の氾濫原とする主谷（以下、田中川主谷という）と、そこから派生する支谷を中心に窯跡が分布する。窯跡は、集落の分布域から離れるが、古墳の分布域とは一部重複する。

第27表で窯跡の変遷をみると、郡山台地の窯跡が、河芸丘陵よりも古い傾向にある[122]。さらに、河芸丘陵の窯跡は、田中川主谷の入口側により古いものが分布し、奥側が新しい時期のものが分布する傾向にある。これは、郡山台地に展開する集落遺跡や、周辺の古墳群の展開と関連が強いことが予想される。

② 集落

伊勢地域の古墳時代から飛鳥時代の集落について、川部浩司の研究成果が挙げられる[123]。伊勢地域の５世紀後半～８世紀初頭の集落構造を分析する中で、河芸丘陵周辺の集落遺跡の広がりを捉えている（第60図）。

第28表では、上記の研究成果から集落遺跡の変遷

遺跡名	所在地	時期	墳丘・周溝	埋葬施設	土師器	須恵器	埋葬施設出土	周溝出土
西毛谷４号墳	津市河芸町	７世紀後半	方形	—	0	1		蓋
西毛谷５号墳	津市河芸町	７世紀後半	方形	横穴式木室	0	26	杯、杯蓋、椀、蓋、高杯、長頸壺、平瓶、耳環	
寺谷11号墳	鈴鹿市郡山	７世紀中頃	方形？	木棺直葬	0	14	杯、杯蓋、平瓶	
稲荷山古墳	鈴鹿市石薬師町	７世紀後半	方墳	木棺直葬	0	3	杯、杯蓋、平瓶	
北野古墳	鈴鹿市加佐登町	初葬７世紀前半 追葬７世紀中頃	方墳	横穴式石室	4	4	須恵器：杯、杯蓋、土師器：皿、無文銀銭	
神ノ坂古墳　ＳＸ０２	鈴鹿市国分町	７世紀前半	—	土壙墓	0	3		杯、杯蓋、高杯

第26表　古墳の埋葬施設と副葬品

後生氏 時期区分	Ⅰ期	Ⅱ期		Ⅲ期		Ⅳ期
	後期	前期	後期	前期	後期	
陶邑編年	ＴＫ47	ＭＴ15～ＴＫ10	ＭＴ85～ＴＫ209	ＴＫ217～ＴＫ46	ＴＫ48	ＭＴ21～
窯跡名		徳居１号	徳居36号 徳居34号 徳居31号 徳居７号	徳居９号 徳居32号 徳居19号 徳居12号	徳居13号↑ 徳居10号 徳居30号 徳居18号 （徳居35号）	徳居38号 （徳居21号）

※「↑」は、時期のずれる可能性があるもの

第27表　徳居窯跡群の変遷

を整理した。まず、集落遺跡の立地は、郡山台地上に展開することがわかる。これらの集落遺跡は、6世紀後半に増加し、集落域の広がりを確認できる。具体的には、西高山A遺跡、末野A・B遺跡、西川・郡山野・郡山遺跡は、6世紀後半～8世紀初頃までの継続的な集落である。

集落形成の契機として、徳居窯跡群における須恵器生産との関連が考えられる。窯跡群と集落が展開する時期が符合し、集落に隣接する位置に窯跡が築かれる例（西高山A遺跡と徳居31・32号窯）[124]もある。西高山A～C遺跡や末野A～C遺跡では、焼き歪みや窯壁が付着した須恵器も出土しており、集落内で製品の選別作業が行なわれたと考えられる[125]。

この他には、千里ヶ丘遺跡において、7世紀の土坑内から粘土が充填された状態が確認されており、土器製作用粘土の可能性が指摘される[126]。

さらに、周辺地形の環境をみると、沿岸部には砂堆列があり、内陸側にはラグーン（奄芸潟）が復元される（27）。ラグーンは郡山台地、田中川主谷と面しており、須恵器の運搬をするうえでも、好条件の立地環境と評価できる。

以上のように、総合的にみても、郡山台地の集落遺跡は、須恵器生産に関連遺跡と評価できる。次に、須恵器生産や集落形成に関わる集団の墓域について整理する。

③　古墳

第60図では、6～7世紀の主な古墳を示した[126]。分布の状況は、郡山台地に古墳群が多いことがわかる。特に5・6世紀から継続的に形成される古墳群は、集落域の隣接地に位置する傾向がある。

7世紀中頃～8世紀初頭の西毛谷北古墳群や西毛谷南古墳群、西毛谷A遺跡は、郡山台地と河芸丘陵の境界に立地する。同時期とみられる、七ヶ谷東古墳は河芸丘陵上に位置しており、この時期を中心にとする墓域は、集落域から離れた河芸丘陵側に築かれる傾向にある。

郡山台地では6世紀後半以降に集落域が広がる。同様に河芸丘陵においても、窯跡の生産域が田中川主谷の奥側へ移行し、窯跡数も増加する傾向にある。6世紀後半には、集落と須恵器生産の拡大を契機として、墓域が再編成される画期があったと考えたい。

以下に、郡山台地・河芸丘陵に位置する古墳の概要を示す。

茶臼山古墳群

古墳群は25基の円墳からなり、古墳群の詳細は不明であるが、時期は6世紀前半～7世紀前半とみられる。

末野古墳

径13m程の円墳で、墳頂部から埋葬施設とみられる土坑を2基検出したが、構造は不明である。周溝から7世紀後半の須恵器杯・長頸壺、須恵質の家形陶棺蓋が出土している。

野辺坂古墳群

須恵質の家形陶棺が採集されている（第61図）[129]。棺身の破片資料で、身端部には蓋受けはなく、筒状の脚が伴う形態である。

寺谷古墳群

古墳群は、5世紀後半～6世紀前半の円墳3基、造出付き方墳1基、方墳16基がある。7世紀中頃の

遺跡名／型式・時期	MT15	TK10	TK43	TK209	飛鳥Ⅰ	飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ	飛鳥Ⅴ
	6c前		6c後	6c末	7c前	7c中	7c後	7c末～8c初	
西高山A遺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■
西高山B遺跡	■	■	□	□	■	■	■	■	■
西高山C遺跡	□	□	□	□	■	■	■	■	■
西高山D遺跡	□	□	□	□	□	□	■	■	■
末野A遺跡	□	□	□	■	■	■	■	■	■
末野B遺跡	□	□	■	■	■	■	■	■	■
西川・郡山野・郡山野田遺跡	□	□	□	■	■	■	■	■	■
千里ヶ丘遺跡	□	□	□	■	■	■	■	□	□
塚腰遺跡	□	□	□	□	□	□	■	■	■

第28表　6～7世紀の集落変遷

11号墳は木棺直葬である。この他に、須恵器甕の土器棺が５基検出されている[130]。

郡山大野古墳群

古墳群は46基からなり、多くが径10m程の円墳である。このほかに、径30mの円墳１基、９m四方の方墳がある。時期は６世紀以降とされる。

西毛谷北古墳

調査事例は、本書で報告した西毛谷北３～６号墳のほか、津市文化財センター調査の西毛谷北１・２号墳がある。この他には、採集資料の須恵質の家形陶棺（蓋・身）が特筆される（第61図）。７世紀中頃～８世紀初頭を中心とした古墳群と考える。

西毛谷南古墳

採集資料に、須恵器の有蓋長胴棺があり、棺蓋と棺身がそろう（第61図）。形態や製作技法は須恵器大甕に類する。

七ヶ谷東古墳

方筒状土製品が４基と破片資料が採集される（第61図）。墓室の壁面を構成するものと位置づけられる。陶邑窯跡群の位置する泉北丘陵の野々井25号墳で、類似した器種が出土する。

（２）特異な埋葬形態の広がりと出現時期

第22表で、特異な埋葬形態である陶棺、土器棺、有蓋長胴棺、方筒状土製品の分布と、出土事例から時期を整理する[131]。

①　陶棺

須恵器窯では、徳居33・34号窯から、須恵質の家形陶棺が出土している。破片資料のため、詳細は不明であるが、野辺坂古墳群や西毛谷北古墳出土の棺身と同形態で、棺底部に筒状の脚を伴う。

古墳では、末野古墳、野辺坂古墳群、西毛谷北古墳の３箇所で確認できる。末野古墳は、須恵質の家形陶棺（蓋）とみられるが、破片資料のため詳細は不明である。

野辺坂古墳群は須恵質の家形陶棺（棺身）、西毛谷北古墳は須恵質の家形陶棺（棺蓋・身）がある。共に、棺底部に筒状の脚を伴うが、棺身の上端部形態が異なる。西毛谷北古墳は身上端部に蓋受けの鍔を伴うが、野辺坂古墳群は蓋受けがない。

陶棺が出土する窯跡は、ＴＫ209型式以前では須恵器窯で生産されるが、ＴＫ217型式以降では、円面硯や鴟尾、瓦などの専業化されていく製品と共に生産される特徴がある。徳居窯跡群の特徴は前者にあたり、生産が拡大するＴＫ209型式（６世紀末）を中心としたものであろう。

②土器棺

西毛谷Ａ遺跡ＳＸ49と、寺谷古墳群が挙げられる。西毛谷Ａ遺跡ＳＸ49は、須恵器大甕２基からなる棺で、口縁部を向い合わせに埋置したものである。時期は７世紀後半～８世紀初頭と考えられる。

寺谷古墳群では５基の土器棺があり、出土状況の詳細は不明だが、須恵器大甕が隣り合うように円形に密集している。その内、１基の甕内からは耳環が出土しており、棺としての利用を推定できる。寺谷古墳群は、５世紀後半～６世紀前半と７世紀中頃の造墓時期があり、どちらかに属するものであろう。

③　有蓋長胴棺

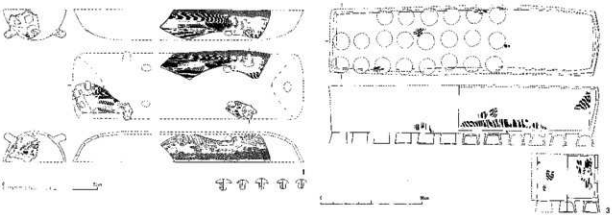
西毛谷Ａ遺跡ＳＸ33と西毛谷南古墳がある。西毛谷Ａ遺跡ＳＸ33は、全体の形態が不明であり、蓋受けの鍔が伴うか確かではない。形態は長胴形になるとみられ、７世紀中頃～８世紀初頭にみられる長胴棺に類似する。

西毛谷北古墳の有蓋長胴棺は、近畿地方での類例は確認できない。しかし、７世紀中頃～８世紀初頭に有蓋長胴棺が広まる状況があることから、同時期のものと位置づける[132]。

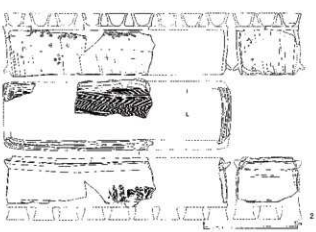
④　方筒状土製品

生産地では、徳居７・18・33・34号窯で確認できる。７号窯（金井場窯）の資料は、破片資料であるが方筒形をしており、七ヶ谷東古墳の資料と類似する。７号墳では、６世紀末～７世紀初頭の杯、高杯があり、同時期のものであろう。

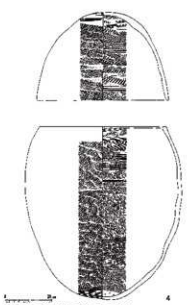
七ヶ谷東古墳は、土取りの際に発見されたものだが、立て並べたように出土している。４基の方筒状土製品は、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具が施され、須恵器の製作技法が確認できる。また、「吏三」や「乃二」のヘラ書きがあることは特筆される。



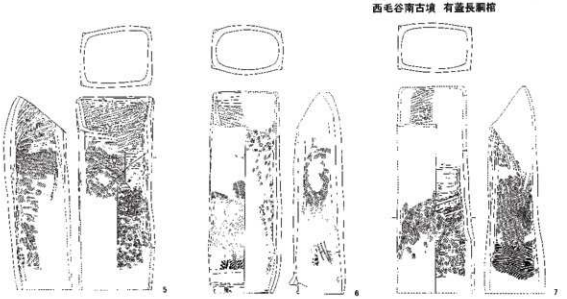
野辺坂古墳群　家形陶棺



西毛谷北古墳　家形陶棺（1・2）



西毛谷南古墳　有蓋長胴棺



七ヶ谷東古墳　方箇状土製品（5～7）

第61図　家形陶棺・有蓋長胴棺・方箇状土製品（1：20、3は1：30、4は1：16）

このほかに、亀山市北山古墳でも方筒状土製品が出土しており、墓室側壁の構築材として利用される。大阪府の陶邑窯跡群の周辺では、野々井25号墳でも同じ出土状況が確認される。時期は７世紀初頭とみられる。

こうした事例から、方筒状土製品は、６世紀末～７世紀初頭のものと考えられる。

（３）須恵器からみた地域的特質

特異な埋葬形態がみられる地域の特徴を整理する。須恵質家形陶棺の研究では、中村展子が陶棺を生産する窯跡の特徴をまとめている[33]。全国の窯跡を比較検討するなかで、ＴＫ209型式以前は須恵器窯で陶棺が生産され、ＴＫ217型式以降は円面硯や陶尾といった特殊品やのちに専業化する瓦とともに生産される特徴があることを指摘する。

陶棺生産は、陶邑窯跡群や千里窯跡群などの大規模生産地のほかに、単発的に生産する窯跡で行われる。まず、大規模生産地についてみると、陶棺は窯跡群周辺地域で、大量に埋葬される特徴がある。こうした状況から、陶棺の被葬者は須恵器生産者と想定される。

単発的な生産地では、地域への須恵器生産導入期の窯跡と、窯跡群における生産拡大期の窯跡で陶棺生産がおこなわれる。三重県内の事例では、前者が伊賀市御墓山２・４号窯跡、後者が徳居窯跡33・34号窯である。

こうした地域は、後の時期に中心的な遺跡群として発展することが指摘される。御墓山２・４号窯跡であれば、後に伊賀国府が設置される地域である。徳居窯跡群についても、７世紀以降に須恵器生産の拡大があり、周辺の集落は地域の中心的な存在として大きく発展する。このような状況から、陶棺の生産者は、畿内政権との政治的な結びつきが強く、より上位の階層という人物像が想定される。

同様に、土器棺、円筒棺・長胴棺についても、須恵器生産との関連性が指摘される[34]。近畿地域では５世紀中頃～６世紀前半にかけて須恵器の土器棺が出現する。陶邑窯跡群については、やや遅れて６世紀後半に集中する。その後、近畿地域や陶邑窯跡群では、７世紀中頃～８世紀初頭にかけて、須恵器の土器棺から円筒棺・長胴棺へと埋葬形態が移行する。特に、近畿地域では、円筒棺・長胴棺は須恵器窯跡が所在する地域でみられるため、須恵器生産との強い関連性が指摘される。

方筒状土製品は、陶邑窯跡群の野々井25号墳の事例からも、須恵器生産と強い関連性が考えられる。この他に、陶邑窯跡群に位置する原山４号墓では、

遺跡		陶棺	土器棺	長胴棺	方筒状土製品
生産地	徳居7号窯				○
	徳居18号窯				○
	徳居33・34号窯	○			○
古墳	末野古墳	○			
	野辺坂古墳群	○			
	寺谷古墳群		○		
	西毛谷北古墳	○			
	西毛谷南古墳			○	
	西毛谷Ａ遺跡（４次）　SX33			？	
	西毛谷Ａ遺跡（４次）　SX49		○		
	七ヶ谷東古墳				○

第29表　特異な埋葬形態一覧

有蓋長胴棺と円筒状土製品が埋葬施設から出土する。時期は７世紀末～８世紀初頭に位置づけられ、徳居窯跡群で特異な埋葬形態が展開する時期と重なる。

このように、上記の事例と西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳周辺に広がる特異な埋葬形態を対照すると、畿内政権の影響下で成立したものと考えることができる。特に、須恵質陶棺の生産地域が発展する事例と類似しており、河芸丘陵・郡山台地は７世紀初頭段階に手工業生産の拠点として発展し、それ以降は８世紀初頭まで地域開発が活発化する。

地域開発の事例として、郡山台地の集落遺跡は、６世紀末～７世紀初頭に集落が増加し、それ以降は８世紀初頭まで継続的に展開する。特に、末野Ｂ遺跡では、７世紀段階で大型掘立柱建物が、柱筋を揃えて配置され、地域拠点としての性格が推定できる。さらに、生産された製品を管理・選別・運搬といった、須恵器生産の拠点集落として評価ができる。

また、郡山台地は、古代の郡衙推定地とされ、郡山町の酒井神社周辺には土塁状の囲いがあることから、奄芸郡衙跡と推定地として挙げられることも特筆される。

郡山台地・河芸丘陵の遺跡群は、須恵器生産を中心とした手工業生産の先進地として成立し、特に６世紀末～８世紀初頭にかけて、地域拠点の機能を強めていったと評価したい。そうした中で、畿内の影響を強く受ける形で、特異な墓制が伝播したものと考えたい。特に、須恵器生産や墓制の面では、陶邑窯跡群とのつながりを指摘できる。さらに、５号墳出土の猿投産須恵器から、畿内だけではなく、東海地域の須恵器生産地との交流も存在することが確かである。このことから、地域間交流の中心地域と評価できよう。　　（小原）

【註】

（１）浅生卓司「徳居窯址群の須恵器生産」『Mie history』14　三重歴史文化研究会　2003

（２）鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅳ』2016

（３）①津市埋蔵文化財センター『徳居10号窯跡発掘調査現地説明会資料』　2014

②津市埋蔵文化財センター『まいぶん津』第31号　2015

（４）都城編年は、以下の文献を参考にする。

①西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』　奈良国立文化財研究所　1978

②小田裕樹「４　土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』　奈良文化財研究所　2014

③小田裕樹「飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状」『土器編年研究の現状と各時代の特質』　考古学研究会関西例会　2016

④神野恵「3-1-3　土器類」『平城宮発掘調査報告XVI　兵部省地区の調査』　奈良文化財研究所　2005

⑤神野恵・森川実「１．土器類」『図説　平城京辞典』　柊風社　2010

都城編年の歴年代は、下記の文献を参考にする。年代観は、飛鳥Ⅰが600年代～640年代、飛鳥Ⅱが640～660年代、飛鳥Ⅲが660年代後半～670年代、飛鳥Ⅳが670年代～藤原宮遷都、飛鳥Ⅴが藤原宮期（694～710）とする。平城Ⅰの年代観は、飛鳥Ⅴと並行する立場をとる。

⑥川越俊一「藤原京条坊年代考」『研究論集ＸＩ』　奈良文化財研究所　2000

⑦註４①前掲

⑧古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』1992

（５）第Ⅱ章３節を参照

（６）註４前掲

（７）小田裕樹「古代宮都とその周辺の土器様相-「律令的土器様式」の再検討-」『官衙・集落と土器２-宮都・官衙・集落と土器-』　奈良文化財研究所　2016

奈良盆地の高月遺跡では飛鳥Ⅲの土坑から、Ｈ蓋の逆位に近い形態の須恵器丸底杯と杯Ｂが出土している。こうした状況から、宮都で「律令的土器様式」が成立する飛鳥Ⅲ以降においても、奈良盆地の遺跡では丸底形態の須恵器が残存することを指摘する。本論では、西毛谷Ａ遺跡周辺でも同様な状況が想定できることから、「丸底杯Ⅱ」を設定した。

（８）鈴鹿市考古博物館『西川（第３次）・都山野・都山野田遺跡発掘調査報告書』　2009

報告で「杯Ｘ」とした形態に類する。鈴鹿市都山町中心に市内でも一定量出土すると指摘する。

（９）註８前掲

報告文で「杯Ｃ」とした形態に類するもので、土師器杯の模倣と指摘される。

(10) 完形の資料が少ないため、把手を伴うものが含まれることが想定されるが、本論では区分する立場をとる。

(11) 尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』　奈良文化財研究所　2016

5号墳出土の須恵器杯（№30）の産地については、尾野氏よりご教示いただいた。

(12) 津市埋蔵文化財センターのご厚意により、徳居10号窯の製品を実見する機会を得た。製品の胎土・焼成の特徴は、A・B類が主体という印象を受ける。

(13) 河芸町史編さん委員会『河芸町史』史料編上巻　2000

皿Ⅰは「把手付浅鉢」と報告される器種に該当する。この他の器種についても、本文の分類に従い表記した。

(14) 註3前掲

器種名は、本論の分類に従い表記した。

(15) 平瓶の変遷は下記の文献による。第58図の出典は、註15②。

①大林達夫「平瓶と長頸壺」『山口考古』第24号　山口考古学会　2004

②木村理恵「上寺山古墳出土土器小考」『上寺山古墳の研究』　上寺山古墳研究会　2015

(16) 第59図の出典は、註4⑧・15①前掲

(17) 中西常雄「近畿地方土器棺の基礎研究-5～8世紀-」『古文化談叢』第72集　九州古文化研究会　2014

(18) 註17前掲

(19) 以下の文献を参考にした。

①三重県『三重県史』資料編考古Ⅰ　2005

②鈴鹿市考古博物館『鈴鹿の古墳1-ちいさなちいさな古墳たち-』　2016

(20) 鈴鹿市考古博物館『中ノ川流域の考古学』　2012

(21) 註1前掲

(22) 第27表は、註1（第2表）を改変した。

(23) 川部浩司・渡辺和仁「伊勢・伊賀地域の古墳～飛鳥時代集落」『古墳時代から飛鳥時代へ-集落遺跡の分析からみた社会変化-』　古代学研究会　2017

(24) 註2前掲

(25) ①鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』　1983

②鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅱ』　2016

③鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅲ』　2016

(26) 註13前掲

(27) 穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」『考古学に学ぶⅡ』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　2005

(28) 以下の文献を参考にした。

註8・13・19①前掲及び、①鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第1巻　1980

②大阪府教育委員会『陶邑Ⅶ』　1990

(29) 第61図の出典は、註13前掲による。

(30) 鈴鹿市考古博物館の藤原秀樹氏、吉田真由美氏のご好意により、寺谷11号墳の調査図面・写真、出土資料を実見する機会を得られた。

(31) 第22表は下記の文献を参考とした。

註1・17・20前掲及び、①鈴鹿市考古博物館『三重のおかしな須恵器』　2002、②中村展子「生産からみた陶棺の変容とその背景」『洛北史学』第6号　2004、③津山郷土博物館『土の棺に眠る～美作の陶棺～』　2013

(32) 註17前掲

(33) 註31②前掲

(34) 註17前掲

C　まとめ

西毛谷A遺跡第3・4次調査を通じて、主だった遺構としては、飛鳥時代の墓8基、平安時代の墓1基、江戸時代の墓1基を確認した。このことから、調査区付近は時代を通して墓域として認識されていたようである。

中でも特に多く確認した飛鳥時代の墓について整理し、周辺遺跡の分布から当該地域の特色を提示し、墓との関連性を示すことで、まとめとする。

1　西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群

飛鳥時代の墓はいずれも丘陵頂部よりも南側、標高38～44mのやや緩やかな斜面で確認した。出土遺物から、7世紀後半から8世紀初頭に順次造られたと考えられる。墓の種類は、方墳4基（西毛谷北3～6号墳）、陶棺や須恵器を棺として転用した土器棺墓2基（SX33・49）、埋葬施設のみのもの2基（SX25・55）である。

方墳　方墳の周溝は相互に重複していない。他の方墳を壊さないように造墓したと推察される。4基（西毛谷北3～6号墳）のうち、2基は周溝のみ確認した。埋葬施設を確認したものは、木棺直葬の可能性が高いもの1基（6号墳）、横穴式木室1基（5号墳）である。基本的に出土遺物が僅少であるなか、横穴式木室を埋葬主体とする5号墳は須恵器が多く出土し、耳環も確認しているという点で、西毛谷北古墳群の中では突出している。

向きは、3・4・6号墳は不揃いに見えるが、それぞれの周溝は等高線に沿うように掘削しており、地形（傾斜の向き）に合わせているとみられる。ただし、5号墳だけが等高線の向きと揃わず、周溝が斜面に対して約45°振る。5号墳は、他の方墳よりも傾斜が緩い場所に立地していることに起因すると考えられる。

埋葬施設が横穴式木室であること、出土須恵器が多いこと、耳環も出土していること、丘陵の中でも好立地の比較的標高の高い緩斜面に築いていることなど、多くの点で、5号墳が西毛谷北古墳群の中でも優位であったことが窺える。

また、出土遺物を見る限りでは、西毛谷A遺跡（第2次）SD5[11]→4号墳→5号墳と辿ることができ、西から東へ造墓が進められたと推察される。

有蓋長胴棺・土器棺　SX33は須恵質で砲弾のような形状を呈した有蓋長胴棺を用いていた。土器棺墓SX49は須恵器甕（53・54）を棺に転用したと考えられるものである。53の甕胴部を打ち欠き、54の甕口縁部と合口にしていた。54は焼成時に転倒したとみられ、底部が大きく歪み、須恵器杯蓋片や窯壁片が融着していた。いずれも棺内からの出土遺物は確認できなかった。

土器棺墓SX49は3号墳の周溝に接している。土器棺墓SX33は、5号墳西周溝の丘陵裾部側に位置し、向きも西周溝と揃っている。このことから、SX49は3号墳、SX33は5号墳を意識して造ったと考えられる。

埋葬施設のみ確認した墓　方形の墓壙しか確認できなかったが、いずれも木棺直葬とみられる。SX25・55は、墓壙の長軸が等高線に沿っている。これは墓壙床面を平坦にするのに、より傾斜が少なく、効率的であったからと考えられる。また、SX25は須恵器杯蓋3点、SX55は須恵器杯2点と出土遺物点数は少ない。遺物はいずれも墓壙西側で確認した。

SX25は5号墳と6号墳の間に位置している。SX55は3号墳の西約6mに位置している。調査区西側に近接している西毛谷A遺跡（第2次）調査区でも古墳が確認されていることからSX55も古墳と古墳の間に造られたとみられ、木棺直葬墓は、古墳間に配置される傾向があったと推定される。

墓の構成について　西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群で確認した墓は、まず、重複しない程度に余裕もって方墳を造り、土器棺墓は古墳の配置を意識して造っている。さらには、余裕をもって築いた古墳の間に木棺直葬墓を配置するという傾向が読み取れる。占地における優先順位は、古墳→土器棺墓→埋葬施設のみ（木棺直葬墓）の順となり、そのまま西毛谷北古墳群内の階層を示すものと思われる。方墳の中でも立地や出土遺物の数量から、5号墳の被葬者が最も権力を保持していたといえよう。

2　西毛谷北5号墳の構造と埋葬状況について

5号墳は、東側に出入口を持つ横穴式木室を埋葬施設とし、火化された方墳である。横穴式木室の調

査事例は、今回を含め三重県内でも７例と少なく、西毛谷Ａ遺跡の所在する中ノ川と田中川に挟まれた郡山台地から河芸丘陵にかけての地域では初の調査事例となる。

また横穴式木室については集成資料や論考があるが、西毛谷北５号墳は出土遺物から７世紀後半代の築造と考えられ、横穴式木室が造られた時期の中では新しい段階のものと位置づけられる。

西毛谷北５号墳の横穴式木室は、床面から20～30㎝程度しか遺存していなかったが、調査で得られた情報から、その構造及び埋葬状況について整理しておく。

（１）　西毛谷北５号墳―横穴式木室―の構造

床面　柱穴１～４・８・10・11で囲まれた範囲がほぼ平坦であり、その外郭は布堀状になっている。しかし、柱穴４と11を結ぶラインから東は中央で１段下がり、中央部（柱穴７付近）の落ち込みと柱穴４の間は、主体部の短軸方向に沿って溝状の落ち込みが認められる。

床面の状況から、柱穴４と11を結ぶライン以西の床面が平坦な範囲は玄室に、以東の１段下がる箇所が羨道にあたる部分と考えられ、溝状の落ち込みが玄室と羨道を区切る何らかの施設の痕跡であったと考えられる。柱穴７付近の落ち込みは玄室と羨道の境になること、細かい炭化材が様々な向きで出土していたことから、火化の際に焚口とした箇所と推定される。

柱の並び　床面で確認した柱穴の配置から想定すると、柱穴２・３・８・10の１間×１間（梁行2.25m、桁行1.25m、向きN30° W）と柱穴４・５・11・13の１間×１間（梁行1.8m、桁行1.2m、向きN34° W）を0.9～１m程離して桁を繋げる形で組合せ、梁行１間×桁行３間の構造物になるとみられる。実際、検出段階で確認した向きの判る炭化材の多くは、主体部の長軸方向・短軸方向で揃い、梁材・桁材であった可能性が高い。

床面の状況も加味して、柱穴４・５・11・13で囲まれた範囲が羨道、柱穴１～４・11・10・８で囲まれた範囲（長さ：2.3m～2.9m、幅：入口付近で1.7m、奥壁付近で2.0m）が玄室にあたる部分と考えられる。

桁の向きは、木室北側では概ね揃うが、南側は柱穴８・10と柱穴10・11で向きが異なる。

また、柱穴12の掘形は北向きに約64° 傾いており、北側に隣接する柱穴11に据えた柱と組み合わせて、桁材を支える役割を果たしていたと考えられる。その場合、平面形態は、横穴式石室でいう片袖式というよりは、木室入口付近で徐々に狭くなるものであったと考えられる。なお、柱穴11・12に据えた柱で桁材を支えると仮定すると、木室内部（床面から桁材まで）の高さは1.2～1.3m程度と想定される。

側壁・奥壁　壁は、柱穴１・２・３・４を繋いだ線上（北側壁）、柱穴８・10・11を繋いだ線上（南側壁）、柱穴１・８を繋いだ線上（奥壁）で確認した。壁に用いた材は、木室内側のみ炭化して残存していた。遺存状況から、丸太材または半截材だったと推定される。材は、径12～15㎝程度である。南壁の出土状況から、壁材は若干内側に傾くが、合掌造のように大きく傾斜するものでなかった。

また、炭化材として遺存した壁材の一部について樹種同定をしたが、いずれもスギであることが判明した。どれも年輪が密に入っており、日照条件の悪い森林で生育したものという結果が得られている。周辺は徳居窯跡群が分布し、県下でも最大級の須恵器生産地であることから、窯の燃料材と同様の入手方法―おそらく付近に生育していた材を利用したもの―と推察される。

煙出し　木室内の床面から数㎝の厚さで炭が堆積していることから、木室内が燃焼していたことは確実である。玄室入口付近で焚口が想定されるため、煙出しがあるとするならば奥壁側に想定されるが、その構造は、今回の調査では不明である。

構築方法　床面の状況や柱の並び、壁材の傾斜の度合いから、西毛谷北５号墳の横穴式木室は、柱に梁材・桁材を架けた後、梁・桁に壁材を立てかけた構造であったと考えられる。

さらに、側壁確認以前、木室の北西側で一定量の焼土の堆積が認められた。これは、木室の外側にある土が火化により焼土となり、崩落したものと考えられる。このことから、木で部屋を造った後、土で覆っていたことが推察される。なお、この焼土は粘

土とは認識できない土で、スサ等の混入も認められなかった。

また、玄室に相当する箇所は床面に白色砂質土を2～3㎝敷き、整地していた。

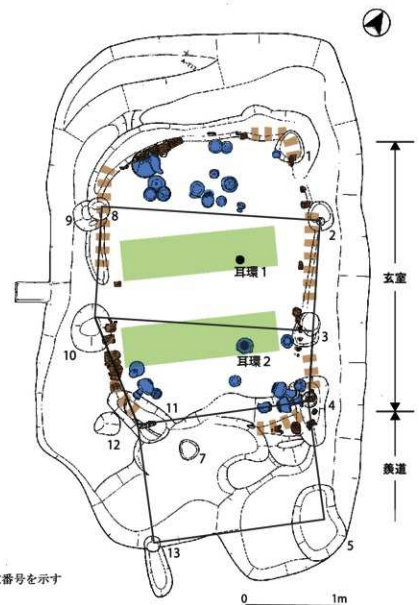
（2） 埋葬状況について

横穴式木室からは、須恵器26点、耳環3点が出土した。この出土量は、西毛谷北古墳群の中では圧倒的に多い。木室内は整地土の上に数㎝炭が堆積しており、火化されていたことがわかる。遺物の出土状況は、火化される直前の木室内の状況を示している。

須恵器の分布は、大きく奥壁側（西半）と入口側（東側）に分かれる。出土須恵器の時期は概ね7世紀後半から8世紀初頭に収まるが、奥壁側と入口側で器種構成や出土状況の違いがあり、第Ⅱ章6節bで報告の通り、奥壁側の須恵器群が入口側の須恵器群より若干古い可能性が指摘される。

奥壁側で出土した杯蓋33は、杯蓋31と杯38の下から、細片となっていた。33の出土状況は他の出土遺物の遺存状況と明らかに異なっており、おそらく葬送に伴い何らかの所作が行われたと推察される。

出土状況が判明している耳環のうち44は柱穴2・3・8・10で囲まれた範囲内で、46は柱穴3・4・10・11で囲まれた範囲内でそれぞれ確認した。須恵器の出土状況と併せてみると、46の上で須恵器杯19が浮いた状態で出土しているものの、須恵器が密集



第62図　横穴式木室内棺配置想定図（1：40）

していない箇所で耳環を確認している。44と46が約1m離れて出土していること、44と46で耳環の大きさや重さが異なること、出土状況が不明であるものの大きさや重さの点で45が44に類似することから44と45が対をなしていたと推察される。さらに人骨は確認できなかったが、須恵器の分布で奥壁側と入口側で若干の時期差があるとみられることから、木室内に2棺、いずれも頭部を北壁側に向けて第62図のように埋葬したと推定される。

棺については、木室内出土炭化材の樹種同定を実施したが、いずれも木室構築材と同じスギであることが判明し、棺材がスギの可能性はあるものの、特定には至らなかった。木室内から釘は出土しなかったため、釘を用いない組合せ式木棺であったか、あるいは布等でくるむなどした可能性も想定しておきたい。

3　地域の特性からみた被葬者像

西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群をとりまく郡山台地・河芸丘陵の一帯は、第Ⅱ章第1・6節で詳述のとおり、徳居窯跡群という須恵器一大生産地であり、当時の集落や墓のありかたは徳居窯跡群の須恵器生産体制との関連を考えざるを得ない。

徳居窯跡群は、6世紀後半から7世紀初頭の時期を契機に集中的かつ継続的な窯の操業が行われるようになる[3]。

当時の郡山地域周辺では、須恵器の焼成不良品や焼き歪み品が確認された西高山A・D遺跡や末野A遺跡、西川遺跡、粘土採掘坑が確認された千里ヶ丘遺跡などが確認されており、須恵器の生産・仕分け作業が行われていたことが判る。西高山C遺跡や末野A遺跡、大門遺跡では、フイゴの羽口や鉄滓が出土しており、鉄器の加工・生産に関わっていたと推察される。中でも、大型竪穴住居が確認された末野A遺跡は工人集団の生産活動を統率した有力者層の居住域のひとつと考えられている[3]。

これらの遺跡の様相から、郡山台地の遺跡群は、窯業生産や鉄器の加工といった当時としては最新の技術を要する製品の生産にあたって、新たに形成された集落である可能性が指摘されている[4]。

西毛谷A遺跡・西毛谷北古墳群は、これら窯業生産や鉄器の加工を基盤とした集落の墓域のひとつであったと考えられる。横穴式木室をはじめ、長胴棺・土器棺・木棺直葬墓と考えられるものなど多様な埋葬施設のありかたを示す。遺跡周辺の墓を改めて確認すると、出土状況が不明瞭なものが多いが、陶棺や長胴棺、土器棺、方筒状土製品が確認されるなど、埋葬施設の種類が多様であるのと共に埋葬施設への須恵器の利用が目立つ。須恵器の利用という点では、埋葬施設から出土する供献土器も、ほぼ須恵器で占めている。

西毛谷北5号墳の火化された木室は、6世紀後葉に開始する近畿地方発の第2の流れ[5]を汲むものと考えられる。また、埋葬施設の種類が多彩な様相は、大阪府陶邑窯跡群周辺の墓域[6]でも類似した傾向があり、特に横穴式木室や陶棺・長胴棺・方筒状土製品の出土からも、被葬者が主に須恵器生産に関わる工人集団との関連が高いといえよう。この地の本格的な須恵器生産にあたっては、近畿地方をはじめ他地域との影響下のもとで体制が整備されていったものと思われる。　　（原田）

【註】

（1）2014年に津市教育委員会により調査が行われた。

（2）米山浩之「県内最大の古窯跡群探訪」『河芸町史』本文編　河芸町史編さん委員会　2001

（3）①鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』1983
②鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅱ』2016
③鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅲ』2016
④鈴鹿市遺跡調査会『郡山遺跡発掘調査報告Ⅳ』2016
⑤千里ヶ丘遺跡発掘調査団『千里ヶ丘遺跡発掘調査報告書』1968

（4）穂積裕昌「集落概要」『三重県史』資料編考古1　三重県　2005

（5）小森哲也『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』2015

（6）例えば野々井遺跡や野々井南遺跡、椿尾塚原古墳群、原山墳墓群などが挙げられる。
①大阪府教育委員会『陶邑Ⅰ』1976
②大阪府教育委員会『陶邑Ⅱ』1977
③大阪府教育委員会『陶邑Ⅵ』1987

Ⅲ　小塚遺跡・石垣遺跡

1　位置と環境

a　地理的環境

鈴鹿市は三重県の北部に位置し、東は伊勢湾に臨み、西は鈴鹿山脈に達する。北は四日市市、南は亀山市・津市と接し、東西22.6km 、南北21.9km、総面積194.46km²である。

地形は山地・丘陵地・高位段丘・低中位段丘・谷底平野・三角州性扇状地・三角州・海岸平野に分けることができる。

とりわけ低中位段丘は、鈴鹿山脈に源を発して、市域を東流する鈴鹿川の下流域右岸で顕著に分布する。北は鈴鹿川の谷底平野に接しながら、東北端の神戸町・須賀町で沖積層下に没している。中央は広く平坦な道伯台地で、道伯町から玉垣町を経て独立丘陵である岸岡山に連なる。南は野村町から稲生町へかけて広がり、その先端は沖積層下へ没している。この段丘の表面は大部分が褐色ないし黄褐色の風化土壌が覆い、さらに下層は礫層となっている。

小塚遺跡の所在する北玉垣町は、この低中位段丘から少し外れ、その直ぐ北に広がる沖積層に属する。北部には鈴鹿川から取水した金沢川が流れ、水田を潤し千代崎で伊勢湾に注ぐ。標高は矢橋、肥田、柳等とともに10m以下の地域である。

一方、北玉垣町の南西部、石垣遺跡が所在する末広北１丁目は低中位段丘上であり、しかも主要な河川がないため、石垣池をはじめとするため池が分布する。

末広町の遺跡周辺の標高は約20mで、そこから東に緩やかに傾斜して国道23号線で10m前後となっている。

b　歴史的環境（第１・２図）

小塚遺跡（１）の周囲には、比較的遺跡が多く点在しており、時代も様々である。

ほ場整備事業に伴って発掘調査された起Ａ遺跡（２）からは、縄文時代中期の土坑１基が確認され、縄文土器片が一括廃棄された状態で見つかっている。

起Ａ遺跡は、弥生時代中期に盛行していた遺跡で、竪穴住居11棟、掘立柱建物１棟が確認されている。他の弥生時代の遺跡としては、北ノ添遺跡（６）で、竪穴住居３棟が、金沢川下流域の深田遺跡（７）で、後期の竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟が確認されている。同河川の河口部付近に所在する双ッ塚遺跡（10）では、後期末から古墳時代前期の竪穴住居４棟、井戸１基が、天王遺跡（12）では、後期から古墳時代後期にかけて機能していた大溝が確認されている。

古墳時代においては、まず、金沢川右岸の水田の中に６基ほど存在していた塚越古墳群があげられる。うち、塚越１号墳からは、玉類のほか、画文帯神獣鏡や捩形文鏡が出土した。しかし、開発等によりほとんど消滅し、現在は塚越２号墳（11）が残存するのみである。他には、起Ａ遺跡から後期の円墳跡１基・土壙墓３基が、北ノ添遺跡から古墳に伴う周溝３条、土壙墓13基が、深田遺跡で円筒埴輪片の出土が確認されている。集落遺跡としては、起Ａ遺跡で竪穴住居１棟が確認されている。

古代に入ると、起Ａ遺跡で、奈良時代の掘立柱建物１棟が、深田遺跡で奈良時代の掘立柱建物・柵列が、双ッ塚遺跡で平安時代の掘立柱建物９棟が、北ノ添遺跡で平安時代末期の土坑３基と溝２条が確認されている。前述の天王遺跡で見つかった大溝の内側では、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物群が、規則的に配置された痕跡から、役所のような施設の存在が窺われる。また、天王屋敷遺跡（13）からは、白鳳期に遡るとみられる軒瓦（八葉素弁蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒平瓦）が出土している。

中世以降は少なく、双ッ塚遺跡で鎌倉時代の井戸６基が確認されているのみである。

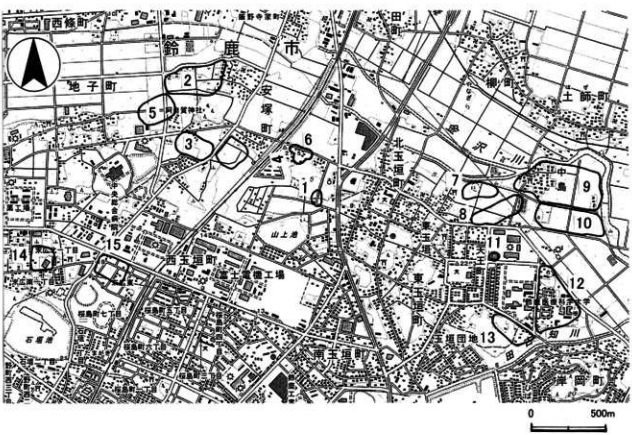
これまで述べてきた遺跡は、小塚遺跡から見て、ほぼ北側と南東方向に展開しており、鈴鹿川下流右岸の沖積地で施行された条里制区域と重なってくるものもある。

しかし、小塚遺跡から南に下ると、標高が高くなり、鈴鹿川による灌漑の限界を超えてくることもあって、溜池が多くなる。うち、いくつかは10世紀頃には掘削されていたとされ、耕地拡大に伴い改修が繰り返され、現在の姿となった。

さらに、近世末期、石垣遺跡周辺（当時の地名は稲生道）では大規模な開墾事業が行われ、荒蕪地が農地にかわり定住者が増えたとされている。

道伯台地上の道伯町、三日市町、末広町一帯は、周知の遺跡数も少なく２遺跡にとどまる。一つは石垣遺跡（14）である。遺物散布地で、中勢道路建設に伴う分布調査によって発見された中世の遺跡であるとされている。

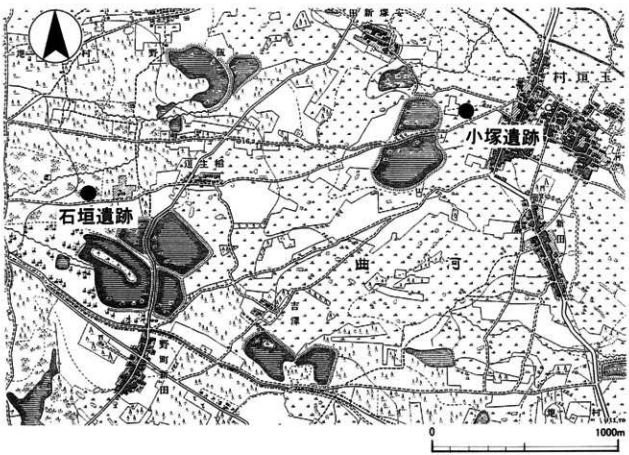
もう一つは稲生道遺跡（15）で、稲生道古墳群を包含する遺跡である。過去の記録によると、数基の古墳が存在していたとされるが、現在は削平を受けており分布状況は把握できない。平成21・24・25年度、住宅建築等に伴い、鈴鹿市教育委員会によって範囲確認調査が行われたが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。



1 小塚遺跡　2 起A遺跡　3 起B遺跡　4 起C遺跡　5 起西遺跡
6 北ノ添遺跡　7 深田遺跡　8 双ツ塚西方遺跡　9 中島遺跡　10 双ツ塚遺跡
11 塚越2号墳　12 天王遺跡　13 天王屋敷遺跡　14 石垣遺跡　15 稲生道遺跡

第１図　遺跡位置図（１：25,000）〔国土地理院「鈴鹿」１：25,000より作成〕

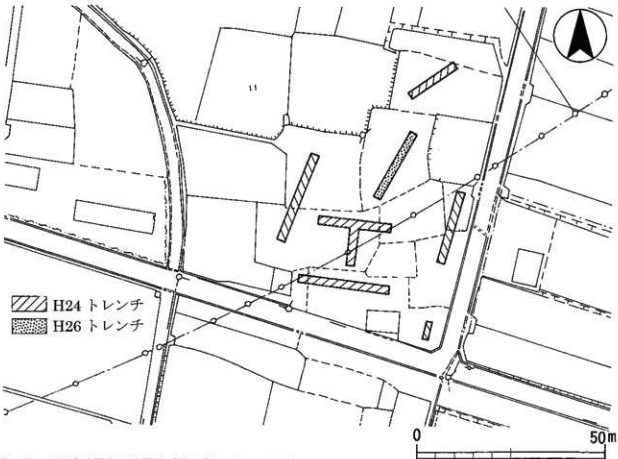
【参考文献】
・鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会『北ノ垣発掘調査報告書』 1994
・鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第１巻 1980
・鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第２巻 1980
・鈴鹿市教育委員会『天王遺跡（第５次）発掘調査報告』 2002
・玉垣郷土史研究会『玉垣郷土史』 2014
・三重県教育委員会『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1983
・弥永貞三・谷岡武雄『伊勢湾岸地域の古代条里制』 1979



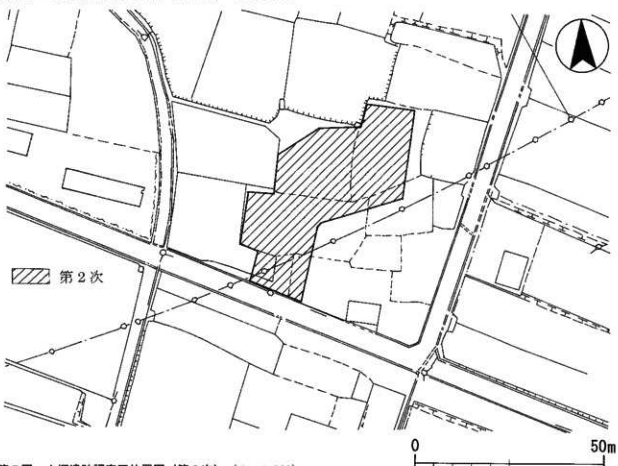
第２図　小塚遺跡・石垣遺跡周辺地形図〈明治時代〉（１：20,000）
〔二万分一地形図津近傍二号（共十三回）大日本帝国陸地測量部製作より作成〕

第３図　小塚遺跡周辺地形図（１：5,000）

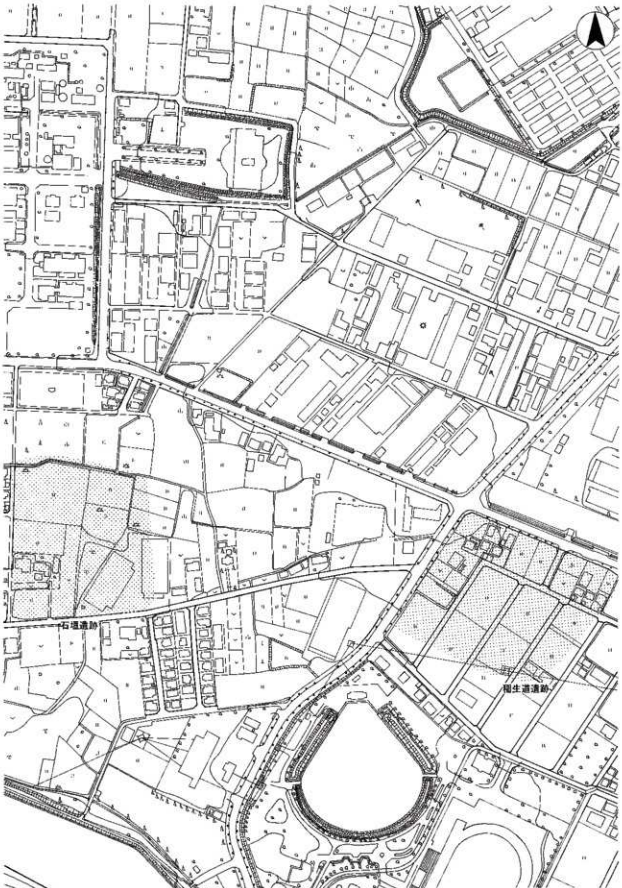
（2011　三重県共有デジタル地図（数値地形図2500）（三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て調整したもの（平成30年４月５日付け　承認番号：三総合地第１号））である。）



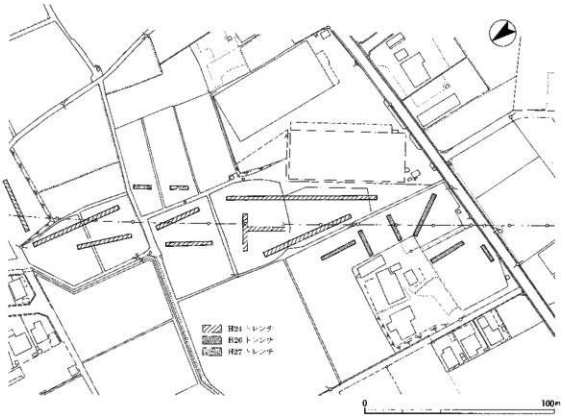
第４図　小塚遺跡調査区位置図〈第１次〉（１：1,000）



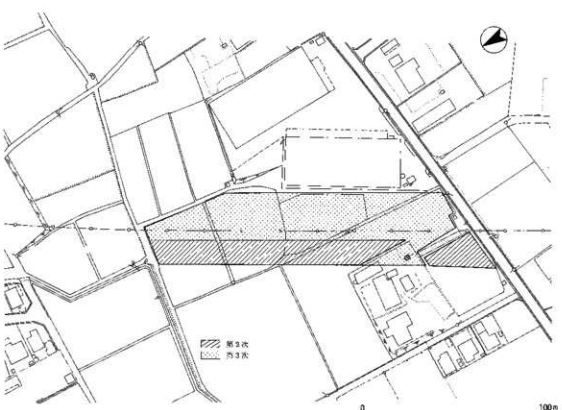
第５図　小塚遺跡調査区位置図〈第２次〉（１：1,000）



第６図　石垣遺跡周辺地形図（１：5,000）



第７図　石垣遺跡調査区位置図（第１次）（１：2,000）



第８図　石垣遺跡調査区位置図（第２・３次）（１：2,000）

2　小塚遺跡 - 遺構と遺物 -

a　遺構

小塚遺跡は、沖積地に所在している。標高は約10mで、周囲を水田や宅地がとりまき、それらより約１m高くなっている。かつては蜜柑が栽培されていた。

基本層序は、厚さ20cm程度の耕作土、その直下がにぶい橙色粘質土、いわゆる地山となっており、遺物包含層は存在しなかった。蜜柑畑をつくるに際し、削平した後、改めて耕作土を置いた可能性がある。地山上面で遺構検出を行なった。

調査の結果、溝４条、土坑数基、小穴多数が検出された。小穴は、主に調査区北部中央と北東部において確認された。いずれも径20～40cm、深さ約20cmと、小規模であること、配列が定まっていないことから柱掘形とは考えにくい。土坑も小穴同様に浅い上、遺物も出土しなかった。

ＳＤ１　長さ約25m、幅約１m、深さ約10cmである。主軸はＮ10°Ｅを指す。調査区南部からわずかに、東へ蛇行しつつも北へ延びている。

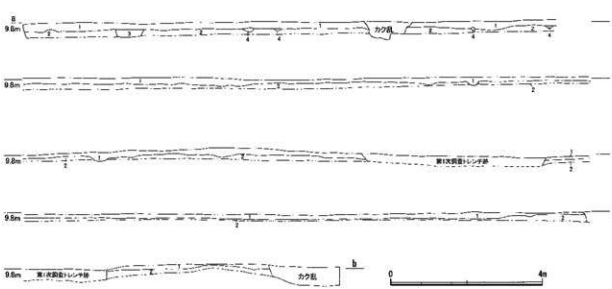
掘形は、内辺は立ち上がりが約35°と直線的であり、外辺は約25°前後で緩やかである。この溝からは土師器片、陶器片が出土しており、時期は17世紀前半と考えられる。

ＳＤ２　ＳＤ１から約６m西側で南北方向に検出された。長さ約８m、幅約50cmで、当初はＳＤ３にとりついて一連のものになるかと想定されたが、南側で途切れ、深さにおいても約５cmと極端に浅く、遺物も出土しなかった。

ＳＤ３　ＳＤ２の南側でＬ字状に検出された。長さ約６m、幅約１m、深さ約５cmである。遺物は出土しなかった。

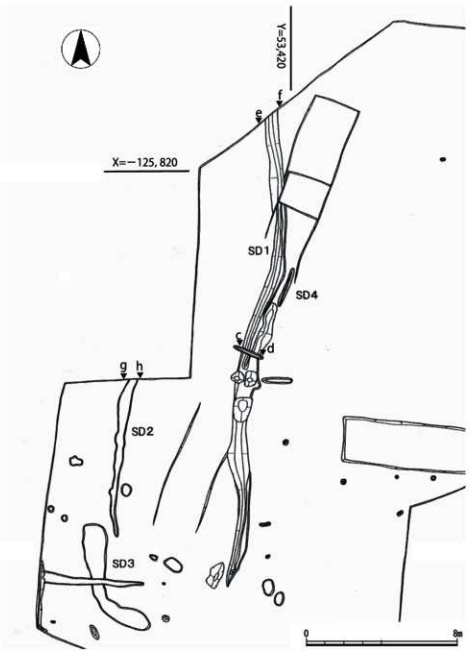
ＳＤ４　ＳＤ１の東側で検出され、長さ約２m、幅約40cm、深さ約５cmである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ１の性格については、第４節まとめで言及することとする。ＳＤ２・３・４は、それぞれ単体で存在し、ＳＤ１と明らかに異なる遺構と考えられるが、残存状況もよくないことから性格は不明である。

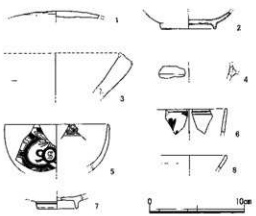


第９図　土層断面図①（１：100）

第10図　調査区平面図（1：200）



第11図　ＳＤ１～４平面図（１：200）、土層断面図②（１：40）



第12図　出土遺物実測図（１：４）

b　出土遺物

遺物の包含は希薄であり、出土遺物も大部分小片で口径を復元できるものも少ない。近世の陶磁器が大半を占めている。

１は須恵器の蓋としたが、無高台の杯の可能性もある。外面ロクロケズリである。２・３は近世陶器である[1]。

２は美濃産陶器の皿である。３は常滑の鉢である[2]。４は近世の土師器で羽釜かと思われる。

５は近代磁器、６・７は近世磁器で、全て肥前産の染付碗である。８は美濃産陶器の灯明皿である。

【註】

（１）愛知県『愛知県史　別編窯業２　中世・近世　瀬戸系』 2007

（２）愛知県『愛知県史　別編窯業３　中世・近世　常滑系』 2012

報告書番号	実測番号	器種等	産地	地区	遺構	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存(12分割中)	備　考
1	00101	須恵器杯蓋	—	一次E ﾄﾚﾝﾁ	—	—	やや密(～2mm砂粒含)	良	灰（10Y6/1）	1	
2	00102	陶器皿	美濃	F5	SD1	底5.7	やや密(～1mm砂粒含)	良	素地：浅黄橙(7.5YR8/4) 釉：浅黄（7.5Y7/3）	底4	御深井焼 登窯第２小期 高台貼付ナデ 外面底部に円錐ピン
3	00103	陶器鉢	常滑	H5	SD1	—	やや粗(～3mm砂粒含)	良	にぶい橙（7.5YR6/4）	小片	中野氏編年2類
4	00104	土師器羽釜？	—	H3	SD2	—	やや密(～2mm砂粒含)	良	橙（5YR6/6）	小片	近世
5	00105	磁器染付碗	肥前	表土	—	10.8	密	良	白地に青	口～体2	近代 施釉 銅版転写による施文
6	00106	磁器染付碗	肥前	表土	—	—	密	良	白地に青	小片	近世 施釉
7	00107	磁器染付碗	肥前	表土	—	底4.2	密	良	白地に青	底2	近世 施釉
8	00108	陶器灯明皿	美濃	表土	—	—	やや密(～1mm砂粒含)	良	釉：暗赤褐（10R3/3） 素地：灰白（2.5Y8/2）	小片	18世紀 施釉

第１表　出土遺物観察表

3　石垣遺跡 - 遺構と遺物 -

a　遺構

基本層序は、褐色粘質土である耕作土から約20～30㎝直下が黄褐色粘質土の地山となる。遺物包含層は存在しなかったため、地山上面で遺構検出を行なった。

調査の結果、溝７条、土坑２基と小穴が多数検出された。小穴は、調査区全体にわたって確認されたが、いずれも径50㎝前後、深さ約20㎝と、小規模であること、配列が定まっていないことから柱掘形とは考えにくい。また、土坑については規模・形状とも様々であった。遺物の出土がほとんどなかったこともあり、性格については不明である。これら各種遺構の埋土はいずれも１層であった。

ＳＫ１　長軸約3.2m、短軸約0.8mの土坑である。平面形は、不定形（Ｙ字形）ある。埋土は黒褐色粘質土で、土師器羽釜鍔部１点が出土した。時期は中世まで遡ると考えられる。

ＳＤ２　長さ約26m、幅約１m、深さ約20㎝の溝で、約10°東へ振りつつ、ほぼ南北方向に延びて、北側でＳＤ３にとりついている。東側に所在するＳＤ５とほぼ平行である。埋土は褐色粘質土で、磁器片１点と瓦片数点がまとまって出土した。時期は近世と考えられる。

ＳＤ３　長さ約12m、幅約50㎝、深さ約15㎝の溝である。埋土はＳＤ２と同じで、南側に所在するＳＤ５と平行しながら、東西方向に延びている。

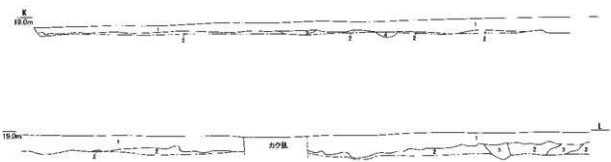
ＳＫ４　径1.4m、深さ約50㎝のほぼ円形の土坑である。埋土は褐色粘質土で、陶器片が出土した。

ＳＤ５　東西方向は、北側で長さ約16m、幅約25㎝、深さ約20㎝、南側で長さ約13.5m、幅約50㎝、深さ約20㎝、南北方向は、長さ約19m、幅50㎝、深さ約20㎝である。Ｌ字の形状を呈している。埋土は暗褐色粘質土で、常滑焼の陶器片が出土した。時期は17世紀後半と考えられる。

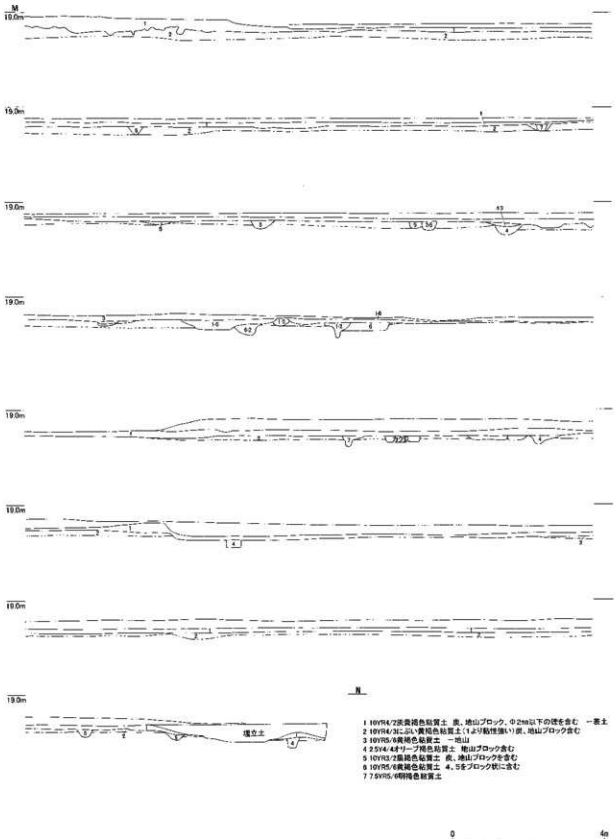
ＳＤ６　最も北側に所在し、長さ約23m、幅約１m、深さ約10㎝の溝である。埋土は暗褐色粘質土で、磁器片が出土した。

ＳＤ７　長さ約３m、幅約40㎝、深さ約10㎝の溝である。埋土は褐色粘質土である。時期は18世紀と考えられる。

ＳＤ８　長さ約４m、幅約80㎝、深さ約20㎝の溝である。埋土はＳＤ７と同様であり、一連のものと考えられる。



第13図　土層断面図①（１：100）



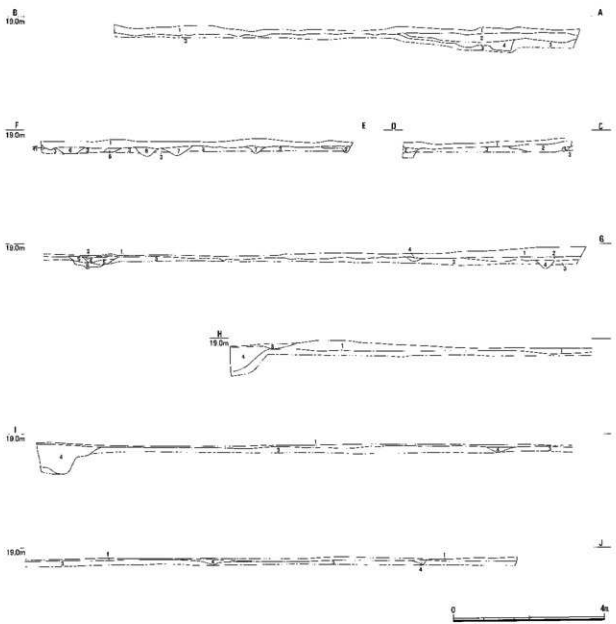
第14図　土層断面図②（1：100）

第15図　調査区平面図（1：500）

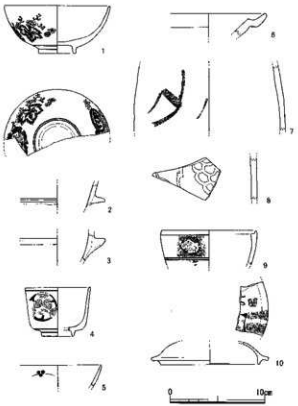
ＳＤ９　長さ約17m、幅約50cm、深さ約20cmの溝で、埋土は褐色粘質土で、陶器が出土した。

ＳＤ３・６・７・８・９は、全て南へ５～８°振りながら、東西方向に向きを揃えて検出された。

これらにＳＤ５を加えた遺構は、耕作地を区画する溝であると考えられるが、開削された明確な時期については、出土遺物が少ないこともあって、判然としなかった。



第16図　土層断面図③（１：100）



第17図　出土遺物実測図（１：４）

b　出土遺物

遺物の包含は希薄であり、出土遺物も大部分小片で口径を復元できるものも少ない。近世・近代の磁器や陶器が多い。１は近代の磁器染付碗で、瀬戸・美濃産かと思われる。４・５・９は近世肥前産磁器で、４は染付小杯、５・９は染付碗である。

２・３は近世土師器羽釜である。２については、鍔部と体部の剥離痕や体部に貼り付けた跡が見られる。６は瀬戸産陶器擂鉢で、登窯第５小期に該当する[1]。７は近代美濃産陶器徳利である。８・10は近代施釉陶器である。10は陶器蓋である。

【註】

（１）愛知県『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世瀬戸系』 2007

報告書番号	実測番号	器種等	産地	地区	遺構	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存(12分割中)	備　考
1	00101	磁器染付碗	瀬戸・美濃	一次Bトレンチ	—	11.2	密	良	白地に青の染付	5	近代 外面に施釉
2	00201	土師器羽釜	—	D-f10	SK1	—	密	良	にぶい橙（7.5YR7/4）	小片	近世
3	00202	土師器羽釜	—	D-f11表土	—	—	密	良	にぶい橙（7.5YR7/4）	小片	近世
4	00203	磁器染付小杯	肥前	D-g10撹乱溝	—	6.8	密	良	白地に藍	4	近世 施釉
5	00204	磁器染付碗	肥前	D-d13	SD2	—	密	良	白地に藍	小片	近世 施釉
6	00205	陶器擂鉢	瀬戸	A-w16	SD5	—	密	良	釉：明赤褐（5YR5/6） 素地：にぶい黄橙(10YR7/4)	小片	登窯第５小期 施釉
7	00206	陶器徳利	美濃	A-u17	SK4	—	密	良	釉：灰白（5Y7/1） 鉄釉：黒（2.5Y2/1） 素地：灰黄（2.5Y7/2）	体1	近代 施釉
8	00301	陶器	—	表土	—	—	密	良	釉：黒褐（7.5YR3/2） 素地：灰黄(2.5Y7/2)	小片	近代 施釉
9	00302	磁器染付碗	肥前	A-u21	SD8	10	密	良	白地に藍	口1	近世 施釉
10	00303	陶器蓋	—	A-v24撹乱溝	—	10.4	密	良	釉：透明 素地：灰白(2.5Y8/2)	口1	近代 施釉

第２表　出土遺物観察表

4　まとめ

a　小塚遺跡

道伯台地上は遺跡分布密度が低い。とりわけ、起C遺跡から深田遺跡にかけての北玉垣町一帯は空白地帯であった。こうした中、中勢道路建設事業に伴って、昭和58年度に分布調査が行われ、微高地になる畑を中心に須恵器・青磁・中世土器片の散布が確認され、新たな遺跡として小塚遺跡が発見された。

小塚遺跡から約250m北西に所在した北ノ添遺跡も平成３年９月まで周知されておらず、開発行為に伴って発見された遺跡である。約450㎡の発掘調査によって、弥生時代から古代までの複合遺跡であることが確認された。近隣に所在する両遺跡の共通点として、立地環境があげられる。北ノ添遺跡は周囲をとりまく水田の中に、島状に残された畑地の南縁に所在した。水田との比高差１～1.5mである。小塚遺跡も、北ノ添遺跡同様水田に囲まれた微高地上に所在していたが、遺構密度については差異がある。

北ノ添遺跡では、弥生時代の竪穴住居３棟、古墳時代では、古墳３基（周溝のみ）・竪穴住居１基・土壙墓１基、古代の掘立柱建物を想起させる柱穴群・土坑３基・溝２条と、多様な年代、多種多彩の遺構が検出されている。とりわけ古代の溝２条のうち１つは、幅0.8m、深さ15㎝を測り、付近で検出された柱穴群や土坑と共に一連と捉えられている。そして、向きはほぼ南北方向、時期は土坑出土の山茶椀の編年から12世紀中葉前後、性格は屋敷地の東端に所在する区画溝と位置づけられている。

小塚遺跡は、北ノ添遺跡に比べて遺構密度が低く、溝４条と土坑と多数の小穴の確認にとどまった。溝は西側で集中して検出された。その中で、南北方向に延びるＳＤ１については、削平を受けて深さが10㎝前後と非常に浅く、また、出土遺物は少量であった。平面形や断面形等を観点として、北ノ添遺跡で検出された古代の溝と比較検討した結果、耕作に伴う溝というよりは、屋敷地を区画する溝の可能性が考えられた。しかし、ＳＤ１の西側付近では、住居跡につながる小穴や土坑の検出は希薄であった。さらに西側の調査区外で現在、溜池になっている辺りに集落が営まれていた可能性も考えられる。明確な時期については言及できないが、出土した陶器や磁器の年代観から中近世と考えられる。

b　石垣遺跡

鈴鹿市は、昭和17年12月１日に発足した。石垣遺跡が所在する鈴鹿市末広北１丁目一帯は、鈴鹿市制前は、河曲郡玉垣村字稲生道（江戸時代から明治22年まで）、河芸郡同村同字（明治22年から昭和17年まで）と称した。この字名は、石垣遺跡の東方約300mの地点を南西から北東にかけて貫いている現在の県道上野鈴鹿線に起因するものと考えられる。この道は、江戸時代には「いなふ道」と呼ばれていた。四日市の追分で東海道と分岐し、神戸を過ぎてからは、道筋を海岸近くにとって、南下して伊勢に向かう近世伊勢街道に比べ、肥田－野町－稲生－秋永－円応寺－上野－一身田といったように、内陸側を通っている。鈴鹿市神戸地子町に所在する石の道標に「右いなふ道左志ろこ道」（元禄二巳年二月二十日）とあることから、遅くとも江戸時代前期には道の名称として周知されていたものと窺われる。

このように稲生道は古くから人や物の往来に使われていた。しかしながら、付近に人家は少なく、松林と雑草の生い茂る平地の山林地帯であった。開発についての記録が現れてくるのは江戸時代以降である。主な事例として、次の２つがあげられる。一つは、寛永７年（1630）、紀州初代藩主徳川頼宣が鷹狩りのため、紀州藩領である稲生道を通った時、人家のないことを淋しく思い、人家10戸を移して付近を開発させ、無年貢の特権を与えたとある。この地は現在の野町にあたり、石垣遺跡から南東へ１kmほど下ったところである。開発された水田は野町新田と称される。もう一つは、嘉永元年（1848）、庄屋玉置氏が生活に困窮している村民10余戸に住居を与え、稲生道開墾事業を進めたとされ、石垣遺跡付近に顕彰碑が立っている。両事業をきっかけとして、稲生道一帯では、荒蕪地が農地にかわり定住者が増えたとされている。しかし、石垣遺跡が、両事業の

範囲に含まれるかどうかについては、文献から読み取ることはできない。

小塚遺跡から石垣遺跡、さらに南へかけての一帯は中高位段丘上に立地し、農業に際し、水の確保が重要であり、石垣池・山上池など、多くの溜池が開削されている。現在は、そのうちいくつかが埋め立てられて公園や住宅地に変わっているが、10余りあったとされる。開削等の時期についての史料は、江戸時代からのものである。それ以前のものは存在しないので、明言できないが、10世紀頃に遡るとも伝されている。このあたりには大きな河川がない上、土地の起伏から鈴鹿川や中ノ川などから灌漑することが出来なかったため、古くから、溜池開削を耕地開発と同時に進めていったものと思われる。

今回の調査で、住居跡を検出することはできなかった。しかし、溜池の規模や数、及び人々の往来があった「いなふ道」の存在から、石垣遺跡をとりまく環境は、古来より農業生産を伴う人々の営みを容易に推察できる。

石垣遺跡で検出された数条の溝の方向や規模、及び近世以降のものが主体を占めた出土遺物から、近世に始まった耕作が近代以降の大規模な開墾事業によって一度削平され、再度拡充・構築されたのではないかと推察される。

【参考文献】

・栄公民館郷土誌サークル『ふるさと栄』 2015
・社団法人　鈴鹿青年会議所『鈴鹿市の歴史』改訂版 1992
・鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第２巻　1980
・鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会『北ノ垰発掘調査報告書』 1994
・玉垣郷土史研究会『玉垣郷土史』 2014
・平凡社『日本歴史地名大系第24巻　三重県の地名』 1983

写 真 図 版

写15　ＳＸ30（西毛谷北５号墳）の調査（北東から）

写16　調査前状況（北から）

写17　西毛谷北古墳調査前状況（南西から）

写18　第３次　調査区遠景（西から）

写19　第３次　調査区遠景（南西から）

写20　第３次　調査区遠景（北から）

写21　第４次　調査区遠景（南東から）

写22　第１次　Ｔ－２区（南東から）

写23　第１次　Ｔ－３区（東から）

写24　第１次　Ｔ－５区（東から）

写25　第１次　Ｔ－６区（東から）

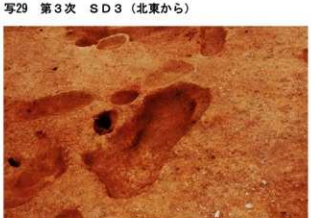
写26　第１次　Ｔ－７区（東から）

写27　第３次　調査区全景（北東から）

写28　第３次　ＳＤ２・３（北西から）

写29　第３次　ＳＤ３（北東から）

写30　第３次　下層確認トレンチ（北東から）



写31　第４次　ＳＸ25（東から）

写32　第４次　調査区全景（真上から）

写33　第４次　ＳＸ27・28（６号墳）（北東から）

写34　ＳＸ27（６号墳主体部）（北から）

写35　ＳＸ28（６号墳）北周溝土層（東から）

写36　ＳＸ30柱穴13粘土検出状況（東から）

写37　ＳＸ29・30（５号墳）（東から）

写38　ＳＸ29（５号墳）西周溝土層（北から）

写39　ＳＸ29（５号墳）北周溝土層（西から）

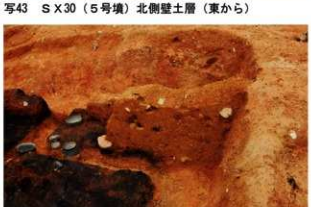
写40　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土（西から）

写41　ＳＸ30（５号墳）土層（南東から）

写42　ＳＸ30（５号墳）土層（北東から）

写43　ＳＸ30（５号墳）北側壁土層（東から）

写44　ＳＸ30（５号墳）奥壁土層（北から）



写45　ＳＸ30（５号墳）埋積状況（東から）

写46　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土（南東から）

写47　ＳＸ30（５号墳）炭・焼土（東から）

写48　ＳＸ30（５号墳）遺物出土状況（南東から）

写49　ＳＸ30（５号墳）遺物出土状況（南東から）

写50　ＳＸ30（５号墳）入口側遺物出土状況（南東から）

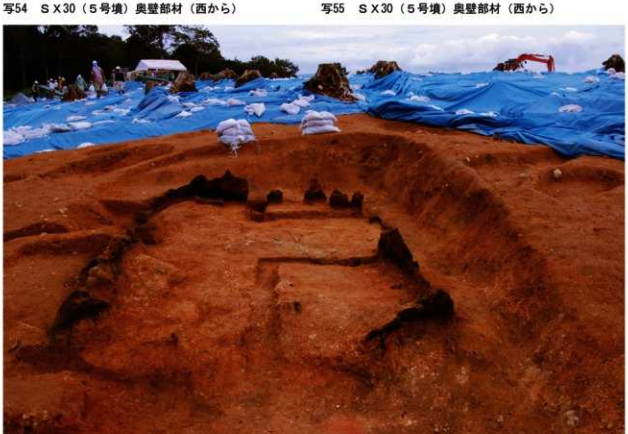
写51　ＳＸ30（５号墳）奥壁側遺物出土状況（北東から）

写52　ＳＸ30（５号墳）耳環（44）（北から）

写53　ＳＸ30（５号墳）耳環（46）（北東から）

写54　ＳＸ30（５号墳）奥壁部材（西から）

写55　ＳＸ30（５号墳）奥壁部材（西から）



写56　ＳＸ30（５号墳）側壁検出状況（南東から）

写57　ＳＸ30（５号墳）（南東から）

写58　ＳＸ30（５号墳）（北西から）

写59　ＳＸ33（北東から）

写60　ＳＸ33出土状況（西から）

写61　ＳＸ33最下部出土状況（北から）

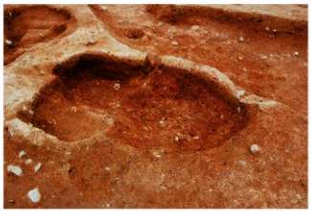
写62　ＳＸ47（４号墳）西周溝土層（南から）

写63　ＳＸ47（４号墳）北周溝土層（西から）

写64　ＳＸ47（４号墳）（西から）

写65　ＳＸ48（３号墳）（西から）

写66　ＳＸ48（３号墳）北周溝土層（西から）



写67　ＳＸ49（北から）

写68　ＳＸ49半截（北から）

写69　ＳＸ49（53・54）（北東から）

写70　ＳＸ49出土状況（北から）

写71　ＳＸ55（東から）

写72　ＳＫ52（南西から）

写73　ＳＫ53（東から）

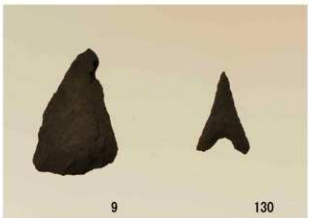
写74　Ａ－Ｋ７　Ｐｉｔ１（南から）

写75　ＳＸ41（東から）

写76　ＳＸ41（北から）

写77　ＳＸ26（南から）

写78　ＳＸ26断面（南から）



写79　出土遺物１

写80　出土遺物２

25

30 俯瞰

31

30

32

33

34

35

写81　出土遺物３

写82　出土遺物４

50 表

50 裏

53

53

53 接合部

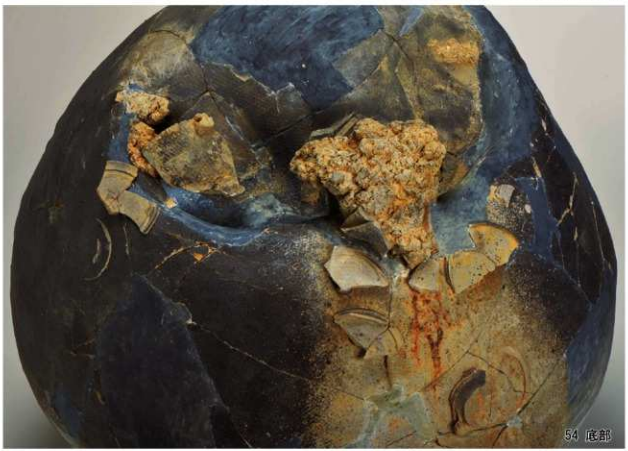
写83　出土遺物５

53 肩部割れ口

53 底部

54

写84　出土遺物６



写85　出土遺物７

64

65

66

67

68

44

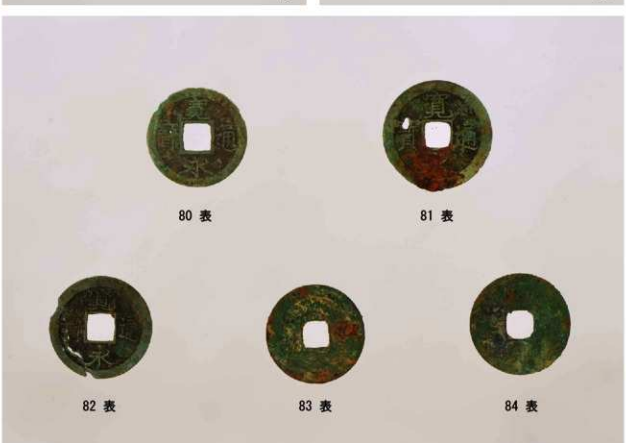
45

46

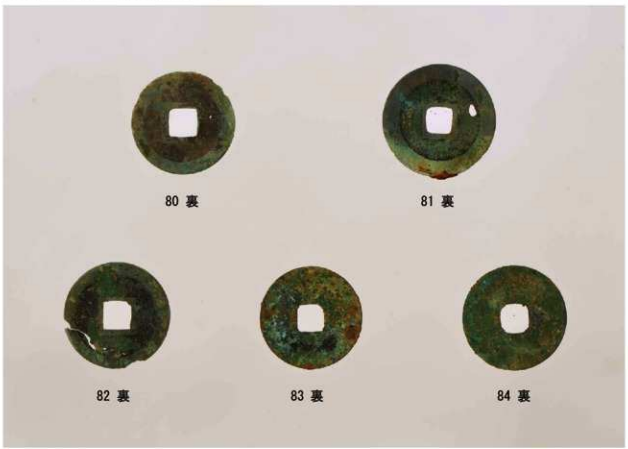
写86　出土遺物８

写87　出土遺物９

写88　出土遺物10



写89　出土遺物11



写90　出土遺物12

写１　小塚遺跡調査区全景（南西上空から）

写２　小塚遺跡調査区全景（垂直上空から）

写３　小塚遺跡ＳＤ１（南から）

写４　小塚遺跡ＳＤ１北端断面（南から）

写５　石垣遺跡第２次調査区全景（南上空から）

写６　石垣遺跡第３次調査区全景（南上空から）

写７　石垣遺跡第２次調査区　南区東半全景（北から）

写８　石垣遺跡第２次調査区　南区西半全景（北から）

写9　石垣遺跡第２次調査区　ＳＤ６（北から）

写10　石垣遺跡第３次調査区　ＳＤ５・６（北から）

写11　石垣遺跡第３次調査区　ＳＤ５・９（南西から）

写12　石垣遺跡第３次調査区　（北から）

写13　小塚遺跡出土遺物

写14　石垣遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどう２３ごうちゅうせいどうろ（４・７こうく）けんせつじぎょうにともなう にしもうたにえーいせき・にしもうたにきたこふんぐん・こづかいせき・いしがきいせき　はっくつちょうさほうこく
書名	一般国道２３号中勢道路（４・７工区）建設事業に伴う 西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群・小塚遺跡・石垣遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－３５
編著者名	長谷川哲也、原田恵理子、小原雄也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡　0596（52）1732
発行年月日	西暦2018年　１１月３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西毛谷Ａ遺跡・ 西毛谷北古墳・ 西毛谷北3～6号墳	三重県津市 河芸町杜の街	201	c170・ c1・ c174～c177	34° 49′ 25″	136° 31′ 51″	1次:2014. 8. 22 ～2014. 9. 18	1,100	一般国道23号 中勢道路 建設事業
						2次:2014. 10. 17 ～2015. 2. 12	1,516	
						3次:2015. 4. 27 ～2015. 12. 14	4,558	
小塚遺跡	三重県鈴鹿市 北玉垣町	207	1161	34° 51′ 52″	136° 35′ 45″	1次:2012. 12. 7 ～2012. 12. 13	240	
						1次:2014. 10. 14 ～2014. 10. 14	40	
						2次:2016. 9. 15 ～2016. 12. 14	1,133	
石垣遺跡	三重県鈴鹿市 末広北１丁目	207	1162	34° 51′ 40″	136° 33′ 55″	1次:2012. 12. 17 ～2012. 12. 28	660	
						1次:2014. 10. 14 ～2014. 10. 17	210	
						1次:2015. 11. 13 ～2015. 11. 27	40	
						2次:2015. 10. 16 ～2016. 2. 3	1,982	
						3次:2016. 4. 20 ～2016. 9. 1	4,119	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西毛谷Ａ遺跡	遺物散布地	飛鳥 平安 江戸	墓、溝、土坑等	須恵器、有蓋長胴棺、灰釉陶器、陶器、釘、キセル	
西毛谷北古墳	古墳	飛鳥	なし	なし	相応する遺構は確認出来なかった。
西毛谷北３号墳			古墳周溝	須恵器	
西毛谷北４号墳			古墳周溝	須恵器	
西毛谷北５号墳			古墳周溝、 主体部（横穴式木室）	周溝　：須恵器 主体部：耳環３点、 須恵器	主体部は火化された横穴式木室である。
西毛谷北６号墳			古墳周溝、 主体部（土壙墓か）	なし	
要約	中ノ川と田中川に挟まれた標高約40～45mの丘陵上に立地する。現況は山林である。 概ね標高40m前後となる南側緩斜面で飛鳥時代の方墳４基（横穴式木室１基、木棺直葬１基、周溝のみ２基）、墓４基（木棺直葬墓２基、土器棺墓２基）、飛鳥時代の土坑１基、平安時代の墓１基、近世墓１基等を確認した。				
小塚遺跡	遺物散布地	近世	溝、土坑、小穴	磁器、陶器、土師器、瓦	
石垣遺跡	遺物散布地	近世	溝、土坑、小穴	磁器、陶器、土師器、瓦	
要約	小塚遺跡は沖積地に立地し、調査区西側で屋敷地に伴う中世の区画溝の一部が確認された。 石垣遺跡は、小塚遺跡から南西約２kmの低中段丘上に立地し、主に東西南北に向きを揃えた耕作地を区画する溝が数条確認された。時期は不明である。				

※数字のみは、Pit 番号を示す

附図　西毛谷 A 遺跡・西毛谷北古墳群　調査区平面図（1：200）

『西毛谷 A 遺跡・西毛谷北古墳群・小塚遺跡・石垣遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2018 年 11 月

三重県埋蔵文化財調査報告　１１５－３５

一般国道２３号中勢道路（４・７工区）建設事業に伴う

西毛谷Ａ遺跡・西毛谷北古墳群・小塚遺跡・石垣遺跡発掘調査報告

2018（平成30）年11月30日

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　共立印刷株式会社